

乱歩東海随筆

パイロット版

目次

中学卒業まで

津、名張、龜山、名古屋

父母のこと

七十年前の父の写真

私の履歴書

一頁自伝

私が探偵小説に心酔するに至った経路

私の探偵趣味

涙香心酔

人形

祖母に聞かされた怪談

私は、犯罪者の素質を持っていた

恋と神様

一頁自伝

幻影の城主

私の履歴書

わが青春記

彼

故郷に夏ありき

涙香心酔

国家ごっこ

押川春浪

故郷の味

海草美味

味オンチ

カステーラ・ノスタルジア

こわいもの

ビイ玉

一行随筆

サイクルおしやれ時代

中学一年の僕

レンズ嗜好症

内気少年の冒険

私の探偵趣味

「幽霊塔」の思い出

涙香心酔

筆だこ

活字との密約

活字と僕と 年少の読者に贈る

幻影の城主

人類史の一飛び

乱歩打明け話

旅順海戦館

準名古屋人

うつし絵

「人外境」感想

「破天荒」感想

私の読書遍歴

影響を受けた本

わたしの古典

槐多「二少年図」

探偵映画往来

わが青春の映画遍歴

私の十代

涙香心酔

父母のこと

父母のこと

六十二歳

1957・8・25
抜粋

私の父、平井繁男は慶応三年二月三日、三重県津市において、七代、杵右衛門陳就とその後妻和佐とのあいだに生まれた。この私の祖父陳就は、同人自筆の系図帳記事によると、元治元年三月大和（奈良県）の領地の加判奉行を命ぜられ、その地に引き移って、同領内三か所の山陵御修覆御用掛り頭取を勤め、慶応二年、その功により朝廷より白銀五枚拝領している。そして、同年四月に津へ帰って、津加判奉行に転じているが、私の父繁男はその前後に祖母の腹に宿ったのであろう。

慶応は父の生まれた三年で終わって明治になった。その明治二年には、祖父は藤堂家の民政會計主事や内務會計主事などという新しい名称の役をお受けつかっているが、父の直話によると、四、五歳のころ、袴をはいて祖父につれられ御殿で殿様にお言葉を賜ったことがたびたびあるというから、廃藩置県のことにも、まだ古風な仕来りは残っていたのであろう。祖父は明治三年に藤堂家の家扶となり、翌四年隠居を願い出て引退している。その四年には父は数え年五歳にすぎなか

初出・底本 わが夢と真実
／昭和三十三年八月 東
京創元社

加判奉行 加判は公文書に判を加える意で、それだけの権限を有する重職。津藩には伊勢、伊賀両国のほかに領地があり、陳就は元治元年（一八六四）三月、山城国（京都府）と大和国（奈良県）の領地を担当する城和加判奉行を拜命した。奉行所は大和の古市（奈良市古市町）にあった。

藤堂家 慶長十三年（一六〇八）から明治四年（一八七二）の廃藩置県まで十二代にわたって津藩を治めた。藩祖の高虎は近江国（滋賀県）に生まれ、豊臣秀吉に仕えたあと徳川家康に重用された。

った。

祖父の正妻は藤堂家の息女で、文久三年に没している。私の祖母は京都の寺侍の本間氏の娘で、祖父が大和奉行在勤中に娶られたものだが、殿様の息女のを襲うことを遠慮して、当時の仕来りとして妾と名づけられていた。しかし事実は後妻なのである。そういうわけで、父には正妻の腹の兄や姉がたくさんあった。その長男は平井陳常というもので、八代目をついだが、その陳常の孫が平井進といつて、今も津市に在住し、これが私の本家なのである。

その八代陳常の弟に一人のアブレものがあり、隠居している祖父や実兄の家から金品を持ち出して蕩尽したようなこともあって、祖父は財産を失い、父は藤堂家御出入りの豪商の家に預けられて成人した。祖父が没したのは明治十七年、父の数え年十八歳のときである。それから祖母と母一人子一人の暮らしとなった。父には一人の弟があつたが、これは津市の商家に養子にやられていた。

父は津市の塾のようなところで初等教育を受けたのだと思うが、向学のころざし強く、苦学を覚悟して、当時大阪に創立された関西法律学校（今の関西大学の前身）に入った。父に去られた祖母は、津市の藤堂家のお寺の食客となり、父の成業を待ったのである。

関西法律学校の三年余の課程を経て卒業したのは明治二十

殿様 陳就は天保五年（一

八三四）、家督を相続し、

十一代藩主・高猷に仕え

た。高猷は文政八年（二

五）、前年死去した父の

跡を継ぎ、明治四年（七

一）まで藩主を務めた。

祖父 文化七年（一八一

〇）生まれ。明治十七年

（八四）一月二十三日死

去。津の浄明院に葬る。

正妻 高允の娘、法号・静

妹院。文久三年（一八六

三）一月二十九日死去。

浄明院に葬る。高允は十

代藩主・高兎の弟。

祖母 天保十一年（一八四

〇）七月十日生まれ。明

治四十四年（一九一一）

七月十四日死去。浄明院

に葬る。

関西法律学校 明治十九年

（一八八〇）十一月、大

阪西区京町堀の願宗寺で

開校し、同三十八年（一

九〇五）、関西大学に改

称した。本部は大阪府吹

田市にある。

二年の夏であった。第一回の卒業生である。一昨昭和三十年に、関西大学は七十周年の祝典を催したが、そのとき出版せられた「関西大学七十年小史」という写真版の多い冊子には、同大学第一回卒業生の記念写真がのつていて、その十一人の卒業生の中に私の父、平井繁男も並んでいる。

父は大学を卒業しても国に帰らず、勉強をつづけた。学校の助手のようなことをやっていたのかもしれない。また、原稿も書いただろうし、政談演説もやったようである。父は私と違って五尺そこそこの小男であったが、からだに似ぬ声量があり、なかなかの雄弁家だったらしい。

しかし、一人で国に待っている祖母は、父が卒業しても帰ってこないのので、淋しさから癪しゃくをおぼえ、絶えずその発作がおこるようになったので、父は仕方なく学業を抛なげつて、就職をして祖母と同居する決心をし、同じ三重県の名張町（今は名張市）にあつた名賀郡の書記を拝命した。それは卒業後三年を経た明治二十五年のことであつたと思う。そして、翌二十六年には妻をめとつている。これも祖母の懇請こんせいによつたものであろう。

母は津市在住の同じ藤堂藩士の本堂家から迎えられた。藩士といつても、千石取りの私の祖父に比べては微禄びろくの家であつたが、母は娘時代に行儀見習いのために、津に近い一身田いしんでんの本願寺の小間遣こまづかいを勤めていた。一身田のお寺は格式が高

記念写真

関西大学公式サイト「年史編集室」に

は「第1回卒業証書授与式（明治22年9月16日）」の写真が掲載されている。
<http://www.kansai-u.ac.jp/nenshi/story/detail.php?cd=3&nm=1>

名張町

名張町新町に明治二十八年（一八九五）六月まで居住。

今は、底本「今日」を改めて。

名賀郡

当時は名張郡。明治二十九年（一八九六）、名張郡と伊賀郡が合併して名賀郡が発足した。郡役所は同二十七年、名張町の鍛冶町から丸之内に移転。

一身田の本願寺

真宗高田派本山、専修寺（津市一身田町）。

く、法主^{ほりず}には代々皇族を迎えたもので、その夫人を「お裏さん」と呼び、母はそのお裏さん付きの小間遣いであつた。

お裏さんも名家から嫁したもので、藤堂家の息女なども、たびたびお裏さんに坐つていと思うが、藤堂家の歴史『宗国史』によると、前項「祖先発見記」にしろした平井の祖、於光^{おこう}の項に、「伊豆国平井徳右衛門信友女、母杉本氏也、仕于大通公（高次）、生大享公（高睦）及一身田夫人」とあるから、平井の血統からも一身田ゆかりの人が出ているわけ、偶然にも、母の経歴にはそういう関連があつたのである。

父母の結婚の仲人は津の親戚のもので、写真の見合いをしたという。まだ写真のめづらしいところで、母と母方の祖母は、父の写真の顔に点々として修正のあとがついているのを見て、この人はアバタがあるのではないかと心配したという一つ話もある。

もうあのへんにも汽車は通じていたが、津から名張町へは汽車がなく、母方の祖母は母をつれて山越えをして、歩いたり、馬にのつたりして、婚家へついたという。明治二十六年、父は数え年二十七歳、母は十七歳であつた。母の名は「きく」である。

その翌明治二十七年十月、私が生まれた。場所は前項「ふるさと発見記」に詳しい。

宗国史 津藩の藩政記録。

城代家老の藤堂高文が編纂し、序は宝暦元年（一七五二）。昭和五十四年（一九七九）、五十六年に上野市古文献刊行会が上下二巻本を刊行。於光は『宗国史外篇』の「外家伝上」に「嬖人平井氏」として記録されている。

嬖人は主君のお気に入り。の意。乱歩による引用の一部を読み下すと「大通公につかえ、大享公および一身田夫人をなす」。

結婚 挙式は明治二十六年（一八九三）七月二十五日。

汽車 明治二十二年（一八八九）、関西鉄道の三雲（滋賀県湖南市）・柘植（三重県伊賀市）間が開業。

母 明治十一年（一八七四）九月五日生まれ。

私 明治二十七年（一八九四）十月二十一日生まれ。本名・太郎。

七十年前の父の写真

1957・4
抜粋

関西法律学校の創立は明治十九年、第一回卒業生を出したのが明治二十二年、今からちょうど七十年前である。それから父が三重県名張町（今の名張市）の郡役所に就職したのが、私の生まれる前年、明治二十六年だから、卒業から四年ほどは、関西法律学校に残って勉強していたらしく思われる。法律者になるつもりだったか、あるいは高文こうぶんとか弁護士試験とかを受けるつもりであつたか、よくわからないが、ともかく学校にとどまっていたらしいのである。

それをあきらめて就職しなければならなかつたのは、母一人子の母（私からいえば祖母）が一人住居ずまいの淋しさに、ひどい癪しゃくを起こして、父に家庭を持つことを強要したからだということを、私は私の母から聞いている。そこで父は学問を捨てて郡書記となり、母を安心させ、母の希望に従つて、同じ三重県津市から私の母をめとつたのであつた。そして、私はその名張町で、明治二十七年十月に生まれている。

初出 きょうと 第七号／

昭和三十三年四月 きよ

うと発行所

底本 うつし世は夢／昭和

六十二年九月 講談社

高文 高等文官試験。

私の履歴書

私の先祖は伊勢の藤堂家とうどうにつかえたのだから、代々三重県津市に住み、私の父平井繁男しげおもそこで生まれたが、兄に道楽者があつて、祖父の没後、家産を失い、父は苦学して大阪の関西大学法学部を出た。第一回の卒業生である。

卒業の数年後、大阪の駿々堂しんしんどうから八百ページの大著『日本商法詳解』という本を著している。はじめ三重県名張町（今は市になつてゐる）にある名賀郡役所に勤め、同県龜山に転じ、のちに名古屋市に出て、東海紡織同盟会の書記長、名古屋商業会議所嘱託しよくたく、同市の財閥奥田正香商店まさかの支配人となつたが、明治三十年代の末から自立して、輸入諸機械販売、石炭販売の店をひらき、店員十数名を置いて一時ははなはだ盛んであつたけれども、明治四十五年に早くも破産し、朝鮮馬山マサに渡つて土地開墾の事業をはじめ、その後内地に帰つていろいろの仕事をしたが、大正十四年、かぞえ年五十九歳で没したときには、大阪の綿布問屋の名目重役であつた。

父は最初に勤めた三重県名張町の郡役所書記時代に母をめとり、明治二十七年、私はそこで生まれた。名古屋市に移つ

六十一歳

1956・5・3
◇
1956・5・10
抜粋

初出 日本経済新聞 五月

三〇号・十日号/昭和三十一年 全六回 日本経

済新聞社

底本 江戸川乱歩ワンダー

ランド/中島河太郎編

平成元年九月 沖積舎

龜山 鈴鹿郡龜山町。明治

二十八年（一八九五）六

月から十月まで「市之

坂」（現・亀山市市ヶ坂

町）、十月から同三十年

春まで「権現社/ソバ」

（不詳）に居住。

奥田正香 名古屋の経済界

をリードした実業家。弘

化四年（一八四七）、尾

張国生まれ。名古屋商業

会議所会頭などを務めた。

大正十年（一九二二）死

去。

馬山 慶尚南道の港灣都市。

現・昌原市の一部。

たのが私のかぞえ年四歳のとき、父が破産したのが私のかぞえ年十九歳、中学を卒業した年であった。それまでは何不自由のない豊かな暮らしであったし、祖母も健在だったので、幼時はお婆さん子として、甘やかされて育った、気の弱い内弁慶の子供であった。

父

大正十四年（一九二五）九月十日、大阪市外守口町（現・大阪府守口市）で死去。津市の浄明院に葬る。

一頁自伝

三十六歳

1930・11・1
抜粋

高台に町があつた。その石の鳥居のお宮さんに、祖母と遊んでいると、下の方からピイツと笛の音がして、おもちゃみたいな汽車がゴーツと走つて行つた、それがこの世で最初の記憶。二歳、伊勢の国亀山町在住の頃である。

初出 モダン日本 十一月
号／昭和五年 文藝春秋
社
底本 わが夢と真実／昭和
三十二年八月 東京創元
社
汽車 明治二十三年（一八九〇）、関西鉄道の柘植（三重県伊賀市）・四日市（同県四日市市）間が開通し、亀山駅（同県亀山市）が開業。

私が探偵小説に心酔するに至った経路

1949・夏
抜粋

私の探偵趣味は「絵探し」からはじまる。五、六才の頃、名古屋の私の家に、母の弟の二十にもならぬ若い小父おじさんが同居していて、その人が毎晩、私のために石盤に絵を描いて見せてくれるのだが、小父さんは好んで「絵探し」の絵を描き、私にその謎をとかせたものである。枯れ枝などが交錯しているのを、じつと眺めていると、そこに大きな人の顔が隠れていたりする。この秘密の発見が、私をギョツとさせ、同時に狂喜せしめた。その感じは、後年ドイルや、ことにチェスタトンを読んだ時の驚きと喜びに、どこか似たところがあった。少年の頃「絵探し」を愛した人は多いであろうが、私はおそらく人一倍それに夢中になったのだと思う。問答による謎々や、組み合わせ絵（ジググソウ）や、迷路の図を鉛筆で辿る遊びや、後年のクロスワードなどよりも、私にはこの「絵探し」が、何気なき風景画の中から、ポーツと浮かび上がって来る巨人の顔の魅力が、最も恐ろしく、面白かった。

初出・底本 探偵小説四十年（上）／平成十八年一

月 光文社 ＊新保博久

「解題」に収録。昭和二

十四年夏、連載「探偵小説三十年」の冒頭として

執筆された草稿

執筆された草稿

執筆された草稿

五、六歳の頃 数え年五、六

歳は明治三十一年（一八九八）から翌年。

九八）から翌年。

小父さん 明治三十年（一八九七）春から同年末

までは翌三十一年初めまで

住んだ家とそのあと三十二年

一年末まで住んだ家に母

の弟・本堂三木三が住んで

いた。乱歩は満二歳から

四歳。

石盤 底本「石盤」を改め

た。

た。

私の探偵趣味

三十一歳

1926・6・1
抜粋

血というものは争われないもので、私の母親が大の探偵小説好きだったことは、いささか面白い。私の五、六歳の頃、父親が勤め人で、留守中はひまだものだから、祖母はお家騒動か何かの、母親は涙香物の、貸本を借りて来て、こたつにあたりながら読んでいたのを覚えている。

私はそばに寝ころんで、よくその話を聞いたものだ。そういうふうにして探偵趣味者に養成されているあいだに、小学校に入り、確か三年に進んだ時であった。学芸会というものがあつて、私は生徒や父兄の前でお話をさせられることになった。ちようどその時分家で大阪毎日新聞を取つていて、ここに菊池幽芳氏訳の「秘中の秘」という探偵小説が連載されているのを、毎日母親に読んで聞かせて貰つていたのだが、私はそれを学芸会で話したものだ。先生は一向ほめてくれなかつたように覚えてゐる。その後にも、似たようなことが数回あつた。

初出 大衆文芸 六月号／

大正十五年 二十一日会

底本 悪人志願／昭和六十六

三年十一月 講談社

涙香 黒岩涙香。探偵小説

家、翻訳家、ジャーナリ

スト。文久二年（一八六

二）、土佐国生まれ。西

洋作品の翻案を多く手が

けた。大正九年（一九二

〇）死去。

菊池幽芳 小説家、新聞記

者。明治三年（一八七〇）、

常陸国生まれ。「秘中の

秘」は明治三十五年（一

九〇）十一月から翌年

三月まで連載。昭和二十

二年（四七）死去。

涙香心酔

五十四歳

1949・10・1
 抜粋

明治三十二、三年のころ（私は六、七歳であった。生まれたのは明治二十七年十月、三重県名張町。本籍は同県津市にある）。父は名古屋商業会議所の法律の方の囑託しよくたくとして毎日通勤していたが、やはり宴会などが多かったのであろう、父の留守の秋の夜長を、祖母と母とが、針仕事にも飽きて、茶の間の石油ランプの下で、てんでに小説本を読んでいるようなことがよくあった。そのころは貸本屋の全盛時代で、祖母はそこから借り出してきた講談本のお家騒動か何かを、母は涙香なみかの探偵ものを好んで読んだ（私は母の十八歳のときに生まれたので、そのころ母はまだ二十三、四歳であった）。私は二人が読書しているそばに寝ころがって、涙香本の、あの怖いような挿絵をのぞいたり、その絵の簡単な説明を聞かせてもらったりしたものである。しかし、そのころの私には、まだ探偵小説の面白味などはわからなかった。母も幼い私に探偵ものの筋を聞かせてくれたわけではない。

初出 新青年 十月号／昭和二十四年 博友社 ＊
 連載「探偵小説三十年」
 第 回
 底本 探偵小説四十年／昭和三十六年七月 桃源社

人形

三十六歳

1931・1・14
◇
1931・1・19
抜粋

私は幼い時分、ことさら人形を愛玩した記憶はない。人形について初めてある関心を持ったのは、母からか祖母からか、おそらくは草双子くさごしでも読んだのであろうか、ある怪異な物語を聞かされてからであつた。

ある大家たいけのお姫様の寝室で、夜ごとにボソボソと人の話し声がする。ふとそれを聞き付けた乳母うばが、怪しんで、唐紙からかみの外から立ち聞きしているとも知らず、中の話し声はなんなんとして続くのだ。

相手はまさしく若い男の声、ささやくのは恋の睦言むつごとである。いやそればかりではない。二人はどうやら一つしとねに枕を並べている気配だ。

乳母が翌朝、そのことを告げると、「ママ、あの内気な娘が」と親御達の驚きは一方ひとかたでない。どこの男か知らぬが、娘を盗む大それた奴、今夜こそ目にも見せてくれると、父君はおっとり刀で、時刻を計って娘の寝室へ忍び寄り、耳をすますと、案あんの定男女じょうなうの甘いささやき声。やにわに唐紙を開いて飛び込んでみると……

初出 東京朝日新聞 一月
十四日号・十九日号／昭和六年 全五回 朝日新聞社
底本 鬼の言葉／昭和六十三年十月 講談社

これはまあ、どうしたことだ。姫が枕を並べて、寝物語を交わしていたのは、生きた人間ではなくて、日頃姫の愛蔵する、紫の振袖なまめかしい、若衆姿の人形であった。人形のせりふは、おそらく姫みずからしゃべっていたのであろうが。私の祖母（？）は、「でもね、古い人形には、魂のこもるということがあるからね」と聞かせてくれた。

六、七歳の時分に聞いたこの怖い美しい話が、その後ずつと私の心にこびりついて、今でも忘れられぬ。私はかつて、「人でなしの恋」という小説を書いて、この幼時の夢を読者に語ったことがある。

祖母に聞かされた怪談

六十五歳

1960・8・?
抜粋

私の幼時、おばあさんから、サルカニ合戦やカチカチ山といつしよに、よく聞かされた怖い話があった。まつくらな夜、だれも通らない淋しい場所を歩いていると、目も口もない、のつべらぼうのお化けに出会ったので、キャーッと叫んで、一目散に逃げだした。そして、暗い道を走って行くと、むこうから一人の人間がやってきたので、やれうれしやと、その人に助けを求め、いまおそろしいお化けに追つかけられたと告げると、その人は、「その化けものは、こんな顔をしていたか」と、ヌーッと顔を前にだした。それが目も口もない、のつべらぼうの顔だったという話である。

私は、このお化けの二重攻撃がひじょうに怖くて、強く記憶に残った。そして、これは日本あるいは東洋独特の怪談だろうと思っていたところ、数年前、イギリスの探偵小説を読んでいた、同じ話がイギリスの民話としても存在することを知って、ちょっとおどろいたのである。それは、エリザベス・フェラーという女流作家の、「私は見たと蠅はえはいう」という長編で、その後、早川ミステリーで邦訳も出ている。

初出 図説日本民俗学全集

月報／昭和三十五年八月

あかね書房

底本 うつし世は夢 昭和

六十二年九月 講談社

エリザベス・フェラー

Elizabeth Ferras (一九

〇七—一九九五)。「私は

見たと蠅はえはいう」は原題

「I Said The Fly」一九四

五年刊。

主人公の女性が幼時間かされた怪談として、私の幼時に聞いたのとそっくりの話が出てくるのである。

もう一つ、これも子どものころおばあさんから聞かされた話に「人面痘^{じんめんそう}」というのがある。膝や肘に、人間の顔とよく似た腫れ物ができて、その腫れ物の口が物をたべるという怪談である。この話の、本にのっている古いものでは、中国唐^{とう}代の「酉陽雜俎^{ゆうようざんそ}」で、その話が日本に伝わったものだから、東洋独特の怪談と考えていたのだが、アメリカのエドワード・L・ホワイトという作家の Lukundoo（妖術というアフリカ語）という短編に、人面痘の話が出てきたのでびっくりした。中国や日本の話を伝え聞いたのではなくて、まったくの創作らしい。あるいはアフリカなどに、そういう民話があるのかもしれない。

アフリカ探検家が、からだじゅうに、人間の顔をした腫れ物ができて悩む話で、その探検家は、腫れ物が大きくなると、かたつぱしから剃刀^{かみそり}で切りとるのだが、いくら切っても、つぎからつぎと腫れ物ができ、その腫れ物が小さな口で物をいうのである。

酉陽雜俎 段成式（?—八

六三）著、八六〇年ごろ

成立。

エドワード・L・ホワイト

Edward Lucas White

（一八六六—一九三四）。

「Lukundoo and Other

Stories」は一九二七年刊。

私は、犯罪者の素質を持っていた

六十三歳

1958・7・1
抜粋

幼年のころ家庭の何かを盗んだことがある。誰にもあることだと思ふ。ほしいものを手に入れたいというのはきわめて自然な欲望だからである。これが罪だということがわかってくると、盗んだら結局損だという理解から、盗みをしなくなる。

初出 更生保護 七月号／

昭和三十三年 日本更生

保護協会

底本 うつし世は夢／昭和

六十二年九月

恋と神様

三十二歳

1926・12・1
全文

小学の一、二年の頃だと思ふ。いやに淋しい子供で、夕暮れの路地などを、滅^め入^いるように暗くなつて行く不思議な色の空を眺めながら、目に涙を浮かべ、芝居の声色^{こゝろ}めいて、お伽^{お伽}噺^{ばなし}のような、詩のような、わけのわからぬ独りごとをつぶやきつぶやき、歩いていたりした。

不思議なことに、夜一人で寝ていて、猿^{さる}股^{また}をはかない、両^{りょう}腿^{もも}が、スベスベとすれ合う、あの物懐かしい感じが、この世のはかなさ味気なさを連想させた。

八歳の私には、腿のすれ合う感じと厭^{えん}世^{せい}とは同じ事柄のように思われた。たつた一人ぼつちの気持ちだった。命のはかなさ、死の不思議さなどが、ごく抽象的な色合いで私の頭を支配した。

妙なことに、それはほとんど夜中に限られていた。昼間は近所の子供達と、普通の遊戯^{あそび}に耽^{ふけ}つた。

そんな心持ちからか、私はその時分、私自身の神様を祭っていた。私の所有に属する古い小^こ筆^{ひつ}筒^{すず}があつて、その開き戸になつた中へ、ちようど仏壇のような装飾をほどこし、そ

初出 苦菜 十二月号／大
正十五年 プラトン社
底本 わが夢と真実／昭和
三十二年八月 東京創元
社

こへ何かしら書いたものを、もったいらしく白紙に包んで祭つたのだ。そして、時々そこを開いて、心のうちで礼拝しながら、これさえあれば大丈夫だと思っていた。

この神様が守って下さるから一人ぼっちでも怖くはないのだ。この神様がお友達だから他の子供にいじめられても、ちつとも淋しくはないのだ、と固く信じていた（断っておきませんが、当時私には祖母も父も母も健在で、兄弟もあり、召し使ひもあり、家庭はごく暖かかったです）。

だが、私の八歳の厭世は、おかしいことに、恋というものに、しつくりと結びついていた。性的な懐かしさが、この世の淋しさと、ほとんど同じものに感じられた。むろん肉体的な色情を解したわけではないけれど、八歳の子供にだって、恋というものはわかつていた。

しかし、私の恋は夜、蒲団ふとんの中で、腿をすり合わせながらふと涙ぐましくなるような、それゆえに、厭世と隣り合わせのごく淋しい、抽象的なものに過ぎないのであった。よく、ほがらかな秋の夕暮れなどに感じる、胸の中がスーツと空っぽになるような心持ち、あの心持ちが、私に神様をこさえさせ、同時にまた恋を思わせたのである。

そのような時に、私は生まれて初めての恋人を発見した。その相手は同じ小学校の、二年ばかり上の級の女生徒で、自分にとつては、何だか姉さんといった感じのする娘だった。

おそらく学校中での美人で、家柄もよく、成績もむろん優等で、級長なんか勤めていた。

その娘を、遠くの方から、チラリチラリと眺めては、胸の痛くなる思いをしていた。長く見つめている勇氣すらなかった。

何かこう自分とはまるで人種が違うようで、娘が友達と物をいつたり、お手玉をしたりしているのを見ると、そんな普通の行いをするのが、かえって不思議なように思われた。

一人で道を歩いている時、夜中に床とこの中でふと目醒めざめた時などに、私は必ずその娘の姿を幻に描いた。そして、やるせない思いにわれとわが胸を抱き締めたりした。私はさまざまの妄想を描いた（いうまでもなく純粹にプラトニックな）。中におかしいのは、私の家がどうかして、引越しをして、そのあとへ彼女の家が移って来るかもしれないという妄想だった。

私は人目につかぬような、部屋の隅つこの柱などへ、片仮名で、奇妙な恋文を認しためた。それはもし彼女が私の家へ移って来たならば、彼女にだけわかるような、簡単な落書きだった。あなたのためになら、私は喜んで死にます。というようなことを書いた。考えてみると、私は当時から妙に秘密があった傾向を持っていた。

やがて、私は思いに堪えがたくなって、数日のあいだ考え

に考えたことを、私としては非常な決心で、断行した。私はある朝、学校へ行く時、一枚の清浄な白紙を小さく正方形に切つて、手帳のあいだにはさんでおいた。

彼女の級も私の級も同じ入口から教場へはいるのだ。入口の両側には細かく区切つた下駄箱が、ズツと並んでいた。彼女達のは右側、私達のは左側に。いつのまにか、私は彼女の赤い鼻緒の駒下駄を見覚えていた。

教場へ出入りのたびごとに、その穿はきふるしの下駄が、何か非常に美しい花のような感じで、私の目を惹ひきつけるのだ。

さて放課時間の終わりに、私はまるでスリでもあるように、用心深くあたりを見廻しながら、す早く彼女の下駄箱に近づいて、用意していた白紙を、その赤い鼻緒のあいだへさし入れた。そして次の一時間の授業の終わるのを、どんなに待ち遠しく思ったか。鐘が鳴つて礼がすむと、飛ぶように下駄箱のところへ来た。幸い彼女はまだ教室にいと見えて、赤い鼻緒は元のままだった。早鐘のような動悸をじつとこらえて、私はさい前の白紙を取ると、ふところの手帳の中へしまい込んだ。

こうして私は、彼女の霊を盗んだつもりだった。

家へ帰ると、誰もいない時を見はからつて、手帳からその紙切れをうやうやしく取り出して、長いあいだ眺めていた。

そこからは靈妙な香気さえ感じられた。やがて、私はそれを

一枚の半紙の中へ、丁寧に畳み込み、例の私の神棚へ祭った。それ以来、彼女は常に私のそばにあった。その紙切れは私の守り神であつた。ふと淋しくなると、私は小箆筒のひらきをあげて、神にぬかずくように彼女の霊を拝した。そして、少なからぬ満足を覚えていた。一人ぼっちも、闇の夜も、私はもう淋しくも怖くもなかつた。

これが私の八歳の恋物語です。

はるかに當時を回顧すれば、あまりにも人間くさくなつた今の私が、妙にけがらわしく、恥ずかしく感じられます。

一頁自伝

三十六歳

1930・11・1
抜粋

おやじのチョッキを着て、サーベルをさげて、友達一人なく、独りぼつちで威張っているうちに、学齢が来た。名古屋市白川尋常小学校である。それから、大根畑の熱田^{あつた}中学第一回卒業生である。かけ足がゾツとするほどいや。器械体操のかいもくできない弱虫、そのうえ内気者のにやけ少年。強い奴にいじめられるために生まれて来たような男。で、学校は半分くらい病氣欠席。

初出 モダン日本 十一月
号／昭和五年 文藝春秋
社
底本 わが夢と真実／昭和
三十二年八月 東京創元
社

白川尋常小学校 明治五年
(一八七二)、名古屋第十
三義校として開校。同二
十六年(九三)に白川尋
常小学校となった。現・
市立栄小学校の前身校の
ひとつ。入学は明治三十
四年(一九〇一)四月。
熱田中学 明治四十年(一
九〇七)、愛知県立第五
中学校として開校。大正
十一年(二二)、愛知県
熱田中学校に改称。現・
県立瑞陵高校の前身校の
ひとつ。入学は明治四十
年(一九〇七)四月。

幻影の城主

六十五歳

1960・7・1
抜粋

少年時代の私は、薄情にされたりぶあいそうにされたりすることになり、人一倍敏感なくせに、お能の面のように無表情な、お人好しな顔をして、内心はげしい現実嫌悪をいだいている少年であった。

夜暗い町を歩きながら、私は長いひとりごとをしゃべるくせがあつた。そのころ、小波山人の「世界おとぎ話」の本の世界に私は住んでいたのである。遠いむかしの異国の世界は、昼間の遊びよりも、ぐつと真に迫って好奇に満ちた私の現実であつた。

想像の国のできごとについて、その国のさまざまの人物の声色をまぜて、私はひとりごとをしゃべっていたのである。

社交術でも腕力でも、弱者であつた少年は、地上の城主になることをあきらめ幻影の国に一城を築き、その城主になろうとしたわけだ。町内のどんな腕白小僧も、この幻影の城を攻め滅ぼすすべはなかつた。

初出 中学コース 七月号

／昭和三十五年 学習研

究社

底本 うつし世は夢／昭和

六十二年九月 講談社

小波 巖谷小波。児童文学

作家。明治三年（一八七

〇）、東京府生まれ。『世

界お伽噺』は明治三十二

年（九九）から同四十

一年（一九〇八）にかけて

『百巻を刊行。山人は号の

下に添える語。昭和八年

（三三）死去。

私の履歴書

六十一歳

1956・5・3
◇
1956・5・10
抜粋

二、三歳のころは、ひどくおしゃべりで、物真似などが上手だったそうだが、物心つくにしたがつて、あまりしゃべらなくなり、独りで何か空想して、夕方など町を歩きながら、声を出してその空想を独白するくせがあった。会話を好まず、独りで物を考える、よくいえば思索癖、悪くいえば妄想癖が、幼年時代からあり、大人になっても、それがなおらなかつた。お婆さん子の、甘えっ子の、内弁慶^{うちべんけい}だから、小学校に入つて、はじめて社会に接したときには、校庭の隅つこの桜の木の下にポツンと立って、みんなの駆け回るのをボンヤリ眺めているようなくじなしであつた。しかし物の理解力はあるほうで、当時の尋常小学校四年を通じて、いつも級長か副級長であつた。

そのころは尋常小学校の次に、高等小学校を二年やり、そこで中学の入学試験を受けるのだが、この高等小学校に入つてから、いじめっ子が現れ、いじわるをされたり、肉体的にも、ひどいめにあわされたりして、学校へ行くのがいやになつた。中学へ入つても、やつぱり別のいじめっ子がいて、

初出 日本経済新聞 五月

三〇号・一〇日号／昭和三十一年 全六回 日本経

済新聞社

底本 江戸川乱歩ワンダー

ランド／中島河太郎編

平成元年九月 沖積舎

学校は地獄であった。別に先方が悪いのではなくて、こちらが「いじめられっ子」に生まれついていたからだと思うが、そのために、私は社会生活を嫌悪し、独りぼっちで物を考える癖が、ますます嵩こもじて行つた。中学時代には病氣と称して学校を休むことが多く、実際病身でもあつたものだから、中学五年間の半分ぐらしか学校へ出ていない。したがつて、成績も中位になり、スポーツはむろんやらず、鉄棒もだめ、木馬も飛べないという弱虫で、体操の時間が一番きらい。なかでも器械体操と駆け足にはおぞけをふるつた。

こうして私は、学課そのものではなく、まったく別の事情によつて、学校を嫌悪し、結果においては学課もだめになるという経路をたどつたのである。小学校は名古屋市南伊勢町の白川尋常小学校、その近くの市立第三高等小学校、中学は愛知県立第五中学校（のちに熱田あつた中学と改称）の第一回卒業生である。

第三高等小学校 入学は明

治三十八年（一九〇五）

四月。

わが青春記

五十七歳

1952・8・8
抜粋

私には「青春期」というような花わらい鳥歌う時期がなかった。その遠因は、私が子供のころ、「いじめられっ子」だったことにあるらしい。

小学校四年生ごろまでは順調だった。たいした「いじめっ子」がいなかったからである。しかし高等小学（別の学校であった。四年制で、その二年級を終わって中学に入った）に移ってから「いじめっ子」が現れ、中学に入ってから人も人は違うが、それがつづいた。私は子供のころ病身で、器械体操がまるでできなかった。同級生の物笑いとなり、それが「いじめられっ子」の最上の資格となった。病気でよく学校を休む。一つは「いじめられっ子」がいやで休みもしたが、ほんとうに病身でもあった。病床の空想生活が現実の生活よりも楽しかった。

休むものだから、学課も優等とはいけなくなり、その方の魅力もだんだんとおとろえて、学校がいつそう面白くなくなった。現実社会というものが私の敵になった。いわゆる劣等感である。「いじめられっ子」にされたというよりも、こち

初出 東京新聞 八月八日

号/昭和二十七年 東京

新聞社

底本 わが夢と真実/昭和

三十二年八月 東京創元

社

らがそれに適する性格に生まれ、育っていたともいえるのだが、いずれにしても、このことが、私の生涯に最も強く響いていることはまちがいない。

彼

「僕は皆と同じでないんだ、僕は皆と同じでないんだ」十一歳のアンドレ・ジードは母の前に啜り泣きながら絶望的に繰り返した。

——「一粒の麦もし死なずば」

I

人は生涯のある時期に一度は、その祖先に興味を持つものである。彼にもそういう時期があった。彼は分家の跡取りであつたから、先祖の系図を持つていなかったけれど、本家に伝わっているそれを借りて筆写したことがある。

彼は現在の境遇に比べては、案外立派な先祖を持つていた。「^{ずしゅういとうの}豆州伊東之郷、^{かまだの}鎌田之住、^{たいふちやくなんじゅうろうえもん}平井太夫嫡男十郎右衛門、^{じゅ}寿百十三歳、^{じょうこう}貞享二年丑年三月七日没」というものが、わかっている限りの遙かなる祖先であつた。伊豆伊東の郷士である十郎右衛門の娘が伊勢の藤堂高次公に奉仕して次代高睦公の実母となつた縁により、その弟友益というものが藤堂家に召

四十二歳

1936・12・1
◇
1937・4・1
全文

初出 ぷろふいる 十二月

号 四月号／昭和十一年

・十二年 四回（中絶）

ぷろふいる社

底本 鬼の言葉／昭和六十

三年十月 講談社

藤堂高次 慶長六年（一六

〇二）生まれ。高虎の子。

寛永七年（三〇）、高虎

の死去により二代藩主と

なる。寛文九年（六九）

に隠居、長男・高久が家

督を相続した。延宝四年

（七六）死去。

高睦 寛永七年（一六六

七）生まれ。高次の子。

兄・高久の養子となり、

元禄十六年（七〇三）、

高久の死去により四代藩

主となる。宝永五年（〇

八）死去。

し抱えられ、寛文九年「二十両六人扶持被下置、定府二被仰付」とあり、系図ではこの人を平井家の初代と数えている。

定府とあるから江戸屋敷に召し使われたのであろう。

二代目陳救のちのちしゅうけいというもの代になつて、元禄元年御国附となり、のち正徳三年に正式に伊勢の津へ移住した。この陳救という人が、わずかのあいだに恐ろしく出世をしている。天和二年には御小姓役として二十石五人扶持となり、貞享二年には「新知百石二被成下」、元禄十年には「加増百石拜領」、宝永四年には突如として「御増八百石被下置、都合千石二被成下」ている。太平の世にこの出世はただごとでないが、ちょうどこの宝永四年には彼の伯母に当たる前記高睦公の実母となつた婦人が没しているから、当代の高睦公がその実母の喪を悲しんで、母の霊を慰める意味でこの破格の加増をしたのではないかと想像される。

それから三代陳以のちのちい、四代陳為のちのちゐ、五代陳善のちのちぜん、六代陳成のちのちなり、七代陳就のちのちしゅうといずれも千石を被下置かれ代々伊勢の津に定住して平凡に瑕瑾なく勤めている。この七代陳就という者が彼の祖父であつた。

今の彼にとつて立派な祖先であつたが、太平の世とはいへ武功による出世ではなくて、いわば初代の姉に当たる女の力（おそらくその婦人は美貌であつたのに違いない）によつてその地位を得たのであるから、彼はこの系図を一読した時、

友益 初代。寛文九年（一

六八九）、藤室家に仕え

天和二年（八一）死去。

陳救 二代。元禄元年（一

六八八）にお国付となり、

正徳三年（一七一三）一

月、津に移住。同五年一

月、伊賀付となり、享保

十八年（三三三）死去。四

代・陳為が寛延二年（四

九）に津付となるまで、

平井家は三十四年にわた

つて伊賀上野城下に居住

した。

元禄十年 底本「同十年」

を訂した。

実母 法号・松林院。宝永

四年（一七〇七）一月二

十七日、江戸本郷で死去。

行年八十二。同地の瑞泉

院に葬る。

少しく物足りぬ感じを抱かないではいられなかった。

祖父陳就(ちんすけ)は明治十七年に没(むつ)して、写真嫌(あきら)いで一枚も姿を残(のこ)しておかなかつたので、彼(かれ)はその風貌(ふうぼう)を知(し)ることができなかつたが、系図(けいず)の記述(きじゆ)によると、代々(だいだい)のうちではなかなかの手腕家(てんぽんか)であつたらしく、鉄砲頭(てつぱうがしら)、御側用人(おそばしやうにん)、大横目(おほよこめ)、加判奉行(かはんべいりやう)などを歴任(れきじん)し、嘉永三年(かえいさん)には江戸増上寺(えどぞうじやうじ)御靈屋(おんたま)御普請(ごふしん)の副奉行(ふくべいりやう)を勤めたり、文久三年(ぶんきゅうさん)には大和(やまと)の浪士(らうし)追討(おいうち)のため出張(しゆちやう)を命ぜられたり、元治元年(げんじ)には藤堂家領内(とうどうかりやううち)にある山陵御修覆(さんりやうごしゆふく)の御用掛頭取(ごかり)を仰せ付けられ、その功(こう)により朝廷(てうてい)より白銀五枚(はくぎんごまい)を拝領(はいりやう)したりしている。

彼の祖母(そぼ)は京都(きよと)の東本願寺(とうほんがんじ)(あるいは西(にし)か)の寺侍(てらざむらい)本間(ほんま)氏の娘和佐(わさ)というもので、祖父陳就(ちんすけ)の後添(のちぞ)いであつたが、先妻(せんさい)はすでに没(むつ)していたけれど、その人が藩主藤堂公(はんしゆとうこう)の娘(むすめ)であつた關係上(けんげいじやう)、正式(せいし)の妻(さい)として披露(ひりやう)はしなかつたということである。

その祖母(そぼ)は明治四十四年(めいし)まで生きていて、彼の十八歳(じゅうはちさい)の年まで、ずっと一緒に暮(く)らして来た。彼の幼時(こども)時、弟(あに)が生まれて母(はは)の乳(ちち)を離(はな)れなければならなくなつてから、ほとんど小学校(しょうがっこう)へ入(い)る間際(まぎわ)まで、彼は毎晩(まいばん)この皴(しむ)くちやの乳房(ちちやう)に吸(く)いついて寝(ね)たのであつた。そして、その皴(しむ)くちやの乳(ちち)を嚙(か)んで傷(きず)を拵(こしら)へたことがたびたびあつたということである。つまり彼は極(ごく)度に甘(あま)やかされたお婆(おば)さん子(こ)であつた。

大和の浪士 天誅(てんしゆ)結(むす)。文久

三年(さんねん) (一八六三)、尊王

攘夷派(じやういはい)の浪士(らうし)が大和(やまと)で拳

兵(べい)し、津藩(つはん)は異命(いめい)を受け

てその追討(おいうち)に加(か)わつた。

彼はその祖母から、祖父の生活が千石の陪臣ばいしんという石高こくだかで想像する以上に派手やかなものであったことを、いろいろと聞かされた。陪臣ではあつても、多くの家来を召し抱えていたし、邸内にはたくさんの方が召し使われていて、その女達めよのあいだに党派ができて、陰險な勢力争いの絶え間がなかったこと、元旦であつたか、祭礼の時であつたか、毎年その日には、祖父は熨斗目のしめの着物の両の袂たもとに、どつさり小粒を入れて、それを座敷に撒まいて召し使いや出入りのものに拾ひろわせる慣ないであつたこと、殿様名代みやうだいの道中行列の絵のように立派であつたこと、それから、御一新の少し前、「お祓はらいさん」という奇妙な現象が起こつて、いつとということなく、裕福な家々へ、大神宮のお札が、空からヒラヒラと降つて来る（むろん人為的のものであつたに違いない。この奇現象については誰かの考証を読んだ記憶があるが、今その詳細を思い出せない）。するとその家では無礼講ぶれいこうの大盤振舞おおばんふるまをしなければならぬのだが、祖父の邸にもその「お祓いさん」が降つたことがあつて、その時の乱痴氣騒らんちきさわぎがどんなに物凄かつたか。群がる弥次馬が邸内に乱れ入つて、用意の酒を飲み御馳走を平らげ、畳もなにも泥だらけにして、「お○○に紙貼れ、破れたらまた貼れ」と合唱しながら乱舞すると、邸内の男達女達もそれに引き入れられて、気違ひのように踊り狂い、その翌日からは襖障子ふすましょうじの張り替え、畳替え、調度の掃除に忙殺さ

お祓いさん 慶応三年（一八六七）夏、三河地方に皇大神宮のお札が降つたのをきっかけに、「ええじゃないか」と歌い踊る民衆が神宮を直指した。津では十月初旬にお祓いさんが降つたとされ、十一月四日夜から狂乱がくりひろげられた。

お○○に紙貼れ 『慶応伊勢御影見聞諸国不思議之扣』（日本思想大系『民衆運動の思想』所収）によれば、熱狂した民衆は「おめに紙はれ、破けたらまたはれ、なんでもえじやないか、おかげで目出度めでた」と大騒ぎしながら外宮と内宮に参拝した。

れたという話、そのほかさまさまの思い出話の中に、彼は次の一件を最も興味深く記憶していた。

年代がはつきりしないけれど、祖母が嫁入ったのは文久の末か、元治頃であつたから、それより後の出来事らしく思われるのだが、藤堂の城下町津の近在一身田にある真宗高田派の本山専修寺に、「一身田騒動」といつて当時世間を騒がした相統争い（？）の毒殺事件があつて、祖父はその事件後のお目附役として藤堂家から専修寺に派遣され、祖父自身も危うく毒殺されかかったような出来事があつた。そのお家騒動の一条が江戸で芝居に仕組まれ、祖父に当たる人物も登場するといふので、祖母はその芝居見物を勧められたけれど、見物に行けば役者が客席へ挨拶に来たりしてはれがましいといふことを聞かされ、恥ずかしがつてついに見物しなかつたといふことである。

彼はその芝居が何という外題であつたか、何年に何座で演じられたのか、俳優は誰であつたか、歌舞伎年代記をくつてみようと思ひながら、ついまだ果たさないでいる。

祖母の語るところによれば、祖父は人並みよりは小柄な人物であつたが、なかなかの切れものであつたらしく、几帳面な一方派手好きで、大酒もしたけれども決して乱れることはなかつたという。明治四年隠居を願ひ出て許されてからは、入道して閑水と号し写経などに余生を送つた。その写経の一

一身田騒動

真宗高田派本山は親鸞が嘉禄元年（一一二五）、下野国（栃木県）高田に開いた専修寺だが、同派十世・真慧が東海北陸の拠点として一身田に寺院を建立し、専修寺が兵火で衰退したため本山の機能が移されて専修寺と呼ばれるようになった。文久元年（一八六一）、二十世・円禮の死去を受けて相統をめぐる実子と養子の対立が表面化、毒殺まで画策されるに至つたものの結局は未遂に終わった。顛末は広く噂となり、一身田騒動として耳目を集めたが、いまでは地元でも忘れられている。劇化に関する詳細は不明で、陳就が藤堂家から派遣されたという事実も文献上では確認できない。

部が今も彼の家に残っているが、巧みではないが性格をそのままに実に几帳面な書体である。筆まめな人で、隠居してからは、小抽斗こひきだしのたくさんついた桐の小机を常に身近に置いて、いろいろの書きものをしていたということであるが、随筆とか日記とかいいう種類のものは、むろん書いたであろうが、その後彼の一家があまりにしばしば住居を転々したために、散佚さんいつして今は何も残っていない。しかし、その桐の小机だけは長い後まで、真つ黒になって残っていて、彼が名古屋に住んでいた少年時代には、彼の持ち物となっていた。

祖母は祖父に比べて字が巧みであった、寺小屋仕込みの筆太なお家流いえりゅうであったが、男のように力強く巧みであった。彼が小学生の頃、家でお習字をしていると、父が筆を取って直してくれることがあったが、祖母はそばでそれを見ていて、父の字がなっていないといつて笑い、その父の字をまた彼女が直してみせるほどであった。

祖母の書いたものでは、今でも手製の百人一首が残っている。歌は祖母のお家流、絵は父の手すさび、器用な父が彩色を施し、裏打ちをして、なかなか手際よくできている。今では表面がけは立って、ひどく汚れているが、活字の歌留かると多たんかよりも、どんなにおもむきがあることか。

彼は時々、彼がこの世に生まれて最初の記憶が何であったかを思い出そうと力^{ちから}めることがある。しかし、それは正確にはわからないことかもしれない。真実見聞^{けんぶん}した直接の記憶でなくても、物心つくようになってから、祖母とか母とかから彼の幼時の思い出話を聞かされ、その言葉から生じた幻影が、直接の見聞の記憶でもあるように信じられている場合^{ばい}が存^{ぞん}外^が多いのかもしれないからである。

そういうふうな考え出すと、どれが本当の記憶だか、何もわからなくなってしまうのだが、彼にはあれがそうではなかったかと思われる、絵のように残っている一つの場面があった。西洋の小説家のオートバイオグラフィなどを見ると、非常に早い記憶が詳しく書いてあるものもあるが、それらが作者達の今いったような思い違いでないとすれば、彼が性慾や文学心や世間のことにすべて晩稲^{おくて}であつたように、彼の最初の記憶もまた人並みよりはおくれていたのかもしれない。

あとから考え合わせると、それは彼の二歳の時の記憶であつた。最初に大きな石灯籠^{いしどうろう}が現れる。その灯籠の段々になつた四角な台石の下から二段目に、きめが細かくて非常にもろい砥粉^{とよのこ}のような、しかし少し赤茶けた土の塊^{かたまり}が幾つか載っている。小さい手が、その土の塊を小石で粉々にくだいている。それはあまり綺麗ではない田舎者らしい五、六歳の少女であ

る。少女は二人か三人かいて、お砂糖屋ごっこをしているのだと思う。二歳の彼は一人の色の白い瘦せたお婆さんの背中からおりて、お婆さんに手を引かれて、チョコチョコ歩いて、石灯籠に手をかけて、背のびをして、その砥粉のような土の塊を覗のぞいている。たぶん掴つかみたいのであろうと思う。しかしまだ掴つかんではいない。そういう絵だけが残っている。視覚ばかりで聴覚はないのである。

その景色は三重県亀山町の高台の上にある権現ごんげん様の社やしろの石灯籠であったことが思い合わされる。彼の両親の家はその社のすぐそばにある藁葺わらぶき屋根の家で、祖母は彼をおぶつて、毎日のようにその権現様へ遊ばせに行つたのだということである。権現様の境内の一方が深い崖になっていて、下は見渡す限りの田圃たんぼ、その田圃の中を遥かにおもちやのような汽車が走つて行く。ピーツピと可愛らしい汽笛を鳴らして走つて行く。彼はその汽車を見ることが、何よりも好きであつたということだ。

しかし、彼はその亀山町で生まれたのではない。同じ三重県の名張町という、亀山よりはもつと辺鄙へんびな小さい町で生まれたのである。

明治十七年彼の祖父が没ぼしてから祖母はみじめであつた。禄ろくに離れた時にはかなりの貯えもあつたのであろうけれど、祖父の長男が経済的にまったく駄目な性格であつたのと、そ

の兄弟の一人にその土地で誰知らぬものもないならず者があつて（この二人とも祖母の腹ではない）、それが長男や隠居している祖父から金品を強奪せんばかりにして引き出して行くために、次第に貯えを失い、祖母は祖父が生前縁故のものに預けておいたわずかの元金から月々の支給を受けて一人ぼつちで暮らさなければならなかつた。

祖母に二人の子供が生まれていたが、年下の男子は他家の養子となり、頼るものは年上の男子一人であつたのに、その子供は、まもなく母のもとを離れて、当時創立まもなかつた大阪の関西大学に遊学することになつた。これが彼の父の繁男しげおである。

繁男は関西大学の法科に入学して、半ば苦学をしながら優秀の成績でそこを卒業したが、すぐ母のもとに帰ろうとはしないで、たぶんどこかの弁護士事務所に勤めたのであろう。自活の道を立てながら、司法官試験の準備をつづけていた。

しかし、この維新後の一家の零落れいらくや、繁男の大阪での生活については、彼にはこれ以上詳しいことは何もわかつていない。

繁雄はいつまでも大阪に踏み留とどまつて、司法官になりたい意志であつたが、一人ぼつちの母がそれを許さなかつた。彼女は長いあいだわが子と離れている淋しさに癩しかといふものを覚えた。頻々ひんびんとして猛烈な胃瘕いけいれんに悩まされるようになった（ではなぜ母は大阪へ行つて息子と同棲どうせいしなかつたのか。お

そらくは母の側には先祖の土地を離れたくない旧弊きゅうへいな氣質があつたのであろう。息子の方には自由な一人の生活を望む青年のわがママがあつたのであろう。しかし、それも本当のこととは、今の彼にはもう何もわからなかつた。

「私が一人ぼっちで死んでしまつてもよいのなら、帰つて来なくつてもいい。そうでなければ早く帰つておくれ」

という母からのきびしい手紙に、息子はひとまず司法官への野心を捨てて、仕官の道を講じなければならなかつた。そして職業についたのが、旧藤堂家の領地伊賀の国名張町にあつた郡役所の書記であつた。母の願いはやつと叶かなつて、この町に息子と二人の生活を営むこととなつた。

名張町に移るとまもなく、津市の親戚のものゝ勧めで、繁男は今までまったく見も知らなかつた同地の一人の娘と見合みあひいをする事になつた。娘は同じ藤堂家の家臣であつた本堂帆之助はんのすけの長女「菊」である。見合みあひいは滞とどりなくすんで、やがてこの二人が前記の親戚のものゝ媒介で結婚の式を挙げたのが明治二十六年のことであつた。

彼はこの二人が結婚当時お互いに抱いた感情を聞かされたことはなかつた。おそらくはごく平凡な仲人結婚なこうじんの新婚夫婦が味わう感情を想像すれば大過たかないのであろう。見合みあひの前まへに、一応お互いの写真を取り交わしたということで、その写真が今も彼の家のアルバムに色あせて残つてゐるが、新婦の

菊とその母とは、写真の修正ということ知らなかったものだから、繁男の顔にその修正のあとが細かい白点になって見えるのを、菊石^{あぼた}ではないかと心配して、仲人に確かめたという話があるので察せられるようなそういう結婚であつた。結婚の翌年、新夫婦のあいだに男児が産まれた。それが彼である。父は二十八歳、母は十八歳であつた。

3

彼の父は学校を出ると地方の小吏^{しよらう}を数年勤めているうちに、学校の先輩の勧めによって、東海紡績連合会の書記に転じ、同連合会の名古屋支部書記長というようなものから、徐々に名古屋実業界に接近し、名古屋商業会議所^{しよんたい}の嘱託^{しよんたい}、同地資産家の支配人、それから、輸入諸機械の取次販売、外国保険代理店、石炭販売などの兼業の店舗を開くようになり、同時に一方自宅では、その頃はまだ珍しかった特許弁理士の業務を始め、両方の店員事務員をあわせて十数人、正月などには、石炭部の仲仕^{なかし}が数十人、店の紋章入りの法被^{はっぴ}を揃えて挨拶に来るといった、なかなかの全盛期もあつたのだが、やがて、商家生まれではない父の性格から来る放漫なやり方と、石炭部の営業上の失敗などから、ついに収拾のできない破綻^{はたん}を生じ、店舗を閉じなければならぬことになった。それがちよ

名古屋

明治三十年（一八九七）

春から年末までは「翌三十一年初めまで」「園井町？」「蒲焼町通ニテ島田町ト桶屋町ノ間」、同三十一年末まで「葛町」、同三十三年末または翌年初めまで「南伊勢町ぬ百二番戸」、同三十四年六月末まで「栄町電車通」、同四十五年六月まで「南伊勢町二番戸」に居住。平井商店は同四十一年から四十五年六月まで南伊勢町に所在。同四十二年の『名古屋商工人名録』によれば業種は諸機械兼仲買現物、営業所は中区南伊勢町乙二。

うど彼の中学校卒業の年であった。

父は本来の司法官志願を長いあいだ捨てかねていた。実業界に転身してからも、法律関係の書物が書架の主座を占めていたし、それより前、明治三十二年には大阪駸々堂から『改正日本商法詳解』という七百五十ページの大著を出版しているほどで、実業界への入り方も、商法実践の角度からであったし、後に特許代理業を兼営したのも、法律的な才能と興味とからであったに違いない。

父は法律的な意味での論理家であった。生活の一切をそういう論理によって捌いて行こうとした。そこに商人としての破綻があったのだと思う。話が非常に早くわかった。紆余曲折が嫌いで、人の話でも半分聞いて、結論を結論をと責め立てるような気短かであった。普通の人が十言で表現する事柄を、父は一言で表現した。要点を掴むことが巧みであった反面に、細目の感情にうといところがあつた。

思想としては明治時代勃興期ブルジョワジーの進歩的な人々に共通した自由主義者であつた。むしろ極端といつてもいい自由主義者であつた。そこにも個人商人としての破綻があつたのではないか。当時の大組織商業の経営は多くこの自由主義によつて成功したのであるが、それをただちに個人経営の小商店に持つて来たところに錯誤があつたのではないか。父は個人経営などよりは、むしろ大組織商業の使用人として、

あるいは相談役として、もつと大成する人ではなかったかと考えられる。

父はなかなかの精力家で、小まめで、そのうえ仕事の捌きが非常に早い方であつたから、友人などから人並みの五、六倍の仕事をするといわれたほどであつたが、一面かなりの遊び手で、酒はひどく好きだつたし、官吏時代から商業に失敗するまでのあいだ、遊里ゆうりとは縁は切れなかつた。悪友も少なくなはなかつた。

そういう父の素質から、彼はどの部分を譲られ、どの部分を譲られなかつたか。自由主義はおそらく影響を受けたであろう。物の要点を掴むこと、話の早わかりがすること、論理好きの性格なども、譲り受けているであろう。しかし、精神的なこと、仕事の分量の多かつたこと、少しでもじつとしていられないほど小まめであつたことなどは、背の高さや飲酒癖とともに、彼は父とはまつたくの逆であつた。父と子とは、それらの点で他人のように似ていなかった。

彼にはそのほかに、父からの影響としては、どうしても考えられない幾つかの素質があつた。父は詩を解しなかつた。いわゆる芸術的なものを、高度のものも低度のものも、ほとんど理解しなかつた。父の書架はかなり大きい面積を持つていたが、どうかした拍子に予約申し込みをした大日本文明協会の翻訳叢書ほんやくそうしょのほかには、文学がかつた書物は一冊もなかつ

た。そういう書架にハッガード原作菊池幽芳訳の『二人女王』がたつた一冊混じっていたのは、ほとんど奇蹟といつてもよかつた。

父はよく芝居を見た。しかし、それは遊里の人達に誘われるか、店のものや家族を楽しませるための観劇であつて、芝居そのものを芸として理解したのではなく、むしろ、緋毛氈ひもうだんの柵ますの中で酒を呑みながらの、あの華やかな雰囲気愛したのであつた。父は途切れ途切れではあつたが、老年に到るまで謡うたいを稽古けいこしていた。家族の前で朗ながらかに謡をうたうような趣味もあつた。しかし、それは、主として健康と社交のための道楽であつて、音楽を理解したわけではなく、父の耳は半音の差を聞き分けられない程度の耳であつた。したがつて声であつた。幼年時代の素読そどくのお蔭かげで漢文は少し読めたし、漢詩も読み下すくだことはできたけれど、自分ではほとんど詩作したこともなく、小説類はまつたくといつてもよいほど読まなかつた。女子の読みものとして軽蔑けいべつしていた。

ここに父と子の違いがあつた。彼は少年時代から現実の世界よりは、むしろ架空の物語の世界に惹ひきつけられた。現実を嫌悪きらして詩に逃れる傾きがあつた。芝居でも寄席でも、お伽噺おとぎばなしでも大人の小説でも、それをこそまつたく別な現実世界として、あこがれ溺おぼれる傾きがあつた。音楽も、専門の智識は持つ機会がなかつたけれど、音痴ではなかつた。

ハッガード ハガード。

Ferry Rider Hagard (イギリス、一八五六一—一九

二五)。「二人女王」は原

題「Alan Quaternain」

(一八八七)。邦訳は明治

三十六年(一九〇三)、

春陽堂刊。

これらのものは、決して父から譲られたのではない。では、どこからか。遠い先祖は別として、彼の理解し得る限りでは、それは母からのものであった。母は高等の教育を受けていなかったから、高い文学はわからなかったけれど、素質としては、芸術肌なところがあつた。音楽の耳もあつたし、芝居や小説にも繊細な理解力があつた。家庭の主婦としては、気の弱い何の主張もない婦人であつたが、彼女の内部には、現実とは違つた別の世界があつたと感じられる。

母は強い個性はなかつたけれど、理解力と同化力とに、ある意味での文学的なものを感じられた。低度のものであるが、芝居や音楽や小説を、その真髄において理解する素質があつたし、それと似た意味で、移住した場合などに、その地方の方言を自分のものにするのが早かつた（真似は十分できるのだけれど、その口調をややひかえ目にするほどの神経があつた）。これは一種の虚栄心でもあつたが、他人の感情なり神経なりを、正當に理解する一つの文学心であつた。「芸」の心であつた。これらのものを、彼は母から受けている。

母の父すなわち彼の母方の祖父には、何かしら「芸」を愛する心が感じられた。その祖父はもと他藩の武士であつたが、青年時代勤王きんのうの志を立てて、郷国きょうこくをあとにし、どういふ働きをしたのかは母も聞き伝えていないのだが、結局は一種の放

浪児となつて伊勢に流れつき、その土地の百姓の娘の入り婿となつて、藤堂藩に仕えることとなつた。むろん低い身分であつた。何か志操の一貫しないもの、優柔なものが感じられる。維新後は別に職業を求めなくてもなく、晩年には入り婿をした家の田地をほとんど売り尽くしているような状態であつた。そうして何をしていたかという点、祖父は書画を愛したのである。ことに老年になつては同好の人々を招いて、お茶を啜りながら書画を眺め、骨董を語るのを唯一の楽しみとした。家計のことも、子供のことも（子供は二男二女であつた。彼の母はその長女である）祖母に任せきつて、悠然として趣味に生きていた。勤王の熱情、放浪、そして、老年書画を愛する心、これらの性格に、何かしら彼の同感をそそるものがあった。彼の父母と祖父母を合わせて六人のうちでは、この母方の祖父に、やや彼自身に近い血が感じられた。

祖母は百姓の娘のことゆえ、まったく祖父の趣味を理解することはできなかったが、なかなかのしつかりもので、不平はこぼしながらも、祖父の道楽と居喰いのために傾いて行く家計を、少しでも喰いとめることに一心不乱であつた。近隣や親戚の人々のあいだでは働きものとして通つていた。

母はそういう父母の家に育つて、小学校を卒業すると、嫁入り支度の行儀見習いのため、津市（当時祖父の家は津の市街地にあつた）とは隣接の一身田の専修寺へ奉公にやられ、

父に嫁ぐまでのあいだを、そこに御殿女中のような生活を送った。同寺の貫主には皇室御縁故の方を頂いていたので、貫主夫人は「お裏さん」と唱え、母はその「お裏さん」づきの小間使こまづかいであつた。彼は幼時、祖母（父方の）からは千石生活の華やかな昔話、母からはこの御殿生活の思い出話を、こもこも聞かされたものであつた。

母はなかなか利きかぬ気の少女であつたという。それはおそらく祖母譲りの性格であろうが、小娘の時代にも、決して遊び友達に負けてはいず、男の子のようにおてんばであつたし、一身田に御奉公してからも、その勝ち気なところが「お裏さん」の氣に入つていたというほどであつた。それが父の家に嫁入つてからは、まるで手の裏を返すように、内気なおとなしいお嫁さんになつてしまつた。これは姑しゅうとに当たる祖母が、母よりもいつそう勝ち気であつたためかもしれない。また、論理ずくめの法律書生のようにぶつきらぼうな父の態度に、けおされたのかもしれない。母は「嫁入り当座はお父さんが怖くてビクビクしていた」と漏らしているが、嫁入りの年が十七歳の子供であつたことなど考え合わせると、そういう性格の変化が来たのも無理はないのかもしれない。いずれにせよ、母は父に対して、祖母に対しても、少しも自説を主張せぬ、唯々いひだく諾々の態度を変えなかつた。そして、祖母を見送り、父を失つて、今は彼と彼の弟達の母として残つた彼女は、

やつぱり子供達に対しても、ほとんど自説を主張せぬ唯々
諸々の母であった。これを彼女の父母の性格にあてはめてみ
ると、嫁入り前の母はその母に似た勝ち気、嫁入り後の母は
その父に似た好人物、そして結局は父の方の性格を受け継い
でいるのだとも考えられる。好人物とともに非現実を解する
心を、父から受けついで、それを子供達へ。彼等兄弟は、多
かれ少なかれ、この母の傾向を譲り受けていたのである。

父と母と、母方の祖父、祖母の性格についてごくあらまし
を語った。そして、彼自身がそれらの人々から何を受けてい
るかを、大ざっぱに考えてみた。父方の祖父の性格について
は、先に少し記した以上ほとんど知るところがない。父方の
祖母、彼が小学校へ入る間際まで、その皺くちやの乳房に縋
っていた祖母の性格については、まだ何も語っていないけれ
ど、不思議なことに、彼はこの最も彼を愛してくれた祖母か
ら、何を受けついでいるかを知らないのである。

祖母は前にちよつと記した通り、なかなかの勝ち気もので
あったこと、彼の知つてからの老年時代には、御幣かつぎで、
小言幸兵衛のように口やかましかつたこと、父とは反対の儉
約家で、父と意見が合わなかつたことなどを思い出すけれど、
それらが彼の性格にどういうものを伝えているか、ほとんど
考え及ばない。強いていえば、おめかしくらしいのものであろ
うか。

子供達 太郎（明治二十
七年生、昭和四十年没）、
金次（明治三十一年生、
同三十二年没）、通（同
三十三年生、昭和四十六
年没）、あさ（明治三十
四年生、同三十八年没）、
敏男（明治三十六年生、
没年不詳）、たま（大正
五年生、昭和七年没）。

祖母は老年の容貌から想像しても、噂を聞いても、若い時代は美しい人であったに違いない。その美貌が祖父の注意を惹いて、わざわざ京都から後添のちぞいに迎えられたものに相違ない。皺くちやの老年になつても、外出する時には、入れ歯を鉄漿たはだで黒々と染めて、丁寧ていねいに眉毛を剃そつて、生え際の無駄毛を毛抜きで抜いて、薄化粧うすけしょうさえして、京都ふうの上手な着物の着かたで、後室こうしつ様さまみたいなシャンとした形で、外出したものである。身だしなみといえは身嗜みだしなみ、おめかしといえはおめかしである。

父は実用以外にほとんどおめかしを解しない人であつたし、母は女のことだから、むろん一通りのお化粧はしたけれど、姿すがた形かたちがごとく田舎田舎いんげしていて、気取りも似合にあわなかつたし、自分でもそれをよく知つていて、ひどいおめかしをすることはなかつた。また母方の祖父母にも、そういうことはほとんどなかつたように思われるから、彼にあるおめかしの心持こもちは、おそらくこの父方の祖母から譲ゆづられたものであろう。

ここまでを考えて来たことを一口にいえば、彼は、父からは自由主義的な物の考え方と、論理好きと、要点を掴むこと、つまり物わかりの早さとを譲り受け、母からは「夢」と「芸」とを解する心を譲り受け、間接に母方の祖父からは、家計に無関心な趣味生活と、もしかしたら放浪性とを譲り受

け、父方の祖母からはおめかしの心を譲り受けたかと思うのだが、むろんこれはごく大ざっぱな考え方で、あまりに身にしみ過ぎていて、かえって彼自身には気附かない大きな遺伝もあることであろうし、ここには書ききれない。またもう一つ奥へ行けば、彼自身考えることもできないような、微小な無数の網の目の遺伝と感化の性格があることであろうが、それはこの文章の及ぶところではない。

彼の現在の性格は、ほとんどこれらの人々から伝えられたものに尽きているとも考えられる。そのうちのあるものは、彼の場合には元の形よりも縮小し、あるものは元の形の何倍かに拡がってはいるけれども、父母、祖父母に萌芽ほうがのないものはまったくないといつてもよい。

むろん彼にはこれらのもののほかに、さまざまの著しいちぢる性格があつた。たとえば、彼の少年時代からの人並みならぬ同類嫌悪の感情である。それは厭人癖えんじんへき、孤独癖、外に現れては非社交性となるものであるが、彼の場合は、その傾向が肉親嫌悪にまで進んでいた。この彼の異端者の性格については、こののちしばしば語る機会があると思うから、ここには詳説を避けるが、この性癖さえも、大部分は環境に育てられたものとはいえ、もし同じ環境にあつても、彼でなかつたらこんなことにはならなかつたであろうという、何かしら先天の萌芽のようなものがあつた。父にも、母にも、祖母にも、母方

の祖父母にさえも、彼のように表面には現れなかつたけれど、どこかしら世間並みよりは非社交的なものが感じられた。

父は大酒家^{たいしゆか}であつたし遊び好きであつたから、むしろ社交家らしい外貌を備えていた。酒宴の席を愛し、酔えば端唄^{はうた}を歌い、必ず立つて踊つたものである。祖父と同じく派手好きで、広く人と交わり、足まめに外出もすれば、訪問者をも歓迎した。それにもかかわらず、どこといつて明確に捉えることはできないが、彼はその父にさえも厭人的なものを感じていた。母も力めて愛想よく社交を心懸ける方ではあるが、彼女には父以上に厭人的なものが感じられた。

しかしこの考え方は誤つているかもしれない。人類は例外なく厭人的な性格を隠し持っているのかもしれない。肉親嫌悪さえも、万人共通の感情かもしれない。それを隠し、それに打ち勝ち、^{おの}自れを殺して相交^{あひまじ}わるのがすなわち社交なのかもしれない。肉親だけに厭人癖の萌芽のようなものを感じたのは、彼が内側から観察する立場にあつたためで、誰の子も皆その父母に同じものを感じ得るのかもしれない。もしそうだとすれば、非常に単純に言えば、厭人癖とはわがままの別名に過ぎないことになり、結局は程度の問題に帰着する。ただ彼の環境が、そういう性癖を著しく増大する方向に働いたというまでのことである（それがどのように働いたかは、後にしばしば述べるであろう）。

またたとえば、彼が父母からは受けていないように見えるもう一つの著しい性格がある。ワインゲルはすべての男性女性には、それぞれ精神的にも肉体的にも、幾分の異性的なものを含んでいて、人によつてその程度がさまざまであることを説いたが、彼にはそのワインゲルの意味での女性的分子が、通常人の平均よりは多量に含まれていた。肉体的には、声帯部の突起が常人よりも発達していないこと、撫で肩、腰部骨盤の発達などを軽微に自覚するばかりで、外見上それとわかるほど著しいものではむろんなかつたが、しかし、心理的にも女性分子のやや多量であることは争えなかつた（これについても後に詳しく触れる場合がある）。

この人間に含まれる異性分子の多寡が遺伝するものかどうかは知らないけれど、少なくとも先天性を否定することはできない。父母はまったくあずかり知らぬこととはいえ、父母なくては生じなかつたところのものである。

以上で彼の生まれながらの性格の大体を述べた。ここにいい漏らした性格については、思い出すことにつけ加えるつもりであるし、またこれらの性格が、環境の力によつていかに発達し、あるいは変形して行くかは、これより記そうとするところである。

ワインゲル ヴァイニ

ンガー。Otto Weininger

（オーストリア、一八八

〇—一九〇三）。邦訳は

明治三十九年（一九〇六）、

片山孤村の抄訳『男女と

天才』大日本図書刊、大

正十四年（二五）、村上

啓夫の全訳『性と性格』

アルス刊。

彼の二歳の折りの生まれて最初の記憶については先に述べたが、それは閃光的な、映画の一齣あるいは数齣の印象に過ぎなかつた。それからまもなく、大暴風雨のやはり閃光的な印象が残っているほかには、四歳（あるいは五歳の初め）のある日の一場面まで、まったく記憶が途切れている。その一場面というのは、彼が筒袖の着物の上から、父の洋服のチョッキを着て、その胸には父の時計の銀鎖を纏い、赤十字社の勲章をつけ、腰にはおもちゃのサーベルをさげ、おもちゃの将校帽を冠つて（彼は幼時頭髪をおかっぱにされていたが、その時もおかっぱであつたかもしれない）、広い住宅の部屋部屋を歩き廻り、敷台になつた玄関を降りて、父の大きな靴を履き、それとサーベルとを引きずりながら、大きな門を出て、門の屋根の下に立つて、往来の人達を睨み廻して、独りで威張つていた光景である（むろんこんなに詳しく記憶があるわけではない。後日聞き知つた細部が加わっている）。記憶には、光景だけで、何の感情も残っていないが、聞くところによると、彼にはその頃まだ友達らしいものはなく、家族のもの、母や祖母や書生などを相手に、一人で威張つてみせていたものだという。その異形の風体で門前に立つていると、近所の子供などが近寄つて来たが、彼は別に子供達を仲間にして遊ぼうとするでもなく、彼等を異国人のように睨みつけ

て、ただ威張つていたということである。彼はその頃まだ、家庭以外の世界をほとんど意識しなかった。外にいる彼と同輩の子供達が、彼の同類であることを知らなかった。おそらくこれは、ただ甘えつ子という以上に、千石取りの奥方であつた祖母の町人蔑視の感情が、無意識のうちに彼に伝えられていたのであろう。その実町人の子こそ思いも寄らない恐るべきものであることを、やがて彼は悟らなければならなかつたのだが（この記憶の場所は名古屋市葛町である。彼の父が紡績連合会に勤めて同市に引き移つてから一年ほどのこのことである）。

これに続く幼時の記憶は、父の怖さを象徴する折檻せうかんの場面であつたが、それについては後に記す機会があろう。そしてこれら三、四の印象を除くと、彼は小学校に入学する一年ほど前まで、ほとんどほかに記憶というものが残つていながかつた。思い出そうとしても、具体的には何も思い出すものがない。彼の知能は少年時代からすでに記憶力にかけてはおそらく水準以下であつたのだ。

彼自身の記憶を離れて、家族の目に写つた彼の幼時の特徴について、それほど多く語るべきことはない。著しいものを指折つてみるならば、幼児の彼の容貌が、祖母のひいき目の褒め言葉では、いわゆる「卵に目鼻」であつて、明治時代の標準美人型に似た大柄な目鼻立ちと、白い細かい皮膚を持

つていて、それが祖母の自慢の種であつたこと（そして、それが彼自身にとつては、後の少年時代に、はなはだしい悲しみの種となつたのであるが）、彼はごく幼時は非常なお喋りで、むろん這い這いよりも口をきき始めた方が早く、人見知りを覚えるまでは、お愛想をしてくれるよその大人達に向かつて、片言まじりの非常な雄弁で、物真似入りで、いつ途切れるとも知れないお喋りをしたということである。この雄弁がまた祖母の自慢の種であつた。

彼は素質としてはお喋りに生まれついていたのであろう。彼自身の異端者をおぼろげに自覚し始めた五、六歳以後でも、彼はむつつり屋というほどではなかつたし、小学校という異国の世界に放り込まれて、校庭の桜の木の下に立つて、悲しげに他の子供達の遊びたわむれる様を眺めていた彼も、三年生の頃には、学芸会で演壇に立つてお喋りをしたほどであるし、それから中学校の初年級時代には、級中の話術家の一人であつたし、大学へ入つてからも雄弁会などに加入して演壇に立つたこともあるし、親戚の居候になつては、親戚の子供に、家庭教師になつては、その生徒達に、なかなか雄弁に次から次とお伽噺をして聞かせたものでもあつた。

これらの事実から、読者もおそらく氣附かれるように、彼の幼児のお喋りは社交的会話とか座談とかいうものではなくつたらしいのである。お喋りはお喋りでも、それは聞き手が

謹聴きんちやうしてくれる場合だけのお喋り、大人の世界でいえば、座談の才能と演説の才能とは別物だという、あの演説の方のお喋りであつて、ここにも彼の非社交的性格の一端が覗のぞいていたのだといえよう。

もう一つ、彼の幼時の特徴として算かぞえられるのは、口をきき始めてから二、三年、つまり人見知りを覚えるまでのことであらうが、彼はなかなかの即興詩人であつたということである。亀山町に住んでいた頃に、家の裏に自家用の畑があつて、茄子なすや胡瓜きゅうりが生つていたが、彼は祖母や母の背中からそれを眺めて、出鱈目でたらめの文句で、出鱈目の節で、茄子と胡瓜の歌を歌つた。彼は相手がいない時も絶えず半ば歌うように何か喋りつづけていた。そして、それが皆茄子の賦ふと同じようにそのつど目に触れたものを歌にしているので、大人達を感心させたというのである。

これはもしかしたら、彼の祖母からの影響であつたかもしれない。祖母は京都にいた娘の頃、上方かみがたの地唄を習ひ覚えていて、老年になつても、どうかして三味線を持つようなことがあると、なかなか巧みに歌つたり弾いたりしたのだから、幼時の多くの時を祖母の背中に過すごした彼は、子守唄のように口ずさむ彼女の三味線唄を、つい脳裏にしみ込ませてしまつていたのかもしれない。彼の即興詩は祖母の口ずさみの真似事であつたのかもしれない。

彼のこの妙な癖も、恥ずかしさを知り始める頃には、もう人前では口には出さぬようになっていたが、しかし、心の中の即興詩は、少年となり青年となつても、ほとんど衰えることなく続けられて行つた。彼は人通りのない夜の往来を歩いている時などには声に出して、あたりに人のいる時には心の中で、いつも何かを喋っていた。節をつけて歌っていた。そして、誰にでもあることだけれど、彼には人並み以上に強かつたこの独り言の性癖が、彼に孤独の懐かしさを教えた。一日でも二日でもまったく孤独のない時が続くと、彼は烈しい飢餓を感じた。会話なんかで邪魔立てしてくれるな、俺は俺自身と話したいのだという願いが、空腹のように襲つて来た。これは別のいい方をすれば、放心を樂しむ心であつた。彼は五つ六つの頃から、家庭のひとま一間で、祖母と母とが針仕事をしながら世間話をしているそばに寝ころがって、彼自身は別のことを考え、無言の即興詩を歌っていることを好んだ。のちには、友達と遊んでいても、相手が一人きりの時にはどうもできなかったけれど、二人以上の時には、彼等の会話を聞きながら、それには加わらないで、放心状態にいるようなことが多くなつた。そして、心の中ではその場の会話とはまったく別の即興詩を歌っていたのである。

しかし、やがて、そういう幼児が浮世の風に当たらなければならなかつた。家庭の外の異国人の世界へ入つて行かなければならなかつた。家庭の外の異国人の世界へ入つて行かなければならなかつた。

ればならなかった。その最も著しいものは小学校への入学であつたが、それよりずっと早く、彼が初めて異国に接触させられてほとんどなすところを知らなかつた一挿話がある。

それは彼自身にはまつたく記憶がないけれども、前に書いた父のチョッキを着てサーベルをさげたのとほとんど同じ頃の出来事であつた。その時分には一町内に一軒くらいの割合で、焼芋屋というものが全盛であつたが、冬になるとその焼芋屋の店頭には町内の子供達の黒山が築かれる。この盛んな光景を見て、彼の祖母が妙なことを思いついた。「うちのぼん（坊やの意）と同じくらいの四つか五つの子が、みんなおあし（金）を持つて、焼芋を買いに行つてゐるが、うちのぼんにあの真似ができるかしらん。一つ試しに一人で買いにやつてみようやないか」祖母は母とそんな相談をして、彼を連れて町内の焼芋屋の近くまで行き、彼に一錢玉を握らせて「サア、ぼん、焼芋買こうといで。みんなとおなじように、あこいて、このぜぜ渡こすんや。ほて、お芋貫もろてくるんや。ええか」いわれるままに、彼はほとんど無神経に芋屋の店内へ入つて行つた。しかし、そこにうじゃうじゃかたまつてゐる町内の子供達とはまるで違つて、物の売買かまといふことをまつたく知らなかつた彼は、焼芋の籠かまの隅へ一錢玉を置いたまま、黙つて、馬鹿のように突つ立つてゐるばかりであつた。他の子供達はワイワイと芋屋の爺さんをせき立て、順番を追い抜

いても、早く芋を渡して貰おうとあせっている中に、彼だけは薄のろの看板みたいに、ただボンヤリ突つ立っているのだから、いつまで待っても、爺さんが芋を渡してくれるはずはなかつた。祖母はもう辛抱ができなくなつて、自分で芋を買つて、彼を連れ帰つたが、それ以来彼は「あかん、ほん」ということになつた。「内弁慶うちべんけいの外そとすばまり」と相場が極きまつた。これが彼の社会への接触の幸先さいさきの悪い第一歩であつた。

彼の幼年時代は、彼が自慢であり、彼を目の中へ入れても痛くないほどの祖母と、柔和な母との愛によつて、幸福過ぎるほど幸福に育てられた。もし不幸があつたとすれば、あまりに甘やかされたことと、たぶん同じ原因から来た病弱とであつた。ことに彼の病身は、五歳であつたか六歳であつたか、弟ができて乳離れの憂うれき目めを見た時から、いつそう著しくなつたように思われる。乳離れの時には、もう物心ついていただけに、幼年のヒステリーが烈しくて、まるで蝨きりぎりすのように痩せ細つてしまつた。そういうことから、甘い祖母が母に代わつて彼に添い寝をしてくれるようになり、前にも記した通り、小学校へ入る前年まで、彼は夜だけではあつたが祖母の皺しわくちやの乳房をしゃぶりつづけた。

それ以来中学校を卒業するまで、ほとんど例外なく年に二、三度は重い病氣をした。風邪からの熱病がなかなか治らなかつたり、胃腸をひどく害して長く床とこについたりすることがし

ばしばであった。氷囊ひようとうと体温計と甘いけれども苦い水菓とが、彼には少年時代への懐かしい郷愁でさえあった、発熱そのものにすら妙に甘い楽しさを含んでいた。熱病の悪夢の中で、彼はもう一つの世界である幻影の国の、この世のものならぬ色彩を見た。彼の即興詩は熱病の床の中で育てられて行つた。

彼に絵を描く興味が芽生えたのも同じ病床の中であつた。

治癒期に入つた彼の枕下まくらもとにはいつも石盤と石筆とがあつた。

初めのほどは彼自身の形を描くことはできなかつたけれど、その頃（五、六歳の頃）母の一番下の弟、つまり彼の若い叔父さんが勉強のために彼の家に同居していたので、その叔父さんが描いてくれる黒い石の上の白い絵に魂を吸いよせられた。トンネルの中から出て来る汽車の絵も好きであつたし、鎧武者よろいむすや軍人の絵も好きであつたが、「絵探し」ほど彼を喜ばせたものはなかつた。枯れ木の枝とばかり思つてみると、その枝の線が馬の首であつたりする線の一人二役、あの「絵探し」というものを、若い叔父さんはいろいろと描いてみせて、彼に隠れた形を探させるのであつた。「謎」というものの魅力が初めて彼の心を捉えたのは、この叔父さんの「絵探し」であつた。

同時に、叔父さんの絵心が彼に絵というものの興味を教えた。この叔父さんはその頃たぶん十六、七歳であつたのだが、後には写真術を修得して、写真館を開きかけたりしたほどあ

つて、いくらか美術心を持つていたのに違いない。それ以来小学校へ上がるまで、少しも文字を教えられなかつたので、彼は病床に腹這いはらばになつて絵ばかりを描いた。それゆゑに彼は病気が楽しいほどであつた。紙にメンコに似た絵を描いて、それを丸く切り抜いて、幾枚も同じようなものを拵こしらえ、家人や遊びに來た近所の子供に分け与えて喜んでいたこともある。それはいわば彼のジャーナリスト的な嗜好しこうの最初の現れであつた。ある時、文字を知らないけれど、何か言葉が書きたいものだから、彼は絵文字を發明した。「盲目曆めくらよみ」というものがある。あれと同じような工夫をして、絵でいろいろな言葉を書いた。それも病床の楽しみの一つであつた。

病床ほど孤独の楽しみを教えるものはない。水囊、体温計、苦いけれど甘い水薬、熱病の夢、即興詩、石盤と石筆と、紙と筆と、そして絵と、絵文字と、この豊富な魅力が彼を病床に、引いては病氣そのものに惹きつけた。強いて病氣になろうとする気持ちさえ芽生えて來た。彼の少年期から青年期へかけての病身は、一つはこの病床への魅力、そのなせる業わざであつたかもしれないのである。

彼の記憶がやや連絡を持ちはじめるのは、数え年五歳の頃

からである。しかし、連絡といつても、それは抽象的な觀念の上の連絡であつて、具体的な個々の出来事の年代や順序はほとんど思い出せない。その六歳から、八歳で小学校へ入るまでのおよそ二年間に、彼にどういふ世界が開けたかを、幾つもの事項について記してみる。

まずその頃の彼に人間としての生存というものが、どんなふう感じられていたか、生や死について、あるいは宗教的な感情について、彼は何かを考えていたか。人の一生が人類史の縮図に似ているという意味から、また彼自身の現在の関心から、そういうことを臚ろげな霧の彼方に探るのも無意味でないように思う。

幼い子供は案外多くのことを考えているものである。大人達は彼等自身の幼時を忘れて、子供は皆頑是ないもの、何もわからないものと極めてしまい、幼児の前で、妙な符牒ふちようを使いながら性のざれ言ざごとなどを口にして憚はばからないけれど、幼児はそういうことをさえ、彼の能力の範囲でほとんど理解している。理解していても幼児の羞恥しゆうちから、そしらぬ顔をして、おもちゃに気を取られているふうを装っている場合さえないではない。それと同じに、生や死や宗教的な感情についても、幼児は、利慾しよくに多忙な大人達よりもむしろ敏感である。

彼の家の宗旨しゆじは先祖以来ぜんしゆ禅宗であつたが、彼の家庭にはほとんど信仰生活というものは見られなかつた。父は先にも書

いた通りむしろ極端な論理主義者自由主義者であつて、信仰を輕蔑けいごうしていたし、母もそれに近く、ただ祖母だけは信心心ということをお口にし、先祖の祭りも大切にしたいけれど、それは一つの行儀作法、あるいは悪事災難よけみたいなもので、祖先を敬い、その加護によつて一家の安穩あんのんを祈る以上には出でなかつた。前に彼の祖母を小言幸兵衛こごんこうべに比べたが、それと似た意味で彼女はまた担ぎ屋でもあつた。シ（死）の字を忌み嫌つたし、首を斬るとか首をつるとかいう言葉を聞くと「鶴亀つるかめ鶴亀」と口に出して唱えた。祖母は眞実その通りに考へていたのである。彼女ははなはだしく死を恐れた。父の就職以前にはずいぶん浮世の苦勞なを嘗めていたのだけれど、少しも厭世家えんせいかとはならなかつた代わりに、未来の救いをも信じることができなかつた。彼女の信心は老年となり死病にとりつかれてからでさえも、あくまで現世の利益りやくに対するものであつた。現実家には極樂はお伽噺とぎばなしでしかなかつた。

そういう家庭に育つた彼は、「ののさん、あん」（神仏へおじぎすること）という形式を教えられたほかには、宗教的なものを知らないで大きくなつたのだが、しかし、それとは別に、幼時の彼には、誰にも芽生える宗教的感情の影のようなものがあつた。彼の場合その感情は死と性慾とに結びついてゐた。六、七歳の彼にとつて、空の星と幽霊と死と性的感覺とは、妙につながり合つた一つのものであつた。この場合性

的感覚というのは、現実の性慾とはまるで違った幼児的なものを意味することもある。

そういう感情は昼間ではなくて、夜寝床の中の彼を訪れた蒲団から首を出して眺める襖ふすまや障子しょうじの向こう側、屏風びょうぶの蔭かげにはいつも物の怪もののけが潜ひそんでいた。幽霊の姿ではなくて、多くはお化けの種類に属するものであった。時には異様な動物であることもあった。彼はほとんど息を殺して、胸をドキドキさせながら、「きつとあすこにそいつがいるんだ。目を細くして笑っているんだ。もし障子の向こうへ一歩でも踏み出したら、きつとそいつが目に見えるに違いない」と、考えまいたすればするほど、そのものの怖さが加速度に大きくなって行った。

独りで寝ている時には、そういう恐怖と織りまざるようにして、もう一つの怖さはそれほどないけれど、奥底の知らない恐れのようなものに襲われることがしばしばであった。後者には、しかし、恐れとともに何かしら甘い味わいを感じられた（彼は小学校へ入る前年まで祖母に添い寝をして貰もらい、皺しわくちやの乳房ちちに縊すがっていたはずであるから、この記憶はもしかしたら小学初年級頃から始まったものかもしれない。しかし、そうでないようにも考えられる。あるいは前に記したたびたびの病気の折り、昼間一人寝かされていた時の記憶かもしれない。また、夜明け方祖母が起きて行ってしまったあ

となどにも、そういう感情が来たのではないかと思う。彼はそのような肉体的感覚を今でも思い出すことができる。それは寝ていて自分の腿の内側と内側とが触れ合う、擦つたような、総毛立つような、そしてまたひどく懐かしいような感触であった。その感覚自体が何かしら空の星のごとく遙かなるものを象徴するかに感じられた。大人の言葉で表現すれば、「物自体」とか「意志」とかいうものに似ていた。それはプラトンの二頭馬車のように、無限の天空を天翔けるものであった。

少なくとも彼の経験では、少年時代の性慾はつねに死を連想したのであるが、この幼年時代の腿の感触も永遠なるものとともに死に結びついていた。そして、それはまた彼の幼児的厭世観につながっていたのである。

彼はその時何かしら遠い遠いもの、生命の彼方のものを感じた。その感情が同時に現実嫌悪となった。死ぬなんてなんでもない、むしろ楽しく願わしいことのように思われた。これらの幼児としてはかなり複雑な感情が、しかし大人のように色分けをしないで、ただ一つのフワフワとした雲のようなものとなって、あの腿の感覚に伴って、ほとんど一刹那に群がり湧いた。

こういう幼児の感情は、また同時に原始人類の感情ではな
いだろうか。人類は生まれながらにして文化人よりもむしろ

物自体 カント 下イッ、

一七二四—一八〇四)が
説いた概念。本体と同義
で、現象の対。現象の根
源にあり、主観的に認識
することはできないが、
思惟することは可能とさ
れる。

鋭く、現象の向こうに「物自体」を感じたのではないだろうか。原始人のうぶな心に直接ぶつかって来た天体への限りなき恐怖と甘美なる思慕。それは、文化人の多くにはもはや幼年時代にだけしか感じられないものとなったのではないだろうか。

原始人類は汎神論者であり、偶像崇拝家である。そのミニチュアでもあるかのごとく幼年時代の彼もまた汎神的、偶像崇拝的であった。しかし、家庭だけが世界であった彼は、原始人のような適當の偶像を持たなかったし、それを製作する力もなかった。といって、仏壇の仏さまは大人の独占物であった。彼は神をみずから所有しないでは気がすまなかったのだ。彼の昼間の宗教は夜の寢床の中のそれに比べてひどく低俗であった。彼はもはや天翔けることをしないで、小机の中の紙包みに、現世の安心を求めた。

先にも記した通り、彼の祖父が老後の写経などの折り、身辺を離さなかった抽斗ひきぞとの多い桐の小机は、その頃はもう真っ黒になって、彼の持ち物となっていたが、小机の上部に小さな開き戸の部分があつて、彼はその中を、一番大切なものを入れる場所、いわば神聖なる場所と心に定めていた。そして、彼の偶像である御神体は、その開き戸の中の最も奥まったところに安置せられたのである。

不思議なことに、彼はこの御神体が何であつたかを思い出

することができない。それが仏像や神像でなかったことは確かである。ともすれば、それは彼自身で何か絵のようなものを書いた紙片に過ぎなかったかもしれない。それを幾枚も白紙に包んで、その頃病気の折りなどによく頂かされた水天宮すいてんぐうのお守りの包みのようなものにして、そこに安置し、これさえあれば大丈夫だ、この神様が守って下さるのだと、すっかり安心していたのである。ある場合には、それは一人の美しい少女を象徴する恋愛の護符であったこともあるが、それについては後に述べる機会がある。

幼年の彼が、こういう御神体を必要としたことは異様に感じられるかもしれない。彼はそんな偶像に頼らなくても、もっと力強い保護者を持つていたではないか。父や母や祖母があつたではないか。しかし、彼はそれらの家族にはことごとくを打ち開けて寄りすが縋れない気持ちがあつた。家族の人々には、口でいえないし、いうのも恥はずかしいし、いつたところでもとでも理解して貰えないような幻の国の感情があつた。それを書くのは恐ろしいけれど、彼にはそんな幼年時代に、すでに父や母や祖母への妙な冷やかさがあつた。後に肉親嫌悪となるところの芽生えがあつた。

彼はお婆さん子で、六つまでも、その乳をしゃぶっていたくらいだから、甘えん坊であつたことはもちろんであるが、その甘えるということに、非常に強い羞恥しゆうちと嫌悪を感じ始めたのは、小学校入学前後からその後の少年時代にかけてである。

彼は学校に入つてからも長いあいだ、家では名を呼ばれないで「ぼん」（坊やの意）と呼ばれていた。彼はこの「ぼん」という愛称がゾツとするほど嫌いであつた。「ぼん」という発音のうちに、あらゆる意味をこめて彼そのものが象徴されていたからである。

彼の父は、お婆さん子の彼があまりにお人好しで、甘ちゃんで、しゃつきりしたところのないのを、齒痒はがゆがりもし、彼の将来のために氣遣きづかつてもいたようである。ごく幼時には、父のそういう感情が彼に向かつて爆発することがしばしばあつた。彼の側からはそれが敵意に近いもののようにさえ感じられた。立ち入つた解釈をするならば、それは本当に父の潜在的敵意であつたかもしれない。父と祖母とが、表面上はともかく、潜在的にはどこやら打ちとけぬところがあつたことは前にも触れたが、その潜在的敵意が、祖母と同一体であるかのごとき彼に転嫁されたのであつたかもしれない。四、五歳の頃、彼はよく父の平手打ちを喰らつた。容赦ようしやのない平手打ちであつた。そのうえ、父は彼を人けのない薄暗くて広い

部屋のテーブルの上のせておいて、襖をしめきつて、遠く
の書齋へ帰つてしまふことがしばしばあった。むろん折檻の
ためである。そのつどどういふ悪さをして折檻されたのかは
少しも記憶がないけれど、それほど悪質のものであったとは
考えられない。気弱でお人好して正直ものの彼に悪質の悪さ
ができるはずもなかった。父はただ癩癩を起こした場合が多
いのだと思う。その頃父は紡績連合会事務所の閑暇の多い生
活をしていた。

幼い彼は独りでとうてい降りることのできない冷たいテー
ブルの上で、遙か下に見える暈を覗いて、そのあまりの高さ
に震え上がり、シーンと静まりかえつた薄暗い部屋の物凄さ
に、あらゆる物の怪を想像に描きながら、死ぬかとはばかり泣
き叫ぶのであった。母は父に遠慮をして彼を助けてはくれな
かった。助けてくれるのは、いつも祖母であった。祖母は
「おお可哀相に可哀相に」といいながら、彼をテーブルから
抱きおろしたうえ、三度に一度は父に口小言を言いきえした。
父はそれらの折檻を取り返すほど彼を愛撫することはなかつ
たようである。もしそういう愛撫があつたならば、彼はあの
ようにただ恐れはしなかつたであろう。幼時の彼に取つては
父は少しも親しみのない恐ろしいものに過ぎなかつた。

これは彼のごく幼少のことであるが、六歳七歳と成長する
につれて、父は仕事が忙しくなり（その頃父は実業界に転身

し始めていた)、子供を愛撫する暇も折檻する暇もなくなつて、彼とはほとんど他人になつてしまった。もう恐ろしくはなかつたけれど、親しむことはできなかつた。彼は長いあいだ父を一つの嫌悪すべき体臭として感じていた。朝の洗面をするごとに、彼の^て手拭いの隣にかけてある父の手拭いからの男の体臭を嗅いで、それを感じていた(父は彼の真実の父であつたから彼を愛しなかつたはずはない。彼自身も後には父を尊敬した。これはただ幼時の感情のみを切り離してできる限り偽りなく記述したまでである。ある型の父親は、子供が青年時代を過ぎてからでなくては、本当に理解されない場合もあるのだ。これにはまたおそらく精神分析学のいわゆる「エディポス・コンプレクス」の意味が含まれているのであるが、そのことは後に述べる機会がある)。

父は折檻をやめてからも、折りにふれては、「ぼんはあかん、ぼんはぼんやりものや」(坊やは駄目だ。ぼうつとしてゐる)と世間の子供(それが町人の子供達なのである)と比べて、おっとりし過ぎていることを憂える言葉を吐いた。むろん愛するがゆえの心遣いであるが彼にはそうは響かなくて、「ぼん」と「ぼんやり」の^{つづ}対句が、名状しがたい自己嫌悪の響きとなつて、彼の心を^む蝕んだ。

彼は叱られるばかりではなく、^褒褒められることもむろんあつた。父や母も時々褒めたが、最もよく褒めるのは祖母であ

った。祖母には女らしく褒めておだてて育てる気持ちがあった。しかし、彼は小学校へ入る少し前から、褒められることをまったく喜ばぬばかりか、かえって不思議な嫌悪を感じるようになっていた。これが前に記した「甘えるということに、強い羞恥と嫌悪を感じ始めた」あの変化と一致するのである。

彼の父母や祖母は「何事も自分のことは自分でせよ。女中の手を煩わづらわすな」という世間普通の教えを彼に教えていたが、小学校へ入ってからは、毎朝彼が自分の蒲団ふとんを自分でかたづけ、けることもその一つであった。彼はわがままであつたから、その教えを実践することはごくまれであつたけれど、時たま気まぐれに蒲団をかたづけることもないではなかつた。すると祖母は待ち構えていたように、「偉い、偉い、ぼんはほんまに偉いなあ」と繰り返し褒め上げるのをつねとしたが、彼はその褒め言葉を聞くと、悪寒おかえんといつてもよいほどの、何かこう身体がねじられて来るような羞恥と嫌悪を感じたのである。蒲団をかたづけることは造作ぞうさもないのだけれど、その褒め言葉を聞くのがいやさに、翌朝はわざと怠なまけてしまうほどであつた。

そして、だんだん彼は家族のものの褒め言葉を恐れるようになったのだが、この身震いするような嫌悪は一体どこから来たのであろうか。わがままからの天邪鬼あまのじやくと考えるのは最も容易であるが、そういう一般的な解釈では何かしら言い尽く

せないものがあつた。たとえわがままにもせよ、その原因がなければならなかつた。彼は一体どうしてそれほどひねくれたのか。外目には「ほんやり者」といわれるほど素直であつた彼が、心の奥底ではどうしてそんな烈しい自己嫌悪を感じはじめたのか、これこそやがて肉親嫌悪、同類憎悪に昂進する彼の異端性の源であつたのだから、不注意に見逃すことはできない。前に父の折檻や彼の父への感情について記したのも、もしやそこに何かの秘密が伏在しているのではないかと疑つたからである。

故郷に夏ありき

五十六歳

1951・8・27
全文

初めて一人旅をしたのは小学三年生（明治三十六年、数え年十歳）の夏であった。名古屋から三重県津市の親戚へ、毎年夏休みの海水浴に出かける例でその年から一人で汽車に乗ったのである。まだ小さな汽車であった。三等車の横に長い腰かけには畳表が敷いてあった。走る窓から眺めると、遠くの山は動かず、手前の小山は少し動き、もつと手前の田や畑は、四角なうねを、たちまち菱形にくずしながら、すぐ目の下は縞しまになつて恐ろしい早さで、うしろへうしろへと走つて行く。私は多くの少年と同じに汽車が大好き、ことに一人旅の放浪味が楽しかった。駅弁もおいしかった。

津市の親戚は門長屋のついた士族屋敷で、塔とうせ世橋の近くにあった。私より二歳年上の従兄につれられて、そこから毎日にえさき贅崎の浜へ半里のたんぼ道を歩いた。炎天のたんぼ道には海の匂いが満ちていた。従兄は道の木の葉をもいで柴しば笛ぶえを吹いた。その烈しい音がひばりの声のように、青空にこだました。贅崎の白い砂の遠浅の海はすでに海水浴場と名づけられていたけれど、田舎らしい淋しきで、ビーチ・パラソルも派手

初出 夕刊毎日新聞 八月
二十七号／昭和二十六年
年 毎日新聞社
底本 うつし世は夢／昭和
六十二年九月 講談社

な海水着もまだないころであった。私は従兄に蛙泳ぎを教わった。あの地方には古くから観海流が勢力をもっていた。あの時は従兄の友達数名とボートで沖に出て、嵐にあい、どうしても海岸にもどれないという命がけの冒険もした。

海から疲れて帰って、親戚の家の五右衛門風呂に入るのも楽しかった。庭が広く、落ち葉を集めてたくのだが、その匂いが今も鼻に残っている。朝早く起きて庭に出ると、朝もやの中に、ゆうべの松葉の名残りの匂いが、すがすがしく漂っていた思い出も、郷愁の一つである。

涙香心酔

五十四歳

1949・10・1
 抜粋

私が探偵小説の面白味を初めて味わったのは小学三年生のときであったと思う。算^{かぞ}えてみると、日露戦争の直前、明治三十六年に当たる。巖谷小波山人の世界お伽噺^{いわや さざなみざんじん}の大きな活字に夢中になっているところで、私はまだ新聞を読む力もなかったが、生来^{せいらい}小説好きの母は新聞小説を欠かさず読んでいて、

私は毎日その話を聞かせてもらうのが一つの楽しみであった。そのころ、大阪毎日新聞に菊池幽芳^{きくちゆうほう}訳の「秘中の秘^{ひちゅうのひ}」が連載され、これが非常にサスペンスのあるミステリ小説で、母の好みにも叶^{かな}い、私は毎日その挿絵を見ながら、母の話をおくのを、こよなき喜びとしていた。「秘中の秘」の原作が何であるか、まだ調べていないが、古い型の怪奇探偵小説としてかなり面白いもので、初めてそういう味に接した私を、夢中にさせるには充分であった。

ちょうどその時分、小学校に年に一度の学芸会があつて、私は三年生の中から選ばれて、何かお話することになったが、それを申し渡されたとき、私はただちに「秘中の秘」のお話をするにきめたのである。教室を幾つもぶちぬいて、

初出 新青年 十月号／昭

和二十四年 博友社 *

連載「探偵小説三十年」

第一回

底本 探偵小説四十年／昭

和三十六年七月 桃源社

日露戦争 明治三十七年

(一九〇四) 二月から翌

年九月まで。

全生徒のほかに父兄なども招待する、はれがましい会であつた。私は黒と薄鼠うすねずみの荒い縦縞たてじまの米疏よねりゆうの袷あわせに袴はかまをはいて演壇に立った。この米疏のパツチリと派手な柄が非常に好きで、おいに得意になつて壇上にのぼつたのだが、人の前で話をするのはまったく初めてのうえに、話の内容が相当こみいった大人の小説だったので、聴衆を面白がらせるなんて思いもよらず、独り合点の話し方で、話の筋も通らず、失敗を意識して壇を降りたことであつた。

国家(じい)

六十四歳

1959・5・1
全文

私は小学校に入る前から中学卒業までのあいだ、Tという同年の親友をもっていた。あとにも先にもTほど仲のよかつた友達はない。

私の父の店は名古屋市の元の株式取引所の前にあつたので、そこに並んでいる株式仲買人（今の証券会社）の子供たちとよく遊んだ。Tもその一人で仲買人の子であつたが、中学を出るとまもなく病死してしまつた。

Tとはじめて出会つたのは五歳ぐらいのときであつた。株式取引所の広い前庭で、ひよっこ顔を合わせたのである。取引所も引けてしまつた夕方、あたりには誰もいなかった。二人は十メートルも離れて、向かいあつて突つ立つたまま、長いあいだ睨み合つていた。子供というものは動物に近いので、ちょうど犬と犬とが、初めて出会つたときに似ていた。犬がそうするように、私たちは臆病らしく、少しずつ近づいていった。それだけを覚えてゐる。近づいて行つて何を話したのか、それとも、だんまりで別れたのか、まったく記憶がない。ただ、遠くから睨み合つていたあの光景が、今でも絵

初出 こども部屋 五月号
／昭和三十四年 ベタ
I・ホーム・プロダクツ
底本 うつし世は夢／昭和
六十二年九月 講談社

T 丹下高福たかみち 大正二年
(一九一三)、名古屋市中
死去。

のように浮かんでくる。

Tとはそれから急速に親しくなった。Tは鼻の高い名古屋美人系の顔をしていた。父母とも美男美女だったからであろう。「何々ちゃん！ あそばない？」というかわりに、その頃（明治三十年代）の名古屋では、「タロさまは、えも？」（「タロさまは、いりやあすかえも？」を略したもの。「いりやあすかえも」は「いらつしやいますかえ」の意）といつて表から呼び出す。タロとは私の本名太郎のこと。私の方からTをたずねるときには、彼の家の入口へ行つて「Tさまは、えも？」と呼ぶのである。

そのTとは、あらゆる遊びをともししたが、「国家ごっこ」もその一つであつた。高さ十センチほどの将校か兵隊の瀬戸物人形がはやつていて、私たちはそれを何十となく買い集め、「国家ごっこ」をして遊んだ。たとえば、私の家の八畳の和室で、Tと私とが二つの国を作つて遊ぶのである。国の境界線には積み木などが用いられた。そして、Tは八畳間の一方の隅、私はそれとは離れた他の隅に、それぞれ首府を構える。「おれの国では……」「ごつちの国では……」と、声を出して、何かと国内の整備をしたものである。この「おれの国」というのが口ぐせになつて、オモチャ遊びをしないときでも「おれ」という代わりに「おれの国」ということが、よくあつた。

菓子箱などで、宮殿や城廓を作り、国王や、侍従長や、重臣や、総理大臣や、そのほかの閣僚や、元帥や、将官や、佐官や、尉官や、兵隊などの人形が、適當の場所に並べられ、軍隊は練習場に整列し、軍艦は紐で区切った港に浮かび、その上には海軍の将校や水兵がのるのである（そのころは、むろん、まだ空軍はなかった）。そういう遊びだから、小学校以前の幼時ではむつかしい。たぶん小学校二、三年のころだったのであろう。

さて、二つの国家ができ上がると、両国の国交がはじまる。それには一方の国の全権大使が部下を引きつれて、相手国を訪問しなければならぬ。広い暈の上を、両手で、幾人かの瀬戸人形をトコトコと歩かせ、相手国の境界線にはいるのである。すると、その国の外務大臣が出迎え、オモチャの大砲が歓迎の号砲を発射する。それから、外務大臣はこちらの使節を宮殿に案内して、国王に謁見させるといふ順序だ。全権と外務大臣、全権と国王の会話は、すべて、私とTがコワイ口を喋るのである。

そういう遊びが一般に流行していたわけではなく、私たち二人の発明であった。そのころは日露戦争の直後で、小村寿太郎全権が講話談判で活躍したあとなので、子供の遊びにも、そういう世相が反映していたのである。

やがて、何かのきっかけで、両国不和となり、ついに戦争

がはじまるのだが、この戦争が遊びのクライマックスなのである。瀬戸物人形の軍人が列を作って出陣する。オモチャの軍艦は、紐で仕切った海面を遊弋する。そして、海陸相呼応して戦うのだ。

陸にはオモチャの野砲が砲列をしき、パチンパチンとかんしゃく玉の砲声をあげ、ピンポンの玉かなんかが、砲弾がわりに敵陣に投げこまれる。すると、そこに整列していた瀬戸人形の兵隊が、算を乱して倒れるのである。

結局どちらかが勝って、国王が相手国へ乗りこんで行くこともある。直接国王同士が談判するか、あるいは全権大使によって講和会議が開かれ、敗けた国は領土の一部を敵国に割譲（そのころの用語）することになる。「ここからここまでだよ」といつて積み木の境界線を置きかえるのだ。

私は、自分たちで発明した、この「国家ごっこ」が面白くてたまらなかつた。中学の一年生ぐらいになつても、ときには、この遊びをやってみることがあつた。これは戦争将棋を具体化したようなもので、一つの国家とその国民を、思うままにあやつっているのだという気持ちだが、ひどく愉しかつたのである。

戦争だけではない。この国家には大蔵大臣も、造幣局もあつて、オモチャの紙幣がやりとりされ、敗戦の際には賠償金にも使われた。また、国王から臣下に、その紙幣で月給を支

払うことまでやったものである。

あのころの遊びを、一つ一つ思い出してみると、それぞれに面白いが、この「国家ごっこ」は、そのうちでも最も愉しかったものの一つである。ほかに「旅順海戦館」という四畳半一杯の大仕掛けな遊びのことは、いつか随筆に書いた。また、ギンナンの実や椿の種でやる角力すもうごっこ、これも「ビイ玉」という小文を書いている。それに幻灯というものの郷愁、レンズ遊びの面白さ。これについては「レンズ嗜好しこう」という随筆を書いたことがある。それらが、幼少年時の私を喜ばせた遊びの主なものであった。

押川春浪

二十一歳

1916・3・3
抜粋

初出 奇譚ノ猿の言葉ノ昭

和六十三年五月 講談社

* 手製本『奇譚』を写

真復刻して収録。序文は

大正五年三月三日

底本 伊賀一筆 第一号ノ

平成二十六年十二月名

張人外境

岩窟ノ海賊 巖窟の海賊。

『幽霊旅館』(明治四十年、

本郷書院)に収録。

「岩窟ノ海賊」初メテ春浪ニ接シタノガコノ一篇デアアル。
明治三十八、九年ノ頃「少年世界」ニ連載サレタ。ソノ頃最
モ面白イト思ツタ小説。僕ガ小波山人ノ御伽噺カラ冒險小説
ニ目ヲ転ジタ始マリデアアル。二人ノ少年ガ海岸ノ岩窟内ニ捕
ワレタ姉ヲ救イ、地下カラ進ンデ父ノ家ヲ犯サントスル賊ノ
謀ノ裏ヲ行ツテ遂ニコレヲ亡ボストイウ筋。月蔭暗キ海岸、
波ノ音ニ和シテ地下ヨリ幽カニ響キ来ル歌ノ声。コノアタリ
実ニヨイト思ツタ。

故郷の味

五十七歳

1952・1・22
全文

名古屋のたべもので、まつさきに思いだすのは豆腐とたにしの木の芽田楽だ。小学校時代（明治三十年代の終わり）まで名古屋が今よりずっと狭いころ、初年級の遠足には八幡山へ、よく行った。花のころの遊樂地で、小さなすりばち山のまわりに木の芽田楽の屋台店が並び、鰻屋うなぎのようにうちわをパタパタいわせていた。あの匂いと味が忘れられない。

名古屋をはなれてからも、春の旅にはあの味噌のこげた串ざしの豆腐への郷愁にさそわれて、わざわざ名古屋に途中下車したこともある。大須観音の境内にも田楽の屋台店がたくさん並んでいた。東京の料理屋でも豆腐の味噌田楽を出すことがあるけれども、いやに上品で、名古屋の屋台田楽の野趣やしゆと風味には遠くおよばない。東京にも大阪にも、ああいう田楽店はまったく見当たらない。

初出 名古屋タイムズ 一
月二十二日号／昭和二十
七年 名古屋タイムズ社
底本 うつし世は夢／昭和
六十二年九月 講談社

海草美味

六十一歳

1956・6・1
抜粋

海草といってもコンブとワカメの話である。私は青年期から中年期にかけては、海草があまり好きでなかったが、少年期には駄菓子屋の店で買うコンブが好物であった。三寸ぐらいの短冊型に切つて、二十枚ほどを赤い紙の帯でしばつた甘酸っぱいコンブで、明治四十年前後の当時は一束五厘ぐらいの値段であつた。あれをしきりにしがんだものである。その頃私は名古屋にいたのだが、コンブの嗜好は関西のもので、あの甘酸っぱい短冊コンブは、大阪には今でもあると思う。

初出 あじくりげ 六月号
／昭和三十一年 名古屋
タイムズ社東海しにせの
会
底本 わが夢と真実／昭和
三十二年八月 東京創元
社

味オンチ

六十二歳

1957・7・5
抜粋

たとえば、わたしは卵焼きが好物なのである。バーなどで腹がへつてくると、卵焼きを注文する。それがなければオムレツでも我慢する。だれか一緒にたべないかといつても、一人も同調者がいない。

わたしは子供のころ名古屋市に住んでいたのだが、たしか^{わがす}大須観音のそばだったと思う、大衆料理屋の「万梅」といううちがあつて、わたしの祖母はそこが好きで、明治末期に、よくわたしをつれていった。その卵焼きがうまかったのが、たぶん病みつきなのである。

初出 あまカラ 七十一号
／昭和三十二年七月 廿
辛社
底本 うつし世は夢／昭和
六十二年九月 講談社

カステーラ・ノスタルジア

六十五歳

1960・6・?
抜粋

私は幼少年時代を名古屋市の中心地区で暮らしたが、明治末期のそのころは一般に家庭生活が質素で、卵菓子や卵料理は時たましか口にはいらなかった。幼年時、はじめて到来の長崎カステーラをたべたときには、世の中にこんなうまいものがあるかしらと思った。

私は卵のはいつたものは何でも好きで、料理の方でいえば、茶碗蒸し、親子丼、オムレツ、卵焼き、卵豆腐、柳川鍋、ゆで卵にいたるまで、子供のころはもちろん、今でも大好物である。おとなのくせに卵焼きが好きだといって笑われるが、好きなものは仕方がない。

初出 華詞集 第五号／昭和
三十五年六月二十三日
長崎屋
底本 うつし世は夢／昭和
六十二年九月 講談社

到来 底本「到着」を改めた。

いわづもの

五十八歳

1953・4・15
全文

「マンジユウがこわい」という落語があるが、その中の会話に、人間は自分のエナ（胎児が包まれていた胞衣、胎盤）を埋めた土の上を、最初に通つたものが、一生こわいのだとう、昔からのいい伝えが出て来る。私の子供のじぶんには、このいい伝えが、まだ世間に生きていて、私の家庭でも、祖母などがよく口にした。お産のときのエナを土に埋めることも、地方によつては、現実に行われていた。

私のエナの上を最初に通つたのは。虫のクモであつたらしい。私の父のそれも、やはりクモであつたらしい。

父が子供の私に、あるとき、こんなことを話した。父の少年時代の出来事である。藩の重役であつた祖父につれられて、小さなカミシモを着て、殿様にお目通りをしたという、明治二、三年のころの話だ。武家屋敷の自宅の古い大きな部屋の、黒ずんだ壁に、一匹の巨大なクモが這つていた。少年の父は、ただ一人その部屋を通りかかつて、壁の上の巨大な怪物を見つけ、ギョツとして立ちすくんだ。しかし、武士の子だから、こわくても逃げ出しはしなかつた。どこからか一本の鎗やちを持

初出 読切小説集 臨時増

刊号/昭和二十八年四月

荒木書房新社

底本 わが夢と真実/昭和

三十二年八月 東京創元

社

つて来て、鞆さやをはずし、ヤツとばかり、壁の怪物の、丸くふくれあがった臀部でんぶを、刺し貫いたという。

黒い血が流れたか、赤い血が流れたか、父はそこまでは話さなかつた。

クモの胴体だけが、茶呑み茶碗ほどもあつたという。私の国は暖国だから、今でもそれに近い大きさのクモが、古い家にはいるだろうと思う。その巨大なクモが、父の鎗に刺されて、壁に縫いつけられたまま、苦悶くもんの形相ぎやうそうものすごく、二つの大きな白い目で、グツと父の方を睨にらんだという。

父はその晩、熱を出した。それ以来、どんな小さなクモでも、ゾツとするほど、こわくなつたというのである。私の祖母は、父のエナの上を最初に這つたのは、クモにちがいない。もしそれが蛇だつたら、蛇がおなじようにこわくなるのだと解説した。

父のクモ恐怖症は、中年になつても治らなかつた。畳の上を小さなクモが這っていると、自分では始末ができないで、家人に殺させるか捨てさせるかしたものである。父の四十歳前後の話だが、母や家のものは、父のクモぎらいは知つていても、自分たちはそれほどこわくないので、つい忘れて、とんだしくじりをしたことがある。

その頃、針金をこまかく螺旋らせんに巻いて足にした、径二寸ほどの、タコだとかクモだとかの、おもちゃが流行した。竹に

糸をつけてその糸の先に赤いタコや、黒いクモが括りつけてあり、竹を釣竿のように持つて、ヒヨイヒヨいと動かすと、螺旋針金の八本の足がブルンブルンとふるえて、まるで生きているように見えるのだ。

私の幼い弟に、誰かが、そのクモのおもちやをくれた。弟はそれを持つて、朝早く、まだ寝ている父の枕もとへ行き、自慢らしく、それを父の顔の上にさし出して、ブルンブルンとふるわせてみせたのである。

ねぼけまなこの父は、それを本物の巨大なクモだと思った。黒い怪物が天井からクモの糸で、額の真上にさがつて来たのだと思った。

父は叫び声を立てて、寢床からとびおきた。そして母を呼びつけ、おそろしい形相で叱りつけた。まっ青な顔をして、ふるえていたという。この時も、やつぱり熱を出して二、三日寝こんだと思う。

私はこの遺伝を受けていた。祖母にいわせれば、私のエナの上を最初にクモが這つたのである。そのころ、私の家に古い和本の『大和名所図会』^{ずえ}があつた。その見開きの大きな挿絵に化けグモ退治の図があつた。甲冑^{かちゅう}に身をかためた武士が、空に大きな巣を張つて、頭上からおそいかかつて来る人間よりも大きい化けグモに、刀を抜いて斬りかかつている絵であつた。

大和名所図会 秋里離島著

竹原春朝齋画、寛政三年

(二七九)刊。

幼年の私は、祖母の説明を聞きながら、この名所図会を見るのが好きだったが、化けグモのところだけは、とぼして見ることにはしていた。こわいもの見たさに、そそられもしたが、見ればゾーッとする。その本の中に、その絵があると思うと、本そのものさえ、ぶきみであった。

クモのどこがこわいかというと、足の多いのがいやなのである。足をやぐらのように立ててあるく、臀しりのふくらんだクモもこわいが、壁の上を、壁と同じ色で、かすみのようにヘラヘラと、非常な速度で逃げる平グモひらぐもも、おそろしかった。また庭の木の枝に巣を張って、八本の足を二本ずつ、ピツタリと合わせて四本しか足のないような顔をして、空中にじつとしてゐる、ケバケバしい極彩色の女郎グモも、いやらしかった。あの四本になった足の形がなんだか笑っている人間の表情に似ていてじつに気味がわるかった。

タコもイヤに足が多いけれど、ああいうグニヤグニヤしたのは、こわくなかった。足に節があつて、ガサガサと、すばやく動くあの感じがおそろしかった。だから、エビ、カニの類は、やつぱりいやなのである。といつて、ムカデやゲジゲジのように足が多くなると、こわいことはこわいけれども、クモほどではない。さらにそれが進んで、蛇のようにのたくるやつは、私はもうほとんどこわくなかった。蛇にはかえつて一種の魅力を覚えるほどであった。

少年時代、クモとおなじぐらいこわかったのはコオロギだった。黒いエンマコオロギではなく、それより大きくて、胴体にも足にも、茶色の縞しまがあつて、あと足が長くて、ピョンピョンと飛んで逃げる、あのコオロギなのだ。

私の一番こわい夢は、このコオロギの夢であつた。何度も同じ夢を見るので、夜寝るのがおそろしかった。

そのころの私の家の庭は、いわゆる「坪の内」で、建物と塀とで四角に区切られた狭い庭であつたが、夢で、私はこの庭に降り立つていた。

空は昼でもなく、夜でもなく、夢にしかない、陰気な色をしていた。その空から、何かおそろしい速度で、私の真上に落ちて来るものがあつたが、近づくにしがつて、一匹のコオロギとわかつた。豆つぶほどのコオロギが、みるみる、大きくなり、アツと思うまに、それが四角な庭の空一杯の大きになつて、私の頭の上に、のしかかつて来た。

女の帯ほどの中の茶色の縞が、そいつのからだ一杯に並んでいた。下から見えるのは、そのコオロギの腹部であつた。一番いやらしい腹部であつた。

コオロギの足は、たしか六本だつたと思うが、私にはもつと多く感じられた。その足が腹部の中心から生えて四方にひろがっている。腹部の足のつけ根のところは、茶色が薄くなつて、異様に白っぽくなつていた。その薄白い足が、一か所

から、グジャグジャと四方に出ている部分が、私には形容もできないほど、おそろしいのだ。

その戦慄^{せんりつ}すべき部分が、実物の何十倍に拡大されて、私の頭上に迫って来たのである。夢の常として、私は金しぼりにあつたように、まったく身動きができなかった。私の頬に、あのぶきみな足を八方にのばした、巨大なコオロギの腹部が、モヤモヤと蠢^{うごめ}きながら、触れようとした。今にも、そのいやらしい腹部で、おしつぶされそうになった。そこで、私は絶叫して目をさますのである。すると、家中が寝しずまつていて、私の目の前には、ただ闇があるばかりであつた。

あの可愛らしいコオロギが、どうしてそんなにおそろしいのか、誰にもわからないだろうと思う。しかし、私の少年時代の夢をふりかえってみて、何がおそろしいと行って、あれほどおそろしかつたものは、なかつたのである。

クモもコオロギも、今ではそれほどこわくはない。自分で紙でつまんで捨てることができる。しかし、こういうふうには、少年時代のこわいものが、次々と消えて行つたことを私は残念に思っている。

私はお化けがこわかつた。夜、墓場を歩くのがこわかつた。ところが、青年時代、まだクモのこわさは衰えないのに、墓場のこわさは消えてしまった。友達は、深夜、広い墓場を通るのは、やつぱりこわいといったが、私は残念ながら少しも

こわくなかった。そして、十年ほど前から、クモさえあまりこわくなくなってしまうた。少年的なこわいものを、ほとんど失ってしまった。

大人になると、人くさくなつて、少年の肌を失うが、それと同じように、こわいものがなくなるのは、少年の鋭敏な情緒を失うことで、私には少しもありがたくないのである。もつとこわがりたい。何でもない、人の笑うようなものに、もつとこわがりたい。

ビイ玉

四十二歳

1936・11・1
全文

フランスの子供はビイ玉というおもちゃに不思議な愛着を感じてらしい。ジードの「一粒の麦もし死なずば」にも、コクトオの「わが青春記」にも、このビイ玉が、少年期への郷愁として、さも懐かしげに美しく描かれている。

ビイ玉の遊び方はよく知らないけれど、形は日本の「おはじき」に類する小さい石の玉で、ジードの書いているところによると、「黒瑪瑙めノウに赤道線と回帰線とが白く浮かんでいるものや、紅瑪瑙の半透明の明るい鼈甲色べつこうをしたの」などがあつて、ガラス玉の「おはじき」などよりは美しくもあり高価でもあるらしく思われる。

ジードが少年時代、母につれられて、田舎の祖母の家に滞在していた時、食堂の食器棚の扉に小さな節穴があつて、その節穴の底に何か丸い灰色のスベスベしたものが見えることを発見した。それがジード少年の好奇心をひどくそそつたので、節穴へ小指を入れてその丸いものに触ろうと一生懸命になつてみると、祖母の家の年とつた下婢かひが、

「それはお父さまが、あなたくらいの子供だった時分、その

初出 とつぷ 十一月号／

昭和十一年「とつぷ」

発行所

底本 わが夢と真実／昭和

三十二年八月 東京創元

社

一粒の麦もし死なずば 堀

□大學訳 昭和八年（一

九三三）、十年、第一書

房刊。

わが青春記 堀□大學訳、

昭和十一年（一九三六）、

第一書房刊。

穴へすべりこませたビイ玉ですよ」

と教えてくれる。父のおもちゃのビイ玉が、同じ節穴すべに何十年という長いあいだ、ちゃんとはいつていたかと思うと、ジードはもう夢中になつて、それを取り出してみたくて堪たまらなくなり、子供心に一と工夫して、わざと小指の爪を切らないで、長く伸びるのを待つて、それをほじくり出す。しかし外へ出してみると、別に何でもないだのビイ玉に過ぎないので、またもう一度節穴の中へ落とし込んでしまうという話が「一粒の麦もし死なずば」に書いてある。

赤道のような筋のある瑪瑙瑪瑙のビイ玉なんて、いかにも美しそうで、フランスの子供が羨うらやましいように思われる。僕の子供の時分にも、海岸や河原の美しい小石を拾つて来て愛玩することはあつたけれど、とても瑪瑙瑪瑙のビイ玉の魅力には及ばない。

少年時代を振り返つてビイ玉に類するものを思い出せば、僕の住んでいた名古屋市では、その頃椿つばきの種と銀杏ぎんぎょうの種をもてあそぶことが流行していて、僕にはその二つのものに可愛らしい郷愁がある。

椿の実の皮をむくと、中に幾つかのセピヤ色の硬い種がはいつている。その種の一つ一つはちようど蜜柑みかんの袋かぶのような形をしていて、板の上に投げ出すと、多くは横に倒れるが、中にはその丸い底の部分で不倒翁ふとうわうのように立っているもの

ある。

そこで、子供たちは銘々めいめいの椿の種を一つずつ出し合ひ、一人が両手で振って板の上に投げ出して、丸い底の方で立っていたものを勝ちとして勝負を争う、いわば椿の種すもろうの角力である。

椿の種の中にはごく稀まれに、底の丸い部分が非常に広くて、いくら振つても必ず立ち上がる不死身のものがあつた。そういうものを持つている子供は大得意で、赤や青の漆うるしでもつて、表面を彩色して、その頃の横綱、常陸山ひたちやまだとか梅ヶ谷うめがたにだとかの名を書き入れ、椿角力の大選手として、何の宝にも換えがたく愛蔵したものである。

僕も椿角力では夢中であつた、八百屋から、幾つも幾つも椿の実を買つて来て、もしや不死身の種が出て来やしないかと、それを割つてみるのが、どんなに楽しみだつたらう。そして、もし底の広い、まるでお椀みたいな形の、さも強そうな種を発見すると、丁寧に漆でお化粧してやるのがまた一つの楽しみであつた。それを大切がつたことは、おそらくフランスの子供たちの、赤道のような縞しまのある瑪瑙のビイ玉にも劣らなかつたであらう。

銀杏の方は、あのかぶれ易やすい皮をむくのが一と仕事であつたが、そんな苦勞をしないでも、八百屋には皮をむいた白い銀杏の実を売つていた。しかし、子供たちはできるだけ巨大

な銀杏の実がほしいものだから、むいた奴では気に入らなくて、皮のまま買って来て、苦勞をしてそれをむくのがやつぱり楽しみであった。

この遊び方は、地面に石筆で——石筆というものの懐かしさを今の子供は知っているかしら。僕たちにはあの石筆は、石盤に字を書くという実用以上の意味を持つていた。僕たちは石筆の切れつ端^ぼで、おはじきに類する勝負をした。その頃、石筆もやはり僕らの大切な選手であった——その石筆で地面に筋を引いて、お互いに出しっこをしたたくさんの小さい銀杏の実を、そこへ投げて、大きな銀杏の実で狙い打ちをして、それを一つ一つ筋の外へはじき出す、筋から出た分だけ自分のものになる、という遊戯であった。

そういう遊びだから、投げ打つ方の銀杏の実は、大きければ大きいほど効果的であった。一つだけべらぼうに大きい銀杏を持つていれば、多くの勝負に勝つことができた。

大きい銀杏の実を持つている子供がそれを誇りにして大切がったのはいうまでもない。彼らはその銀杏の実にもお化粧をした。赤い漆、青い漆、そしてやつぱり角力取りの名が書き入れられた。

この二つが、僕の少年時代のビー玉であった。ほかに今も残っているメンコというものがあって、あの裏打ちの馬糞^{ぼふん}紙の妙な匂いも忘れがたいものの一つではあるが、メンコは機

械で印刷し、機械で切り抜いたもので、椿や銀杏のように偶然がなく、天然の美しさがなく、ビイ玉に比ぶべきものではなかった。

フランスの子供はビイ玉を愛し、日本の子供は椿や銀杏の実を愛した。一つは鉱物、一つは植物、こういうところにも、西洋と日本がどことなくその正体を現していた。

一行随筆

六十歳

1955・10・5
全文

私は名古屋市の郊外の中学を出たのだが、家から一里半もあるので自転車で通学した。そのために、父の機械商の小店の一人に、深夜店みせの前の大通りで自転車乗りを教わり、大體一晩で乗れるようになった。十三歳の頃である。毎日学友と銀輪を並べて通学するのが楽しかった。

初出・底本 読売新聞夕刊

十月五日号／昭和三十

年 読売新聞社 *マル

キン自転車広告

サイクルおしやれ時代

六十五、六歳

1960・10
抜粋

私は名古屋市の中学時代に、八キロの道を自転車でかよつたものだが、その後数十年、乗る機会がなかった。しかし終戦直後、交通不便のうちに、息子が近くに工場のあるマルキン自転車を買ったので、もう六十近くになった私も、時々乗つたことがある。乗り方を忘れてはいなかった。

思い出すと、私の少年時代、小杉天外の「魔風恋風」という恋愛小説が長期ベストセラーになったが、その本の口絵に、紫の袴をはいた令嬢が颯爽と自転車にのつている図があり、当時最高のハイカラ姿であった。

初出 マルキン自転車パンフレット／昭和三十五年十月
マルキン自転車
底本 うつし世は夢／昭和六十二年九月 講談社

息子 隆太郎。大正十年（一九二二）二月十五日生まれ。立教大学で社会学部長を務めた。平成二十七年（二〇一五）十二月五日死去。

中学一年の僕

四十五歳

1940・6・1
全文

この写真は僕が中学一年の時で、手にもっている「冒険世

界」は、僕の愛読雑誌でした。その頃、友だちととうしゃばん膽写版ずり

初出・底本 少年倶楽部
六月号／昭和十五年 大
日本雄弁会講談社

の雑誌をこしらえたりして、それに僕は冒険小説をかいたもの
です。いま僕は「少年倶楽部」に小説をかく時、よくあの
少年時代のことを思い出します。そして、僕の小説が、皆さ
んが大きくなってからの楽しい思い出になるようにと、一生
けんめいかくのです。

中学一年 明治三十九年

(一九〇六) 四月から翌
年三月まで。

冒険世界 新保博久の「解

題 雑誌フリークとしての
の江戸川乱歩」(光文社
文庫『江戸川乱歩と13の
宝石 第一集』所収)に
よれば、写真の乱歩が手
にしているのは明治四十
二年(一九〇九)十一月
号。

レンズ嗜好症

四十一歳

1936・7・1
 抜粋

中学一年生のころだったと思う。憂鬱症ゆううつみたいな病気に
 かって、二階の一と間まにとじこもっていた。憂鬱症は日光を
 恐れるものだから、家人に気がねしながら、窓の雨戸を閉め
 たままにして、暗い中で天体のことなど考えていた。そのこ
 ろ父の書棚の中に、通俗天文学の本があつて、私はそれによ
 つて宇宙の広さを知り、地球の小ささを知り、自分という生
 物の虫けら同然であることを感じて、憂鬱症の原因はそうい
 うところからもきているのだが、中学生としての勉強など無
 意味になつて、天体のことばかり考えていた。むろん肉眼で
 見えない太陽系の向こうの天体のことである。

そんなふうにはボンヤリしていて、ふと気がつくとき、障子の
 紙に雨戸の節穴から外の景色が映っていた。茂った木の枝が
 青々として、その葉の一枚一枚までが、非常に小さくクツキ
 リと映っていた。屋根の瓦も肉眼で見るとは違った鮮やか
 な色だったし、その屋根と木の葉の下に（そこに映っている
 景色はさかさまなのだが）広がっている空の色の美しさはす
 ばらしかった。パノラマ館の背景のような絵の具の青さの中

初出 ホーム・ライフ 七
 月号／昭和十一年 大阪
 毎日新聞社
 底本 わが夢と真実／昭和
 三十二年八月 東京創元
 社

を、可愛らしい白い雲が、虫の這うように動いていた。

私は永いあいだ、その微小な倒影を楽しんだあとで、立つて行って障子をひらいた。景色は障子の紙の動くにつれて移動し、半分になり、三分の一になり、そして消え失せてしまった。景色を映していた節穴は、今度は乳色をした一本の棒となつて、暗い部屋を斜に切り、畳の上に白熱の一点を投げた。

私はその光の棒をじつと眺めていた。乳白色に見えるのは、そこに無数のほこりが移動しているためであることがわかつた。ほこりつて綺麗なものだつた。よく見るとそれぞれに虹のような光輝を持っていた。一本の産毛のようなほこりはルビーの赤さで輝き、あるほこりは晴れた空の深い青さを持ち、あるほこりは孔雀の羽根の紫色であつた。

そのころ私の父は特許弁理士をやつていて、細かい機械などを見るために、事務室には大きなレンズが転がっていた。直径三寸ほどもある厚ぼつたいレンズが、ちょうどその時、私の二階の部屋に持つて来てあつたので、私は何気なくそれを取つて、節穴からの光の棒に当ててみた。そして焦点を作つて紙を焼いたりして、子供らしいいたずらをしていたが、ふと気がつくと、天井板に何か薄ぼんやりした、べらぼうに巨大なものが、モヤモヤと動いていた。

お化けみたいなものであつた。私は幻覚だと思つた。神経

が狂い出したのではないかとギョッとしないではいられなかった。

しかし、よく調べてみると何でもないことなのだ。晷の一点が節穴の光線に丸く光っている、その光の真上にレンズが偶然水平になったために、晷の目が数百倍に拡大されて天井に映ったのだ。

晷表の藺の一本一本が、天井板一枚ほどの太さで、総体に黄色く、まだ青味の残っている部分までハッキリと、恐ろしい夢のように、阿片喫煙者の夢のように、写し出されていたのだ。

レンズのいたずらとわかつて、私には妙に怖い感じだった。そんなものを怖がるというのは、多くの人にはおかしく感じられるかもしれない。だが私は真実怖かったのだ。その時以来、私の物の考え方が変わってしまったほどの驚きであった。大事件であった。

これは少しも誇張ではない。私はあのものの姿を数十倍に映してみせる凹面鏡の前に立つ勇氣がない。いつも凹面鏡に出くわすと、ワアツといって逃げ出すのだ。同じ感じで、顕微鏡をのぞくにも、少しばかり勇氣を出さなければならぬ。レンズの魔術というものが、他人に想像できないほど、私には怖く感じられるのだ。そして怖いからこそ人一倍それに驚き、興味を持つわけである。

その以前にも、望遠鏡とか、写真機とか、幻灯機などが好きで、よく弄もてあそんではいたのだけれど、レンズというものの恐怖と魅力とを身にしみて感じたのは、その時が初めてであった。三十年に近い昔の出来事を、まざまざと記憶しているゆえんである。

それから今日こんにちまで、レンズへの恐れと興味は少しも減じていない。少年時代にはいろいろとレンズの遊戯を楽しんだし、小説を書くようになっては、そういう経験にもとづいて「鏡地獄」その他レンズに縁のある小説を幾つも書いた。自分の子供が大きくなって、小学上級生になると、子供よりはむしろ親の方が乗り気になって、天体望遠鏡を買ってやつたり、それでもって地上の景色を眺め暮らしたり、子供と一緒になつて小型映画の器械でいろいろな実験をしたりして喜んでいたのである。

内気少年の冒険

五十八歳

1953・3・18
全文

子どもの頃から内気で体も弱かったので、家にこもっている時が多かった。しぜん書物に親しみ巖谷小波いわやこなみの世界オトギ話からはじめて押川春浪しゅんろうの冒険小説など小学校時代におおかた読んでしまった。明治三十八年、家から近いというので、熱田中学あつたに入学したがスポーツはぜんぜんだめ、国語、作文などはよかつたが、数学に苦勞するといったしごく平凡な中学生だった。

このころから私はレンズに興味をもった。家にひきこもっているときは、暗いのがすきで昼でも雨戸をしめていたが、あるときふと雨戸の小穴から入る光が障子の外の景色を映しだすのを見た。「これは面白いぞ」とレンズを買って、その光にあてると景色が大きくなる。私は神秘の実現とばかりこおどりして喜んだ。それらしいレンズいじりが病みつきになり、オヤジにねだって顕微鏡、望遠鏡などを買ってもらい、また幻灯器を自分で組み立てたりした。

初刊 私の少年時代／読売新聞社教育部編 昭和二十八年三月 牧書店 *
初出は読売新聞
底本 うつし世は夢／昭和六十二年九月 講談社

明治三十八年 第五中学入学は明治四十年（一九〇七）四月。

私の探偵趣味

三十一歳

1926・6・1
抜粋

涙^{あは}香物^{かうぶつ}は小学校にいるあいだに、手に入る限り読み尽くしている。そして、当時読んだものを今日でもまだ面白く読み返している。おそらく十度以上も読んだものがあるだろう。十二、三歳の時、祖母と一緒に熱海^{あつみ}へ湯治^{とうじ}に行っていて、その貸本屋から「幽霊塔」を借りて読んだ時の面白さはいまだに忘れない。

初出 大衆文芸 六月号／
大正十五年 二十一日会
底本 悪人志願／昭和六十
三年十一月 講談社

「幽霊塔」の思い出

五十四歳

1949・4・15
全文

私は子供の頃、まず巖谷小波山人の世界お伽噺に夢中になり、次に押川春浪の冒険小説に夢中になり、その次に黒岩涙香の翻譯小説に夢中になった。子供といつても涙香を読みはじめたのは、もう中学に入る頃、明治四十年前後であった。

その頃はまだ貸本屋というものが盛んに営業していて、私の住んでいた名古屋市にも、方々に大きな貸本屋があった。近年のような古本屋の営業ではなく、専門の貸本業、店構えも普通の本屋とはまったく違っていた。その頃貸本屋の棚の人気者は涙香と村上浪六で、この二人の著書はどここの貸本屋でも揃えていたものである。私は住居からほど遠からぬ一軒の貸本屋へ日参して、涙香ものを読み獵り、一年ほどのあいだに涙香の全作品を読んじまった。

その中で何が一番面白かったかと思ひ出してみると、やはり大物の「巖窟王」と「噫無情」が、最も感動的であった。そのほかでは「幽霊塔」「白髮鬼」「怪の物」「執念」(数多いボアゴベイものうち、「執念」だけは特別の怖さを持つている)などの恐怖の要素の多いもの、「山と水」「破天荒」

初出 黒岩涙香傑作選Ⅳ／

昭和二十四年四月 愛翠

書房

底本 幻影城通信／昭和六

十三年六月 講談社

「人外境」などの異境もの科学ものが面白く、「野の花」などの人情ものや、「人耶鬼耶」などの探偵ものは、前に挙げた諸作ほどの面白さは感じなかった。人情ものでは、私はずつと後に出た「島の娘」が一番面白く、探偵ものではやはり「死美人」であろう。後に出た科学もの「八十万年後の世界」なども私の好きなもの一つである。大物のうち「鉄仮面」は世評ほどには好きでない。そういうわけで、私の採点では「幽霊塔」は第三位ぐらいのだが、しかし怖さを標準にすれば「幽霊塔」が第一位になる。

私は「幽霊塔」には特別の思い出がある。中学一年生の時だったと思う。母方の祖母が熱海温泉に湯治に行っていて、夏休みに遊びにこないかと誘われたので、名古屋から出かけて行って、一月ばかり熱海で暮らしたことがある。夏の熱海行きはおかしいけれども、祖母はずつと滞在していたのだし、海水浴もできるからというわけであった。当時はむろん東海道線は熱海を通らず、国府津で乗りかえ、それから確か小田原まで普通の支線、小田原から熱海まではおもちゃのような軽便鉄道というものに乗らなければならなかった。煙突のヌーッと伸びた小人島の汽車で、途中で動かなくなると、客が皆降りてあと押しをするというまことに風雅を極めた代物であった。

熱海温泉そのものも、今に比べればまるで田舎の淋しい町

で、そのあまり上等でない宿屋へ着くと、湯に入ったり、海水浴をしたり、写真を写し廻ったりして日を暮らしたが、宿で寝そべっている時には、たいい小説本を読んでいた。

熱海にも貸本屋が数軒あつたので、そこから借りて読んだが、その時初めて「幽霊塔」に接したのである（名古屋の貸本屋へ日参しはじめてから、まだそれほど日がたつていなかったの

たのであろう）。それは菊判の三冊本で明治三十四年の出版

（「万朝報」に連載したのは三十二年から三十三年にかけて）

だから、私は出版後六、七年たつて読んだわけである。後年、

涙香ものは初版で全部揃えたので、その中に当時読んだ型の三冊本の「幽霊塔」もあるが、これには菊判二頁あまりの大ききの横に長い和紙の折り込みの口絵がついていて、永洗筆の着色画が、数度刷りの木版で印刷してある。一枚一枚手刷りにしたもので、裏を見るとバレンのあとが残っている。今のオフセット印刷に比べて遙かに雅味の深いものがある（しかし私はこんなふう綺麗にならない前の、明治二十年代の涙香物の木版挿絵にいっそう興味を覚える。あの素朴な異国趣味は挿絵史上またなき一時代であろう）。

その「幽霊塔」第一冊、すなわち前編の口絵は、夏子がお紺婆さんに囁みつかれた手首をおさえて、現場から逃げようとしているところで、髪ふり乱した洋装美人のハンカチでおさえた手首から、タラタラと鮮血が流れている。第二冊すな

永洗

富岡永洗。元治元年

—明治三十八年（一八六

四—一九〇五）。

わち後編の口絵は、ポール・レペル先生が夏子の蠟面を道九郎に見せているところ、永洗の絵には大して凄味はないのだが、それでも、土気色の美女の蠟面には異様な恐ろしさがあり、十四、五歳の私はこの絵を見ただけで、何ともいえない鬼気を感じ、堪えがたきばかりの魅力を覚えたのである。第三冊、すなわち続編の口絵は、時計塔の地下室で道九郎と夏子が宝物の箱を調べているところ、これなど今見れば何でもない絵であるが、当時はこの絵さえも異様に物凄く感じたものである。

私は海水浴など忘れてしまつて、昼も夜もぶつ続けて読み耽つた。文字通り巻をおく能わずであつた。熱海温泉の生活は夢で、「幽霊塔」の方が真実の世界だという錯覚に陥り、物語の中にはいり込んでしまつていた。

時計塔そのものの妖気、秀子のお能の面のように整いすぎた顔、長手袋の妙な装飾、アア何という強烈なサスペンスであつたことか。壁の中から突き出される毒剣、池から引き上げられた首無し死体、壁そのものがユラユラ動くように見える蜘蛛屋敷の怪異、壁に貼つた美人画の目だけが生きている気味悪さ。時計塔の大緑鉄板の不可思議、「鐘鳴緑揺」微光閃煜」実にたまらない魅力であつた。そしてポール・レペル先生の人間改造術、あの穴蔵の中の蠟仮面保管室の場面が、この物語の数々の激情の頂点となつていた。

私は真夏の宿に寝そべって、二日間というもの「幽霊塔」の世界に没入し、怪奇と恐怖の天国に遊び、涙香の小説はとうしてこうも面白いのかと、あきれ果てたほどであった。その夏の熱海行きは、私にとつて初めての長旅であり、汽車も、富士山も、軽便鉄道も、海も、千人風呂も、宿屋暮らしも、ことごとく珍しくないものはなかったのだが、しかし、不思議なこと、熱海旅行の印象として最も強く残つたのは、「幽霊塔」三冊と、その怪奇の世界に遊んだ二日間で、これに比べては、他の旅行風景など、夢のように淡くはかないものに過ぎなかった。現実生活のあじきなさ、空想世界のすばらしさ、私は子供の頃からそういう氣質を多分に持つていたものと見える。

二十歳前後になつてポーやドイルを知り、一応涙香の伝奇小説と離れたけれども、しかし、正直にいつて、二十歳でポー、ドイルを読んだ時の感銘よりも、十四、五歳で涙香に親しんだ時の感銘の方が、遙かに強烈であつたように思われる。

涙香心酔

五十四歳

1949・10・1
 抜粋

涙香なみかの探偵ものを自分で読みはじめたのは、当時の高等小学二年生（今の小学六年生）のころで、それから中学一、二年にかけて、涙香に夢中になったものである。当時の少年は小波山人こなみじんのお伽噺お伽ばなしから押川春浪おしかうろうの冒険小説という順序で愛読したのだが、私もその例に漏れず、春浪をも愛読したけれど、春浪より少しおくれて涙香に病みつき、春浪と併行して、涙香を愛読したのだと記憶する。春浪では武俠冒険の興味を、涙香では怪奇恐怖の興味を満足させたわけである。

私はそのころ、月極め購読雑誌を「日本少年」から「冒険世界」（春浪主筆）に移していたが、そういう雑誌や、春浪の単行本などは近所の新本屋で求めたけれども、涙香初期の探偵ものは時代が違うので、新本屋ではほとんど手に入らず、貸本屋から借り出して読んだものである。私は家からほど遠からぬ一軒の大きな貸本屋の定連となつて、次々と涙香ものを借り出して来た。そのころの貸本屋の二大人気作者は涙香と村上浪六なみろくで、この両作家の小説はどこの貸本屋の棚にも、たいてい揃っていたものである。

初出 新青年 十月号／昭

和二十四年 博友社 *

連載「探偵小説三十年」

第十回

底本 探偵小説四十年／昭

和三十六年七月 桃源社

涙香では何を最初に読んだのか記憶にないが、私が小学校に入ってから後は、母も涙香ものの話をやや詳しくしてくれるようになったであろうし、その引きつぎで、いつとはなく自分で読むようになり、今度は近所の子供達を集めて、私が涙香小説の話をする番になっていた。それから、中学に入ってもなくなかったと思う。近所の同年の親友が私より早く「巖窟王」と「噫無情」を読み、感激して君も読めと勧めてくれたことを覚えていいる。私はこの二つの大作をまだ読んでいなかったもので、早速借り出して来たが、むろん非常に面白かった。しかし、それよりも、もつと鮮やかに私の記憶に残っているのは「幽霊塔」である。それを讀んだ環境と結びついて、特別に印象が強かったのであろう。

中学一年の夏休み、母方の祖母が熱海温泉へ保養に行つていて、私を誘ってくれたので、私は父方の祖母といつしよに生まれて初めての長い旅をして、熱海へ出かけて行つた。丹那トンネルの開通したのはズツと後のことだから、小田原あたりから先は、まだ軽便鉄道の時代で、煙突だけが馬鹿にデツカク飛び出した、おもちゃのような機関車が物珍らしかった。今の熱海に比べては、まるで田舎温泉であったが、そこで湯に入ったり、海へ泳ぎに行ったり、素人写真を撮らしたりして、一か月ばかりを暮らした。ある雨の日の退屈まぎれに、熱海にも数軒あつた貸本屋の一軒から、菊判三冊本の「幽霊

塔」を借り出して来て読みはじめたが、その怖さと面白さに憑つかれたようになってしまつて、雨がはれても海へ行くどころではなく、部屋に寝ころんだまま二日間、食事の時間も惜しんで読みふけた。そして、熱海から帰つて来て、一番深く残つていた感銘は何かと考えてみると、温泉でもなく、海でもなく、軽便鉄道でもなく、新鮮な魚類などではさらさらなく、熱海へ行かなくても読み得たであろう「幽霊塔」の、お話の世界の面白さであつた。私は少年のころからすでに、現実の歓楽よりは、架空の世界に生き甲斐を感じる性格であつた。

筆だこ

私は中指に大きな筆胼胝^{ふでだこ}があります。人はこれを見て胼胝^{たこ}の出るほど小説を書いたかと驚きますが、実はそうではないので、この胼胝は少年時代、謄写版^{ちゆうしゃばん}の鉄筆を持つたためになりました。それほど私は謄写版を愛玩しました。

それは明治四十二、三年、私が中学へ入ったか入らぬ時分のお話ですが、でも当時私達の考案で、三度以上の色刷りをしていました。

住まいが名古屋でしたから「中央少年」という菊判三十頁ばかりの、少年雑誌を印刷して、文具屋などで売って貰ったものです。懐かしい思い出です。

山本さんから毎号「趣味」を送って貰っていますが、同郷の青年諸君がやっていらつしやることや、それが謄写版刷りなことが大変懐かしく思われます。むろん私達のやつた少年雑誌とはまったく性質の違ったものだし、印刷も玄人の手で活字や石版以上立派にできてますが、表紙の色刷り^{くろうと}なんか非常に見事で、もし暇があったら、私自身もう一度謄写版がなぶってみたいと思うほど、魅力もあり懐かしくもあります。

三十四、五歳

1929・?・?
全文

初出 趣味／昭和四年 不

明

底本 奇譚／猿の言葉／昭

和六十三年五月 講談社

中央少年 昭和十六年（一

九四）作成の『貼雑年

譜』①には「少年雑誌編

輯所」「中学三年頃（或

八二年力）」と説明を添

えた写真の下に「上ノ写

真ハヤハリ中学三年ノ頃、

四号活字ヲ貰ツテ名刺印

刷器ノヤウナモノヲ活版

ノ雑誌ヲ作ツタ時代、ソ

ノ編輯兼印刷所ノ写真テ

アル。僕ノ写真器デ真ノ

通ガ撮ツタ。部屋ハ前二

図ヲ示シタ父ノ物ハ建増

シノ四畳平。人物ハ右カ

ラ太郎、丹下高橋 本庄

実「アル」とある。

山本さんから御手紙がありました通り津の郵便局には私のいとこに当たる人がいます。その他津にはたくさん親戚がおります。県庁のお役人や、市外南小路のお百姓や、濃い親戚ばかりのくせに、父が早く郷里を出たものですから、皆御無沙汰になっております。

でも、少年時代には夏ごとに塔世川とうせがわのほとりの親戚に泊まって贅崎にえさきの海へ泳ぎに行つたものです。玉置町にもと私の母の実家があつて、そこへもよく泊まりに行きました。皆当時の住まいの名古屋からでした。

津というところは、他国の人には、活気のないつまらない町でしかありませんが、少年時代の思い出を持つ私には、海も川も町も、どんな小さな裏通りも、大変懐かしいもの思われます。

活字との密約

五十九歳

1954・9・5
全文

少年時代、はじめて日常と異った世界を見たのは、小波山人の世界お伽噺の四号活字によつてであつた。それから、押川春浪、黒岩涙香、そして、紅葉、露伴、柳浪、鏡花と、いずれもそれぞれの意味で、夢の異国に遊ばせてくれた。

その頃は、活字を見るたびに別の世界を発見した。なんとなく驚きであつたろう。父の書齋で、通俗天文学の本を見つけて、太陽系そのものが宇宙の一小部分を占める塵芥にすぎないことを知り、光年というものの恐ろしさにふるえ上がり、一生私の心を曇らしたあの青い陰が心臓の上に覆いかかつて来たのも、その少年の頃であつた。

そうして一冊の本を読むたびごとに、私の活字への愛情はだんだん激しいものになつて行つた。異国の夢を運んで来る活字の船の懐かしさに、私は活字そのものをみずから所有し、それに他人の夢ではなくて、わが夢を託したい気持ちにおそわれはじめた。

あるとき、父から少したくさんお小遣いをもらつて、活字を買うことになつた。四号活字が何千本。まだインキに汚れ

初出 新刊月報 九月号／

昭和二十九年 日本出版

販売

底本 わが夢と真実／昭和

三十二年八月 東京創元

社

紅葉 尾崎紅葉。慶応三年

—明治三十六年（一八六

八一—九〇三）。

露伴 幸田露伴。慶応三年

—昭和二十二年（一八六

七一—一九四七）。

柳浪 広津柳浪。文久元年

—昭和三年（一八六一

一九二八）。

鏡花 泉鏡花。明治六年—

—昭和十四年（一八七三—

一九三九）。

ていないあの美しい銀色の活字の魅力がどれほどであったことか。私はその一つ一つを、鉛の兵隊さんを弄ぶように弄んだ。この小さな鉛の煉瓦れんがの行列の中に、夢の国への飛行の術が秘められていた。小さな銀色の拍子木ひょうしぎが、幻影の国へのかけ橋であった。私はそれで自分の文章を印刷し、自分の少年雑誌を作った。

こうして十三歳の私は直接活字そのものと縁結びをした。一生涯活字と離れられない密約を取り交わした。そして、それからのちの何十年、活字の深なさげが、いかに私につきまといつて来たことであろう。

活字と僕と 年少の読者に贈る

四十一歳

1936・10・1
抜粋

僕が活字というものに初めてぶつつかったのは、巖谷小波いわや さざなな山人さんじんの『世界お伽噺ときばなし』の四号活字であった。菊判、石版絵の異国的な表紙、あの薄い冊子を、友達と貸しっこをして、家の座敷で、小学校の校庭で、どんなにむさぼり読んだことであらう。

それまでも、新聞の活字には親しんでいた。まだ読めはしなかつたけれど、つづきものの小説を母に読んで聞かせて貰って、現実世界にはないところの、しかしそれよりもっと生々しい夢を生み出す、あの活字というものの不思議な魔力を、あの鼻をくすぐる甘い印刷インキの匂いを、むしろ怖いもの見たさの気持ちで、どんなにか憧れていたことであらう。

それにしても、小学校の国語読本はやっぱ活字であったのだが、字体があまりに大きかったのと、普通の明朝みんちようではなくて、お清書せいしょのような清朝活字せいちやうであったせいかもしれない。どういうわけか、お伽噺や小説の国の活字とは違っていて、夢がなくて、ただ押しつけられるような気がして、活字とし

初出 文壇大家花形の自叙

伝 現代十月号附録／昭和

十一年 大日本雄弁会

講談社

底本 鬼の言葉 昭和六十

三年十月 講談社

ての印象は薄かった。

母に新聞で読んで聞かせて貰った活字がなんであったかというのと、それが探偵小説であった。その頃僕の家は名古屋市にあつて、当時流行の大阪毎日新聞を取っていた。毎日新聞は小説の面白さでも比べるものがなかったのだと思う。そこに菊池幽芳ゆうほう氏訳の「秘中の秘」ひちゅうのひが連載されていた。僕は毎日学校から帰つて来ると、それを聞かせて貰うのが何よりの楽しみだった。もう小学校の三年生だったと思うが、その頃の子供はおっとりしていたのか、あるいはお婆さん子の甘ったれの僕だけがそうだったのか、まだ少年雑誌を読んでいなかった。

母は黒岩くろい涙香なみかの探偵小説の愛読者であつた。ランプの下で、お婆さんはお家騒動さわどうか何かの講釈本に、母は涙香本に読み耽かたつてゐることが多かつた。これは僕がまだ学校に上がらない頃の話なのだが、父は高等文官の試験を受けようとして、毎晩書齋しやうに籠こもつていたものだから、祖母と母とは針仕事も尽きて、秋の夜長を、小説に暮らしていたものらしい。僕はそのそばに寝そべつて、母が涙香を読み終わつて、その話を聞かせてくれるのを、じつと待つていたものであつた。

そういう母が、幽芳の「秘中の秘」を愛読し、それを僕に話して聞かせてくれたのはもつともなことであつた。考えてみるのに、僕の探偵小説好き、怪奇小説好きというものは、

この時代にその萌芽ほうがを植えつけられたのであるらしい。

もう三年生にもなつていたので、僕は毎日聞かされた話の筋を、順序よく覚え込んでしまつていた。するとちよつどその印象がまだ生々しい頃、学校に学芸会が開かれて、僕も選手として演壇に立つことになつた。そこで選ばれた演題が「秘中の秘」であつた。

その日僕は米琉よねりゆうか何かの黒と薄鼠うすねずみとの荒い縦縞たてじまの着物を着せられ袴はかまはどんなのだつたか忘れてしまつたが、その着物のパツチリした柄が大変気に入つて、何度も鏡に写してみたことを覚えてゐる。少年の色気というやうなものが身なりを気にするのである。女生徒に見て貰もらひたかつたのかもしれない、あるいは女生徒の中のある一人に見て貰もらひたかつたのかもしれない。小学三年生でさえ、演壇の上の名誉というやうなものが、虚栄心きよぎんのやうなものが、異性に結びついてゐたことを、私ばかりではない、多くの人が思ひ出すであらう。

お話はあんまり上出来ではなかつた。ヤンヤと褒ほめて貰もらつてもりなのが、それほどでもなかつたので、派手な着物の手前も恥はずかしくて、憂鬱ゆううつになつて帰つたのを覚えてゐる。どうもあの棒縞ぼうかんの米琉よねりゆうというものが、かなり複雑に、いろいろな感情とからみ合つてゐるのである。

それはそれとして、やがて僕の活字の世界に、「少年世界」と「日本少年」と「少年」という三つの少年雑誌が現れ

た。今残っているのは「日本少年」だけであるが、この三つにはそれぞれ特徴があつて、「少年世界」は毎号小波山人がお伽噺を執筆しているのが特徴だったけれど、どこことなく古めかしい匂いがあつたし、「少年」は大変上品で、しつとりとした文学味などもあつて、高級な代わりには、どこことなく取りつきにくかつたし、結局一番熱愛できたのは「日本少年」であつた。その頃は挿絵の大部分が川端龍子氏の筆であつて、その魅力も大きかつたが、何よりも「日本少年」の記者先生達の無邪気なあけつばなしな態度が、僕に親しみを感じさせた。投書欄が潑刺^{はっさく}としていて、投書に応答する記者先生達の童心が僕を喜ばせた。

僕は、この雑誌に投書をして、入選したことなどもあつたので、いつそう親しみが増し、長いあいだの愛読者であつた。当時の「日本少年」の読み物は、多く社内の記者諸先生が執筆していたが、滝沢素水^{そすい}とか有本芳水^{ほうすい}とかいう人の名は今でも忘れない。

少年雑誌から「冒険世界」それから「武俠世界」へと移つたのは、あれはいつ頃であつたか。少なくとも「冒険世界」の方は、まだ中学校へ入つていなかつた時分から、読み出したのではないかと思う。押川春浪^{しゅんろう}の冒険と怪奇。小波山人から押川春浪へというのが、当時の少年の誰しも踏んだ階段であつた。押川春浪と博文館とのあいだに悶着^{もんちやく}があつて、彼が、

川端龍子 明治十八年―昭和四十一年（一八八五―一九六〇）。

入選 投書の入選作は不明

だが、明治三十九年（一九〇六）の「日本少年」九月号「第一回懸賞字探し賞外当選者」に平井太郎と丹下高福の名が見える。

滝沢素水 明治十七年―没

年不詳（一八八四―？）。

有本芳水 明治十九年―昭和五十一年（一八八六―

一九七〇）。

「冒険世界」を捨てて退社し、「武侠世界」を起こしたのは、よほど後のことであつたが、当時は、何かしら血を湧かすような気持ちで、両誌を読んだものであつた。僕はその頃から僕にとつては好ましくならぬジャーナリストの性質を多分に持つていたのである。

「冒険世界」に並んで、江見水蔭すいいんの主宰する「探検世界」という雑誌があつて、これは未開国の探検旅行だとか、地底の探検だとか、地学雑誌ふうな味、また江見水蔭の考古趣味などの混じつてゐるもので、面白くはあつたけれど、その魅力は押川春浪の潑刺たる冒険武侠の情熱と快味には遙かに及ばなかつた。

押川春浪の怪奇冒険小説では、ついこの頃も博文館の「新少年」かに復古的に連載されていた「怪人鉄塔」とか、処女作の「海底軍艦」「武侠の日本」などが人の記憶に残つてゐるが、僕は怪奇小説では「塔中の怪」というのを忘れることができない。

この「塔中の怪」は、中学校の一年生の時、食後の談話時間間に、またしても演壇に立つてお話をしたからである。僕の中学校は名古屋の熱田あつた中学で、その第一回卒業生なのだが、一年の時の受け持ちの先生は、今の貴族院議員の野村子爵ししやう、その野村先生と一緒に弁当をたべたあとで、先生がひどく話好きだつたものだから、生徒はかわるがわる講壇に立つてお

江見水蔭 明治二年—昭和九年（一八六九—一九三四）。

野村子爵 野村益三か。明治八年—昭和三十四年（一八七五—一九五九）。

話をしたものである。

押川春浪は必ずしも冒険武侠のみの作家ではなかった。

「銀山王」というのは涙香の探偵小説に類する作風であったし、「ホシナ大探偵」はドイルのシャーロック・ホームズの翻案であった。それからもう一つ、どうにも忘れられない小説がある。これはたぶん小学上級生の時読んだのだと思うが、読んでから二月も三月も、その甘い夢の世界が、心臓にまといついていて離れなかった。おそらく翻訳ものらしく、暗い洞窟の中で、髑髏を抱いて、どこかの女王様との、ひどく浪漫的な恋愛の幻影を見ている少年の物語だったと記憶するが、そのフェミニズム、恋愛の神秘というようなものが、僕をすっかり夢中にさせてしまった。表題は「立身膝栗毛」であったかと思う。やはりその頃、しかし、もう中学生にはなっていたようだが、幸田露伴の「対髑髏」を読んで、同じような深い感銘を受け、この文学的価値においてはまったく違っている二つの物語が、僕の記憶の中では、同じ抽斗に、長いあいだロマンティシズムの夢となつて、しまわれていたのである。

しかし、僕が初めてシャーロック・ホームズに対面したのは、春浪訳の「ホシナ大探偵」ではない。そのずっと前に、雑誌「太陽」でドイルの「金の鼻眼鏡」を読んでいる。むろんそれも小学生時代だと思うが、したがって僕が「太陽」の

読者だったのではない。二階へ上がって行くと父親の本棚があつて、その隅のところに、博文館の「日露戦争実記」という雑誌が、うずたかく積まれ、それと並んで、父の愛読していた「太陽」が積み重ねてあつた。

僕は一人その部屋へ上がつて行つて、見てはならないものを見る気持ちで、むつかしい論文の印刷してある「太陽」をくりひろげる事があつたが、ある時その中にドイルの「金の鼻眼鏡」の訳訳を発見した。むろんドイルがどういう人であるかも知らないし、ポオの系統を引く短篇探偵小説などまったく知らなかつたのだが、ともかくも通読して、何ともいえない変てこな気持ちになつた。

少年時代の僕を、何が活字へ引きつけていたかというところ、それは活字のみの持つ非現実性であつた。活字が描き出してくれる、日常の世界とはまったく違つた、何かしら遙かな、異国的な、夢幻の国への深い憧れであつた。

その頃は、活字を見るたびに別の世界を発見した。何という驚きであつたらう。「太陽」は少し難し過ぎたし、初めて接したドイルをただちに理解したわけではなかつたが、たしかにそれは子供心をピッキリさせるものであつた。また一つのまったく新しい異国の小都會が、そこにあつた。

同じ父の書齋で、通俗天文学の本を発見して、太陽系そのものが、宇宙の一小部分を占める塵芥じんがいに過ぎないことを知り、

通俗天文学 大正五年（一九一六）の「奇譚」に

は「僕が中学ノ三四年ノ頃感ジタ宇宙ノ大ト自己ノ少ニ似テ居ル」としてドイル「アーケンジェルから来た男」の一節が原文で引用されている。延原謙による訳文は次のとおり。「太陽系は、大きさにおいてこれに劣らずかつ数知れぬ多くの他の天体系とともに、ヘラクレス座の方向へと、空間を静かに運行し続けている。このように構成された大宇宙は、無限の空間をたえず、音もなくただ回転しつづけているのだ。それらのうちでもっとも小さく、いたつてつまらない存在、液体と固体の集合にすぎないものを、われらは地球と名づけている。わが生まれるはるか以前から回転しつづける、わが死後も回転しつづけるであらう——その回転は神秘につつまれ、どこから来てどこへ行くのか、誰も知らない。

「光年」というものの恐ろしさに震え上がり、あんなにも高く見えている雲というものの、あまりの近さに驚き、一生僕の心を曇らした、あの青い影が心臓の上に覆いかかってくるのもその頃であった。

また同じ頃に読んだ、ライダー・ハッガード原作、菊池幽芳訳の「二人女王」を忘れることはできない。父は別に小説好きではなかったのだが、本棚の隅にこの本が一冊混じっていた。子供心にあの名文を忘れかねて、幾度夢に見たことであろう。思い出してみると、天文学というような大きなシヨックは別として、小説では、僕の小学上級生から中学初年級にかけて、今に忘れぬ感銘を受けた本は、前記押川春浪の「立身藤栗毛」(?)と、このハッガードの「二人女王」と、それから少し後に偶然ぶつかったコナン・ドイルの「ブリガディア・ジェラル」の誰かの訳本であった(このナポレオン戦争奇談には、古くから熊本謙一郎訳「間一髪」、佐藤紅緑訳「老将物語」、藤野鉦齋訳「老雄実歴談」などの訳本が出ていたが、僕の読んだのは藤野氏の訳であったかと思ふ)。「金の鼻眼鏡」は読んでいたくせに、僕はまだ短篇探偵小説には縁がなかったのである。その頃文壇では、田山花袋の擡頭期で、「文芸倶楽部」は家で取っていたので、「蒲団」その他読まぬではなかったのだし、また涙香物にはずっと親しんでいて、「噫無情」「巖窟王」「幽霊塔」などは膏汗を流

この動く塊りの外皮には数多くの小動物がはいうごめき、私もそのなかの一人なのであり、無力無能、なんの目当もなくおし流されているにすぎない。かくのごときがわれらの現状であり、私はとぼしい精力やおぼろげな理知の働きをあげて、金属の小円盤を入手するに つとめ、それによって常に衰えてやまぬ体力組織を更新すべき化学成分を購入したり、気候のきびしさから免れるため頭上に屋根を頂いたりするのだ。かくして私をとりまく生命にかかわる重大問題を追及する暇もなく、思いもおよばず打ちすぎでゆく。かく哀れな存在にすぎない私も、ときにはある程度の幸福を感じ得ることもあり、そればかりかときには自己の重要さを考えて胸ぐらますこともあるのだ」

田山花袋 明治四年 昭和

五年(一八七二—一九三〇)。

少年雑誌 『貼年譜』①

して耽読もしたのだが、なぜか今考えてみると、そういう大きなものの向こう側に、前記三つの小説が、不思議にクッキリと影を残しているのである。

僕の活字への愛情はだんだん烈しいものになって行つた。

異国の夢を運んで来る活字の船の懐かしさに、僕は活字そのものをみずから所有し、それに、他人の夢ではなくて、わが夢を托^{たく}したい気持ちに襲われ始めた。

もつとも、そういう少年の御多分に漏れず、まず最初は^{こゝろ}莠^{むら}版^{ばん}それから^{とう}謄^{とう}写^わ版^{ばん}で、いろいろな少年雑誌ふうのものを印刷し、小学校前の文具店に並べて貰つて、何銭かの定価をつけて発売したことさえあるのだが、謄写版では、どんなに精巧な色刷りなどができても、どうも満足ができなかつた。

本当の活字でなくては夢の国への懸け橋にはならないような気がした。

僕はやがて、父から少したくさんお小遣いを貰つて、とうとう活字を買ひ始めた。気の合つた学校友達、つまり僕の出版社の少年社員と一緒に、遠い道を駈け足で、その頃名古屋市内にはたぶん一軒しかなかつた活字販売所へ、ワクワクと胸を躍らせながら、何度通つたことであろう。

四号活字が何千本。まだインキに汚れていないあの美しい銀色の活字の魅力がどれほどであつたことか。僕はその一つ一つを鉛の兵隊さんを弄^{もてあそ}ぶように弄んだ。そして幾つかの手

の「少年雑誌ノ発行」に
「高等小学校一、二年生
(今ノ小学五、六年生)
頃カラ友達ト少年雑誌ヲ
作ツテ遊ブコトヲハジメ、
最初ハ莠版次ニ謄写版
次ニ活版ノ手摺リト印刷
方法ハ色々デアツタガ、
中学上級生マデ絶エテハ
続キ数種ノ雑誌ヲ発行シ
タ。ソノ内「中央少年」
トイフノ一冊又ケガ残
ツテヤルノデ表紙ト奥付
トヲ貼リツケテ置ク。コ
レハ中学三年生ノ正月ニ
出シタモノデアルト思フ。
即チ、明治四十三年正月
号私ノ十六才ノ年末二印
刷シタモノ」とあるが、
スクラップから発行日は
確認できない。第二巻第
四号が明治四十五年(一
九一二)七月に発行され
ていることから、第一号
は同年一月に出たものか
乱歩は「笹舟」という筆
名で、第一号に「怒濤」
「かなしき思出」、第四号
に「凸凹ノ鉢合七」を發
表している。

製活字ケースの中へ、順序よく分類した。

この小さい鉛の煉瓦れんがの行列の中に、夢の国への飛行の術が秘められていた。この小さい銀色の拍子木が、幻影の国への鍵であつた。

それから手製の手押し印刷機、ローラー、廉物せんとものの新聞印刷インキ、植字函げいご、インテル、罨線けいせん、ピンセット。僕はお伽噺の作者であり、編輯者へんしゅうであり、文撰工ぶんせんであり、植字工であり、印刷工であり、製本屋であつた。

別棟で別の格子戸のついた四畳半の書齋が、僕の編輯所印刷所であつた。そこへ友達の誰彼が集まつて、編輯会議を開き、たちまち職工となつて、インキに汚れながら印刷をした。それらの同人の中には、今の東北帝大教授中川善之助博士なども混じつていたのである。ついでながら、中川君は僕よりも少し年少の秀才で美少年でハーモニカの名手で、彼が子供達の遊び場になつていた僕の家の前露地で、颯爽さつそうとしてハーモニカを独奏していた面影は、今に忘れることができない。

銀色の活字の上を、一人の少年職工の手によつて、インキの色も艶やかなローラーが回転する、別の一人の少年職工が、印刷紙をその上にソツとのせる、すると僕が印刷器のハンドルを握つて、紙の上からグツと圧おさえつけるのである。そして、活字に密着した紙をスツと剥はがして、出来具合を見る時の楽しさ。印刷をすれば紙に文字が現れるのは当たり前のこと

中川善之助 明治三十年—
昭和五十年（一八九七—
一九七五）。

ながら、何かそれが不思議な奇蹟のように思われて、自分の書いた文章がにわか光彩を放ち、勿体ないほどの名文に見えるのであった。

このようにして、僕は直接活字そのものと縁結びをした。一生活字と離れられない密約を取り交わした。そして、それからのちの今日までも、活字の深情が、いかに僕につき纏ったことであろう。

幻影の城主

四十一歳

1935・12・3

1935・12・4

抜粋

ドストエフスキの「女主人」の主人公オールドヴィノフは「すでに子供の頃に変人として知られ、友達仲間からは彼の一風かわった人間嫌いな性質のために、薄情にされたり無愛想にされたりするのを耐え忍んで来た」

私はちょうどそこを読んでいたので、この引用をしたのだが、ドストエフスキの作品には、至るところにこういう人物が登場している。

「女主人」の右の文章を読んで私は何か郷愁のようなものを感じた。そして私自身の少年時代を振り返った。そこには「薄情にされたり無愛想にされたり」することに人一倍敏感な癖に、お能の面のように無表情な、お人好しな顔をして、内心はげしい現実嫌悪を感じている少年の姿があった。

少年時代の私は、夜、暗い町を歩きながら長いひとりごとをしやべる癖があった。その頃は小波山人こなみさんじんの「世界お伽噺とぎばなし」の国に住んでいた。遠い昔の異国の世界が、昼間のめんこ遊びなどよりは、グッと真に迫った、好奇に満ちた私の現実であった。私は現実世界よりもっと現実な幻影の国の出来事

初出 東京日日新聞 十二

月三日号・四日号／昭和

十年 大阪毎日新聞社東

京支店

底本 わが夢と真実／昭和

三十二年八月 東京創元

社

について、その国のさまざまな人物の声色こゝろいろをまぜて、ひとりごとをしゃべっていたのである。しかしそういう夜の道で、誰かに話しかけられでもすると、にわかには、私にとつてはむしろ異国である現実に立ち帰らなければならなかつた。そして、私はたちまち精彩を失い、オドオドしたお人好しになつてしまつた。

私の精彩ある国への旅行は、文字の船に乗つてであつた。それゆゑ文字そのものが、私には彼方かなたの世界に属する神秘であつた。文字からひいては活字というものが、あの真四角な無愛想な鉛と何やらの合金が、何かしら地上の物体とは違つたものを感じられた。活字こそ私の夢の国への貴い懸け橋であつた。その「活字の非現実性」を私は溺愛でまゐした。

私は活字を買う資金を得るために、半年のあいだ克己こつきの生活が続けた。よく思い出せないけれど、たぶん朝起きの約束であつた。そして、その終わりの日に父親からたくさんの賞金をもらうと、町にたつた一軒の活字屋へかけつけて、ピカピカ光つた金属のにおいのなつかしい四号活字を山のように荷造りしてもらつた。それと幾枚かの白木の活字ケースを、友達と二人で抱きかかえて、四畳半の自分の部屋に帰つた。

活字とケースと一缶の印刷インキを買つてしまうと賞与金が尽きたので、私は印刷器械を手製しなければならなかつた。それは近所の名刺印刷所の店先で見覚えておいた木製の手押

し印刷器であつた。

お伽噺の原稿を書いて、文ぶん撰せん工こうのように活字をひろつて、植しょくじ字工こうのようにそれをならべて、ローラーでインキをぬつて、ザラ紙がみの半紙をあてて、グツと手押し器械をおしつけた時のあの不思議な喜びを忘れることができない。私はついに、精彩の国への船を所有したのであつた。その美しい船の船長になつたのであつた。

社交術でも腕力でもあまりの弱者であつた少年は、現実の、地上の城主になることをあきらめ、幻影の国に一城をきざり、その城主になつてみたいと考えた。町内のどんな腕白小僧にも、幻影の城を攻め亡ぼすすべはなかつた。いや、彼らにはその城への雲の懸け橋を登ることさえ、まったく思ひもおよばないのであつた。

人類史的に飛び

三十六歳

1931・4・8
抜粋

二十年ほど前の春、中学の三年生であった私は名古屋の鶴舞公園の芝原に寝転んで、うらうらと暖かい陽をあびながら、ノートに論文を書いていた。

ある雑誌の質問応答欄で、飛行家志望の一少年に対し、記者が、そんな「空想」は思い止ま^よったがよかろうと忠告しているのを見て、義憤のようなものを感じ、その駁論^{ぼくろん}を書いたのであった。

当時飛行機は、あるにはあったが、まだ本当に飛ぶことができなかつた。飛行機製作所は山師のようにいわれていた。記者が「空想」とけなしたのも無理ではない時代であった。

私は当時から空想家であった。そして「空想」はけなすべきものでないと信じていた。科学は空想から生まれ、小説は発明に先行することを信じていた。

私は春の陽に血を沸かせながら、無限の青空の下で、飛行家志願少年^{きた}激励の辞を書きつらねたものであった。私は飛行時代の来るべきことを信じていた。現代の少年が、ロケットによる月世界旅行の実現を信じているように。

初出 日米親善北太平洋横

断飛行 報知新聞四月八

日号附録／昭和六年 報

知新聞社

底本 奇譚／猿の言葉 昭

和六十三年五月 講談社

中学の三年生 明治四十二

年（一九〇九）四月から

翌年三月まで。

乱歩打明け話

三十一歳

1926・9・1
全文

一体僕が物を書くなんてことが、そもそも間違いないかと思つてゐる。文章の心得があるではなし、それといつて本を読んではいないのだし、つまり、一言にして尽くせば、素人の横好きなんだ。元来、僕の専門は経済学なんです。といつて、じゃその方は明るいかと聞き直されると、おおいに閉口だが、ともかく、学校で教わつたのが、それなんです。それが、どうしてかくのごとき邪道に踏み込んだかというところ、これで一種の病気ですね。気が多いというか、飽き性しじょうというか、おそらく精神病に近いものだと思うのだが、僕だつて、学校を出た当座は、おおいに金儲けをやるつもりで、本場の大阪で貿易商の番頭に住み込んだものです。つまり、学校で習つた経済学を实地に応用してみようというわけだったので、す。

商売は、これでなかなかうまくつた。大戦後の南洋貿易で、ちよつとこう勇壮な感じの商売だった。帆船を仕立てて、それにいろいろな日用品を一杯つめ込んで、野蛮人に売りに行く手伝いなんかやつた。あれを続けていけば、今頃こんな

初出 大衆文芸 九月号／
大正十五年 二十一日
底本 わが夢と真実／昭和
三十二年八月 東京創元
社

貿易商 大正五年（一九一
六）七月、大学を卒業し
て大阪市、ちよ中通の加藤
洋行に就職し、南洋から
注文を受けた雑貨を仕入
れて発送する仕事に従事
したが、翌年五月ごろ出
奔した。

ピーピーしていないんだが、惜しいことをしたと思つても、今さら致し方がない。

なぜ貿易商を止したかというのと、いろいろ原因があつた。一つは、貧乏書生が少し纏まつた金を持つたために、まあ大袈裟にいえば、魔がさしたのでしょうか。いささか遊んだのです。お恥ずかしい話だけれど、その当時まで僕は女というものを知らなかつた。二十三でしたか。知つたような顔をしていて、実はそうでなかつた。そのくせ、十七、八の中学生時代に、友達を語らつて、曖昧屋なんかへ足ぶみして、大目玉を頂戴したこともあるんだけど、妙に童貞を守つていた。しかし、これはいつこう自慢にならない。理窟があつて行儀よくしていたのではなく、恥ずかしがつていたんだから、つまり卑怯者だつたのですね。

ところで、だんだん話が枝道へはいるけれど、その僕が十五歳の時に初恋をやつた話があるのです。もつとも、それまでも、七、八歳の時分からそれに似たものがないではなかつたが、意識的な、まあ初恋といつていいのは、十五歳（かぞえ年）の時でした。中学二年です。お惚気じゃありません。相手は女じゃないのだから。でも、まあ同じようなものかもしれない。つまりよくある同性愛のまねごとなんです。それが実にプラトニックで、熱烈で、僕の一生の恋が、その同性に対してみんな使いつくされてしまつたかの観があるのです。

少しばかり甘い話なんです。

僕は今でこそ、三十になるやならずで（その実^じ三十三歳なのだが）五十歳のごとくはげあがつて人前に入るのも恥ずかしいでいたらくだけれど、当時、十五歳の若衆時代には、これでなかなか色つぽかつたものである。僕の中学校は名古屋ににあったのですが、今のように開けなくて、学校はできたばかりの豚小屋みたいなバラックだし、校庭には名物の大根が植わつていて、われわれはそれを引き抜いて、地ならしをするのが課業外の課業だつた始末で、市中からそこへ通学するには、一里くらいも畑の中のあぜ道を、雨の日なんかはドロドロになつて歩かねばならなかつた。その途中に何かのお社^{やしろ}があつて、鎮守の森というやつですね。そこに夕方なんか村の子守っ児が、例の向こう鉢巻をして、鼻たれ小僧をおぶつて、たくさん遊んでいる。そいつらが、僕の通るのを発見すると、「ええ子、ええ子」（美少年の意）と叫んでからかうのです。一人だつたら怖いし、連れがあれば、実に何ともいえない屈辱を感じて、夕焼けのように赤くなる。そいつをまた、同級の者どもが（僕達が第一回卒業で、上級生はなかつたのだ）面白がつて、僕のことを教室でも「ええ子、ええ子」というのです。実に思い出しても、ゾツとするいやないやな感じでした。

それというのが、当時は、昔流のヒロイズムが盛んで、非

常に偽善的で、空威張りで、女々しいことが大禁物だった。先生をはじめ「柔弱」という言葉を盛んに使つて、それが極度の輕蔑を意味することになつていた。だから、「柔弱」を意味する「ええ子」なんてあだなは、今諸君が想像されるより、幾十層倍、いやないやな感じを与えたのです。

級中でも年も若く、からだも小さく、気も弱かった。そこへ持つて来て今の「ええ子」なんだから、稚児さん役にもつて来いです。いろんなやつがいい寄るのですね。むろん、十八の娘のように赤面して、そつぽを向いて。そしらぬふりで、その場その場を逃げたものです。僕の中学ではこんなことがなかなか盛んで、僕のほかにも稚児さん役はだいぶあつた。誰さんと誰さんてわけですね。うき名がたつのです。でも、けがらわしい関係はあまりなかつた。僕なんかはきわどいところまで行つたことはあるけれど、一度もそんな経験はなかつた。主にプラトニックなんです。

それに附文つづみが盛んだつた。感傷的な美文なんかでやるのだ。僕もだいふ貰つたが、たいてい返事をしない。たつた一人、どうにも断りきれないで、返事をしたのがある。今から考えるとその男も美少年に相違なかつた。秀才で、画が上手で、剣術が強い。芝居の娘なら早速惚れようつて男でした。この男が、他の中学の上級生に頼んで、その頼まれた男がまた、町で名うての腕つぶしの強い不良だったので、その獐犛どうもつ

なのが僕に呼び出しをかけて、ほの暗い露地の隅で、僕の同級の今の男のいうことを聞けと脅迫するのです。ふるえ上がりましたね。かぶりを縦にふつてしまいました。その男の捨て科白ぜりふがね、あとになつて不承知でもいつてみる、ただは置かないぞ、てんです。そして、ふしくれ立つた腕をギユウと曲げて見せる始末だ。

もつとも、同級のその附文をした男も、まんざらでもなかつたらしいのだが、僕はさつそく返書を認めたしたた。色よい返事ですね。そして、まあ盛んにラヴレターのやり取りをやつたものです。それから間もなく、暑中休暇が来て、先生につれられて知多半島へ海水浴に行つた。生徒中の有志が皆出かける、お寺を宿にして、二週間なり三週間なりからだをきたえて来るのです。

行くと匆々さうさう僕は病氣をやつて、それも大したことではなく、海へ行かぬだけで、別状なく飯も食うし、本も読むといつたふうで、お寺の涼しい座敷にブラブラしていた。碁盤を持ち出して仲の好い連中と、五目並べなんかやつていた。海が近いので磯くさい匂いが部屋に浸み込んでいる。晝は赤ちやけていたが、軒が深くて、向こうの方にクツキリと白く、庭の日当たりが見えている。池、石灯籠いしとうろう、蟬の声、今でも目に浮かぶようです。

夜は幾つも蚊帳かやを釣つて、一つに四、五人ずつ寝る。蚊帳

へはいつてからも大変な騒ぎです。兵隊上がりの小使いが、ラッパがうまくて、物悲しい調子で消灯ラッパを吹く。それからは騒げないことになっていた。ヒソヒソ話に変わるのですね。ところで、たぶん企んだことでしようが、今いった相手の男と僕と一つ蚊帳で、そのうえほかの連中が気を利かして、僕とその男と隣同士に寝かせるのです。僕は別段、それをいやに思うほどではなかつた。ちゃんと覚悟をきめていた。どうも変な男で、おぼろげながら虐げられる快感しいたといったものを、当時知っていたのですね。ところがどうしたものか、相手はそれを知らない年ではないのに、いやに堅くなっている。毎晩別状なく済んでしまう。いささか物足りない感じなんです。そればかりか、相手の男は、何と思つたのか、芝居がかりに、短刀などを蚊帳の中へ持ち込んで、チカチカと抜いてみせる。何でそんなことをしたか、観念している僕の心持がわからなかつたのか、いまだに彼の意図を理解することができません。そしてそれつきりで、何の関係もなくすんでしまつたのです。それから後もずっと。

彼との関係がそんなであつたにもかかわらず、噂の方はだんだん大きくなり、短刀をひらめかした話などが先生の耳にはいった。そして、面倒な問題になつてしまつたのです。お寺の本堂脇の一段高くなつた小部屋に、先生が二人いて、そこへ僕は呼び込まれた。一人は学校を出たばかりの若い先生

だったが、先生の方でも、妙にはにかんでいるんです。

「君は誰それと一緒に蚊帳に寝ているか。脅迫されたことはないか。夜半やはんに変わったことがなかったか」

いいにくそうに、そんな尋ね方なんです。僕もまっ赤になっちゃまって、「いいえ」といつてうつつむいたものです。でも、短刀をひらめかしたことは、証人のある事実だものですから、どうも怪しいということになって、先生から親父のところへ至急親展の手紙が出される。僕には数人の見張り番が付く。相手の男も同様。むろん蚊帳は別にされてしまった。

相手の男はひどく叱られたらしい。でも停学にもならなかった。僕の方は別に叱られはしなかったが、家へ帰るまで、同級生の見張りがつけられたりして、それ以来、先生にはもちろん、同級生達からも一種の変な目で見られるようになった。まあ注意人物なんです。その時の恥ずかしいような、あるいは身のすくむような、その気持ちというものはなかった。死ぬよりもつらい屈辱感が、僕をすっかりだいなしにしてしまった。

これがまあ、僕の稚児さんとしての最も深い印象なんです。で、その事件はそれで一段落ついたのですが、お話というのは、もう一つ別の事件なので、それが先にいった僕の初恋なわけです。同じ級に、これは年輩も背恰好せかつこうも僕ぐらいで、やっぱり相当有名な美少年がいた。この男もほかの中学の不良

連にまで知られ、時々追ひ廻されていたものだが、どうしたきつかけであつたか、どちらが口を切るでもなく、その男と僕といい仲になつた。もつとも全然プラトニツクなもので、顔を合わせると、双方がほにかんで、ろくに口も利けない始末だつた。彼も僕も数え年十五の年だつたと思う。その代わり、ラヴレターは盛んに書いた。そりやもう、ずいぶんだらしないことを書いたものです。その文句のあるものは今でも覚えていますが、中に、「君を食つてしまいたい」なんてものもあつた。うわべだけでなく、心しんからプラトニツクになんてなふうに思つていた。どちらが稚児さんというわけではなく、双方対等の立場で、男女のごとく愛し合つた。実行的なものを伴わないからこそ、そんな真似ができたのです。

当時僕は、内気娘の恋のように、昼となく夜となく、ただもう彼のことばかり思いつめていた。いつとなくそれが同級生に知れ渡つて、いろいろにからかわれる。そのからかわれるのが、ゾクゾクするほど嬉しいのです、うわべは顔を赤らめながら、内心無上の法悦を感じているのです。彼に逢えば、堅くなつて口が利けない。一緒に散歩することなんかあると、ちよつと二人のからだがふれ合つてもゾクツと神経にこたえる。手を握り合つたりすれば、熱が出てからだが震え出す始末です。それでやつぱり手が握りたい。こちらから握るよりも、先方から握つて欲しい。

今でもよく覚えているのは、ある第三者の友達の家で落ち合つて、その男の見ている前で、こつそり手を握り合つた嬉しきです。その男の机に節穴があいていて、僕が上から指を入れると、相手の彼が、下からこつそり握つてくれるのです。あの気持ちは、その後だれに対しても、どんな女性に対しても、味わたつたことがあります。ところが、そんなでいて、僕は最上のものが握手で、キッスでさえ経験しなかつたのですよ。このようなプラトニックな恋はちよつと珍しくはないでしょうか。

だが、悲しいことには、異性の恋が短い以上に、同性の恋は瞬間的です。やがて、三年四年と級が進むに従つて、相手の口辺に薄髭が生え、僕の紅顔にニキビが出はじめた。いやそんなになる前に、何が理由であつたか忘れてしまつたが、二人の仲は、いつとなく遠々しくなつていたようです。そして、間もなく、彼は中学校を終えないで、病のためにはかなく世を去つてしまいました。

そういうわけで、僕の持つていた恋というものは、性的な事柄をまだよくわきまえない少年時代に、しかも同性に対して、注ぎ尽くされた観があるのです。それでも解釈しなければ、その後の恋知らずな僕の心持ちをどう考えればいいのか。むしろ異性に魅力を感じないわけではない。外見上恋とも見えることは一度ならず二度ならず経験した。でも、

それらは皆、どうもにせ物みたいな気がするのだ、性的関係が伴うせいか、何だか不純な、したがってほんとうの恋でないような気がするのだ。

だから、最初にいった、貿易商で儲けた金で遊びを始めたというのも、異性を知ったという肉体上の原因から来る、いわばぎたないものであった。プラトニック時代には、聞いただけでも嘔吐を催した都々逸、端唄の類いをみずから歌った野卑な踊りも嫌いでなくなつた。プラトニックな感じとは、まるで相容れない、あの三味と太鼓の淫猥なリズムを喜ぶようになつた。同時に、おめかしで磨き上げた僕の顔から、プラトニックなものがまつたく影をひそめ、それに代わつて、現に大人の誰でもが普通持つているような、いわば人間的な、あるいは動物的なものが現れて来た。それで何もかもおしまいだという感じだつた。

旅順海戦館

稲垣足穂^{たろほ}氏が、何かの雑誌に、旅順海戦館^{りゅじゆん}という見世物の真似事をして遊んだ話を書いている。あれを読んで私は非常に懐かしい気がした。私もその旅順海戦館に感嘆した子供の一人であったし、そればかりか、やつぱりその真似事をやったことがあるのだ。知己^{ちぎ}に出会った感じだった。

私の見たのは明治四十何年だったか、名古屋に博覧会が開かれた時、その余興の一つとして興行された旅順海戦館であった。キネオラマ応用とかで、当時としてはかなり大仕掛けのものであった。幕があくと、舞台一面の大海原^{おほうみばら}だ。一文字の水平線、上には青空、下には紺碧^{こんぺき}の水、それがノタリノタリと波うっている。ピリピリと笛が鳴り、ひとわたり弁士の説明が済むと、舞台の一方から東郷艦隊が、旗艦^{きかん}三笠を先頭に、勇ましく波を蹴って進んで来る。ひるがえる旭日旗、モクモクと立ち昇る黒煙、パノラマふうの舞台で、おもちゃの軍艦が、見ているうちにさも本物らしく感じられてくる。

やがて反対の方から、敵の艦隊が現れる。そして、はじめは徐々に、次には烈しく、砲戦^{ほうせん}が開始せられる。耳を聳^{もろ}する

三十一歳

1926・8・1
全文

初出 探偵趣味 八月号／
大正十五年 探偵趣味の
会
底本 わが夢と真実／昭和
三十二年八月 東京創元
社

稲垣足穂 明治三十三年—
昭和五十二年（一九〇〇—
一七七）。

旅順海戦館 明治四十三年
（一九一〇）三月十六日
から六月十三日まで名古屋
市の鶴舞公園^{つるまいこうえん}で開催さ
れた第十回関西府県連合
共進会のパビリオン。乱
歩は満十五歳で、第五中
学三年から四年。

砲声、海面を覆う白煙、水煙、敵艦の火災、沈没。

それが済むと夜戦の光景となる。月が出る。今いうキネオラムとかの作用で、月の表を雲が通り過ぎる。船には舷灯がつく、灯台が光る。それが水に映って、キラキラと波うつ、大砲が発射されるたびに赤い一文字の火花が見える。船火事の見事さ。

ただそれだけの見世物だけれども、私たちはどんなにチャームされたことか。それを見た翌日、私と私のもつとも仲好んであつた友達とは、さつそく、私の部屋へその真似事を作る仕事に取りかかったものである。それは四畳半の離れ座敷であつたが、その半分を黒い布で仕切つて、そのまん中に、何十分の一縮小の旅順海戦館をしつらえたのだ。縮小といつてもかなり大がかりで、黒い布でふちどつた額縁の大きさが、横一間、縦四尺はあつた。幅の狭い波布が数十本、前は低くうしろほどだんだん高く張り渡され、その隙間を敵味方の軍艦が動くのだ。おもちゃの軍艦に柄をつけて、波の下から手で動かす。舷灯は線香、煙は煙草、砲声はおもちゃのピストル、月は懐中電灯、船火事はアルコールをしませた綿。

でき上がると、近所の小さい子供らを集めて、見物させた。黒布のうしろから、私の友達の得意のせりふが響くのだ。小さい子供たちがどんなに喝采したことか。私という男はなんとまあ今でも、こんなおもちゃを拵えてみたい気がするのだ。

そうした癖は、考えてみると、私の生まれながらのものであったのかもしれない。もつとずつと小さい時分から、それに似た遊びを好んでやったものである。一例を上げるならば「朝日」煙草二十個人入りの空き箱を貰つて、その一方に小さな穴をあけ、中にはボール紙の廻り舞台をしつらえ、芝居でいうなら大道具に相当する紙細工を立て、糸で吊つた紙人形を、その前でコトリコトリと動かして、声色こわいろを使い、いわば、ダーク人形のまねごとをする。それを覗のぞきからくりのように、自分より小さい子供に、前の穴から覗かせて、得意になつていたものだ。

その二、三寸の舞台がまた、なかなか凝つたもので、大道具にはドアもあれば窓もついていて、そのドアがひらいて、舞台裏から紙人形が登場する。窓の向こうには遠見とほみの書割かきわりがあつて、その前を首だけ見せた人形が通り過ぎる。マッチ箱ぐらいの紙の箱が舞台の中ほどに置いてあつて、糸のあやつりで、蓋かたがあくと、中から舌切り雀の化け物どもが、ろくろ首をのびしたりする。そして、チョンと木がはいるとギーと舞台が廻るのだ。

宇野浩二氏の小説には、おそらくそれは宇野氏自身のことなんだろうが、押し入れの中で幻灯を映して楽しんでる子供の話がある。私もやつぱりそうだった。当時影絵芝居というものがあつて、それがまた何とも魅力に富んだ興行物だつ

宇野浩二 明治三十四年—

昭和三十六年（一九九一—

一九六二）。小説とあ

るのは大正十一年（一九

二二）の短篇「夢見る部

屋」。

た。舞台の前方に布を張り、そのうしろに幻灯器械を何台もすえつけて、黒いところに白く人の形などを書き、それに着色した絵を映す。からくり仕掛けで、人が化け物に早変わりしたり、あるいは手を動かしたり、足を動かしたりする。一人の人物なり品物なりに一台の幻灯器械を使い、その筒口を動かして幕の上の人物を歩かせる。むろん声色鳴り物入りだ。

南北 鶴屋南北。宝曆五年

— 文政十二年（二七五五

— 一八九二）。

うバスの声にしながら、どうでもいいといった、なげやりな調子で、安達ヶ原の鬼婆が子供を食う時の声色なんかをやるのだ。まっ暗な客席、黒い幕、そこへ映るあくどい色彩の夢の中の花のように印象的な人物、Uの字なりに裾の曲がった幽霊、頭でつかちのお化け、一つ目小僧、ろくろ首、その魅力がどんなに強烈なものであったか。私はそれを私自身の小さな幻灯器械で、真似してみようと思ったのである。二つの器械に、自分で描いたからくりつぎのガラス絵をはめて、カタリカタリと動かしながら、お爺さんのバスを真似た声色で、「この赤ん坊は、あぶら^け気が足りぬわいな」なんて、独りで楽しんでいたものだ。

さて、それにつけても、思い出すのは、かのパノラマという見世物である。瓦斯^{ガス}タンクに似て、突然空高くそびえたあ

の建物の外見からして、まず子供の好奇心をそそらないではおかぬ。狭い入口、トンネルのようにまつ暗な細道、それを出抜けると、パツと開ける眼界。そして、そこには今まで見ていたのとはまるで違う別個の宇宙が、空から地平線までちやんと実物どおりに存在しているのだ。何というすばらしいトリックだ。私は最近何かの本で、パノラマ発明者の苦心談を読んだが、彼は、丸く囲んだ建物の中に、彼の思うがままの別の宇宙を作つてみたいという考えから、あの発明を企てた由であるが、世界を二重にするという彼の計画は実に面白い。丸い背景だからそこに描かれた地平線には端がない。空は見物席の天蓋てんがいにさえぎられて、その上方から、日光そのままの光がさしているのだから、やつぱり無辺際むへんざいに高く感じられる。小さな輪の中にいて、広い実在世界と同じ幻覚を起す。その小天地の外側に、もう一つのほんとうの世界があるのだ。現実化されたお伽話おとぎばなしである。少なくとも発明者の国の原作パノラマは、そんな感じを与え得たに相違ない。

そして、やはり少年時代の思い出として、もう一つ浮かぶのは例の幽霊屋敷、八幡やわたの藪知やぶしらずである。私は影絵芝居を見、パノラマを見たそのおなじ町の中の広っぱで、この八幡の藪知らずをも見た。それら三つのものは、つながって私の記憶に浮かぶのだ。藪知らずについては、本号の編集者横溝君が、かつてこの雑誌に書いた事がある。彼もさすがに探偵

横溝 横溝正史。明治三十四

五年—昭和五十六年（一

九〇—一一八）。

趣味家である。神戸の町に開かれたその興行物を人波におされながら見物した由である。私は惜しいことに子供の時分だけで、その後つい見る機会を得なかつたけれど、簀知らずで今も私の印象に残っているのは、酒呑童子しゅてんのいけにえか何かの若い女が赤い腰まき一枚で立っている姿。案内人が見物の顔色を見ながらその腰まきをヒヨイとまくると、内部に精巧な細工がほどこしてある。子供心に驚嘆したものである。後に至つて人形の歴史みたいなものを知るに及んで、昔元禄時代かに流行した浮世人形なるものは、皆やつぱりこの仕掛けがしてあつて、広く愛玩されたということがわかつた。

もう一つは、汽車の踏切の轢死れきしの実況を現したもので、二本の鉄路、簀やぶ、夜、そこにバラバラにひきちぎられた、首、胴体、手足が、切り口からまっ赤な血のりを、おびただしく流して、芋か大根のように転がっているのだ。その嘔気はきけを催すような、あまりにも強烈な刺激は、今に至つても心の底にこびりついている。谷崎潤一郎氏「恐怖時代」を形で現したといつていい。そのことを横溝君に話したところ、同君はおおいに感激して、探偵小説にそういった味を採り入れるのは面白かろうと、さつそく「踏切何とか」という一小説を物した由である。まだ発表されていないけれど、さだめし面白いものに相違なく、発表の日を待っている。という、その味は、つまるところ大南北の残虐味と一脈相通あいっつうするものであろう。

谷崎潤一郎 明治十九年

—昭和四十年（二八八六

—一九六五）。

さて、この一文、旅順海戦館はどこへ行ったのだ。そしてまた探偵小説とはどういう関係があるのだ。とひらきなおられると、いささか閉口である。稲垣氏の旅順海戦館から、ふと思い出して書き始めたが、いつかこんなものになつてしまつた。読者諒これをりやうせ焉。

準名古屋人

五十六歳

1951・10・6
抜粋

私は満二歳の時から満十七歳、中学を出るまで名古屋に住んでいたのですが、本籍は三重県津市のだが、愛知県人としても通用するようである。名古屋市では園井町、葛町などにもちよつといたが、南伊勢町の元の株式取引所の前に最も永く住んだ。学校は南伊勢町に近い「白川尋常小学校」、そこからほど遠からぬ「市立第三高等小学校」、御器所の「県立第五中学校」（後に熱田中学校と改称）で五中は創立第一回の入学生であった。

東京に「東部五中会」というのができていて、一回から二十回ぐらいまでの卒業生が、年に一、二度集まって回顧談をやる。そこでよく顔を合わせるのは竹内芳衛、谷川徹三、山本三郎の諸君である。

中学校時代は病身でよく学校を休んだので、あまり優秀な生徒ではなかった。自慢するような思い出話もない。記憶しているのは悪いことばかりで、そのうちでも最大の汚点は、中学四年生の時に停学を命ぜられ、一か月あまり昔の閉門同様に自宅に蟄居ちつきよしたことであろう。その頃私は寄宿舎に入っ

初出 名古屋タイムズ 十

月六日号/昭和二十六年

名古屋タイムズ社

底本 うつし世は夢/昭和

六十二年九月 講談社

谷川徹三 明治二十八年—

平成元年（一九九一—

一九八九）

中学四年生 明治四十三年

（一九一〇）四月から翌

年三月まで。

寄宿舎 『貼雑年譜①』に

「三年生ノ頃、余リ学校

ヲ休ムノデ医師ノ健康診

断ヲ乞フタトコロ、心臓

ガ弱イトイフコトテ、速

イ道ヲ通学スルヨリハ学

校内ノ寄宿舎ニ入ツテハ

ト私ノ父方考ヘ、私モ境

遇ノ変化ヲ喜ンデ同シ

タノテ、暫ク寄宿舎生活

ヲ送ルコトニナツタ」と

ある。

ていたのだが、同宿の悪友二人と申し合わせ、満州に渡って
牧畜をやるうと、寄宿舎を逃亡したところ、まだ汽車にも乗
らないうちに捕まってしまい、処罰されたのである。その時
の主謀者の不良少年は、今では東京某大学の物理学教授にな
っている。

うつつし絵

四十二歳

1937・5・1
抜粋

「うつつし絵」は僕の子供の頃の名古屋では「影絵」と呼んで、広小路通りの空き地などに小屋がけをして、よく興行していたものだが、映写幕の真つ黒な中へ、赤青黄と、ちようどネオン・サインのようなドキドキした原色の、おいしそうな色彩を施した幻灯絵の人物が、ヒヨコヒヨコと現れて、カタカタと首や手足を動かし、斬りつけられると、カタンと倒れて傷口から真赤な血を吹き出したり、映写幕一杯の生首が現れて、口から血をたらしながらゲラゲラと笑ったりする、あの活動幻灯の不思議な魅力は、その当時のパノラマ館、博覧会の旅順海戦館、八幡敷知らずの化物屋敷、黄花園の菊人形、チャリネの曲馬団などとともに、僕の幼い頃の幻想と怪奇への甘い郷愁になっている。

初出 探偵春秋 五月号／

昭和十二年 春秋社 *

連載「蔵の中から」第八

回

底本 蔵の中から／昭和六

十三年一月 講談社

黄花園 名古屋黄花園。明

治二十三年（一八九〇）、

名古屋市中区裏門前町万

松寺通に開設。

「人外境」感想

四十四歳

1938・11・15

抜粋

私は少年時代、何ともいえぬ不思議な愛着を覚えた探検小説が二つある。その第一はハッガードを訳した菊池幽芳氏の「二人女王」、第二はこの涙香の「人外境」であった。「二人女王」は、探検小説というものに初めてぶつつかつたためでもあろうが、それを読んで数日のあいだは、作中人物の姿が幻となつて消えやらぬほどであった。「人外境」はそれよりずっと後に読んだので、「二人女王」ほどには感じなかつたけれど、しかし、一度読みかけたら本を離すことができず、食事に呼ばれても返事もしないで読み耽つた記憶がある。

私が当時読んだのは、明治三十年頃に出版された三冊ものの初版本であったが、それには一冊ごとに木版色刷りの折り返みの口絵がついていて、その一つに、全身に針の生えた恐ろしい鎧よろいを来た黒天女が、敵軍の男子を抱きしめて、鎧の棘とげで刺し殺している絵があつたように記憶している。この黒天女の勇猛無比な女軍はギリシャ神話のアマゾネスなどから着想されたものであろうが、その口絵の美しくまた恐ろしい蛮女の姿が、今もなお私の臉まぶたに残っているほどである。

初出

人外境／墨墨涙香著
昭和十三年十二月 春

陽堂書店

底本

蔵の中から／昭和六

十三年一月 講談社

「破天荒」感想

四十四歳

1938・12・15
抜粋

「破天荒」^{はてどろ}は、柳田泉氏の「黒岩涙香著訳小説目録」によると、明治三十六年の六月から十一月にかけて、「万朝報」^{よろずちようほう}紙上に、月来庵主人訳という署名で連載せられ、明治四十三年に初めて単行本となったものである。原作はジョージ・グリフィスの「空中新婚旅行」というものの由であるが、私はこの原作を知らない。

私は少年時代、右の初版本で、この小説を読んだ時の面白さを今でも忘れることができない。これは天文学小説でもあり、一種のユートピア小説でもあるのだが、当時の私はそのいづれにも、並々ならぬ興味を寄せていたからである。初版本には数葉の折り畳みの口絵がついていて、それにさまざまの天体図がまるで天文学の教科書のように載せてあった。そのうちには月世界の大きな詳細図もあって、山や川や谷の名がいちいち片仮名で記入してあったのを記憶しているが、そういう風変わりな体裁がまた私をひどく喜ばせた。

初出 破天荒／黒岩涙香著

昭和十三年十二月 春

陽堂書店

底本 蔵の中から／昭和六

十三年一月 講談社

柳田泉 明治二十七年―昭

和四十四年（一八九四―

一九六九）。

ジョージ・グリフィス

George Griffith（イギリス、一八五七―一九〇六）。

私の読書遍歴

五十七歳

1952・5・7
抜粋

私の読書は少年時代から今にいたるまで散歩的であり、放浪旅行的である。気が向いた時に気が向いたものを読む。ちよつとの散歩で帰ることもあり、思わぬ長旅、長逗留になることもある。

少年時代には小波山人の「世界お伽噺」（日本お伽噺ではない。王子や魔法使いの出る方のお伽噺）、押川春浪の冒険小説、黒岩涙香の翻訳小説の三つに心酔した。立川文庫も読んだけれど、多くの人々がいうほどには耽読しなかった。私は生来「水滸伝」ふうの面白さを解しない性格で、立川文庫にはそれと近似した味があつたからであるう。したがつて私は「八犬伝」も通読していない。

文壇小説では、田山花袋の「蒲団」にはじまる自然主義というものが、どうも私の性に合わなかつた。今でもそうだが、私は少年時代から愛欲告白文学というものを好まなかつたのである。少年期には大人の小説もいろいろ読み、紅葉も漱石も通読していたし、露伴の「対髑髏」、鏡花の「夜行巡查」、柳浪の「黒とかげ」などは今でも心に残っているほどだが、

初出 日本読書新聞 五月
七月号／昭和二十七年
日本経済新聞社
底本 わが夢と真実 昭和
三十二年八月 東京創元
社

自然主義になつてから、私はバツタリ小説を読まなくなつた。そして、ずっとあとになつて、谷崎、芥川などの反自然主義文学が起こつてから、ふたたび文壇小説を読むようになった。その頃は谷崎潤一郎、佐藤春夫、宇野浩二という順で心酔して行つた。芥川はこの三人ほどには夢中になれなかつた。白樺派もやはり愛欲告白体なので私の性に合わなかつた。そういえば宇野浩二も告白体だが、私は初期の作品にこもる異常性に惹かれたのである。

芥川 芥川龍之介。明治二十五年―昭和二年（一八九一―一九二七）。

佐藤春夫 明治二十五年―昭和三十九年（一八九二―一九六四）。

影響を受けた本

五十八歳

1953・10・9
抜粋

子供のころ、父の書架から取り出して読んだ通俗天文学書が、私をニヒリストにした。子供心というものは恐ろしい。今でもその時の深刻な感動から抜け切っていない。中学校ではダーウインの進化論が私のこの傾向にさらに仕上げをした。明治時代に読書期を持ったものは今のマルクスからと同様の感動をダーウインから受けていると思う。

初出 読売新聞 十月九日
号／昭和二十八年 読売
新聞社
底本 うつし世は夢／昭和
六十二年九月 講談社

わたしの古典

六十一歳

1956・9・17
 抜粋

少年期から青年期にかけて、わたしの物の考え方に最も強い影響を与えた本は、通俗天文学書と、ダーウイニズムと、姉崎さん訳のシヨペンハウエルであったように思っている。いづれもペシミスチックな受けとり方においてであった。つまりわたしは生まれつきと、育ちにおいて、すでにして弱者であったのを、この三つの本が弁護し、裏書きしてくれたようなものである。ニーチエの邦訳も後年傾倒して愛読したが、わたしの性格にはシヨペンハウエルの方が、もつとシツクリしていた。

初出 日本読書新聞 九月
 十七日号／昭和三十一年
 日本出版協会
 底本 わが夢と真実／昭和
 三十二年八月 東京創元
 社

槐多「二少年図」

三十九歳

1934・6・1
抜粹

最も早く村山槐多かいたの存在を私に教えたものは、絵ではなくて、彼の探偵小説であった。その頃私は名古屋に住んでいて、中学上級生であったが、愛読していた「武俠世界」(あるいは「冒険世界」であったか)にのつた、彼のミステリー・ストリー「悪魔の舌」が従来の読み物とはまったく違った、ギリギリと五彩に輝く魅力をもつて、私をうつつた。彼は一体、このような悪魔の感情を、どこから仕入れて来たのであろう。彼が十七歳の頃、早くもあこがれていたという、ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボオ、そして、その奥の方には、ポールの犀利さいりな黒い瞳が光っていたのではないか、少なくとも「悪魔の舌」は理知の恐怖を見逃してはいなかったのである。

初出 文体 六月号／昭和九年 文体社

底本 わが夢と真実／昭和三十三年八月 東京創元社

村山槐多 明治二十九年—

大正八年(一八九六一—九一九)。「悪魔の舌」は「武俠世界」大正四年(一九一五)八月号に掲載された。乱歩は満二十歳で早稲田大学に在学中だった。

探偵映画往来

五十三歳

1948・8・1
抜粋

日本に初めて活動写真が公開され、汽車が驀進^{ぼくじん}して来たり、波濤^{はとう}や滝の実写を見て、夢を生み出す機械の魔力に驚嘆したのは、私の小学校初年級の頃であつたと思う。しかし劇映画として最も強く私の魂を動かしたのは、小学上級生の頃、当時の名物弁士スコブル大博士が名古屋の御園座^{みそのざ}へ持つて来たピアノ伴奏の「ジゴマ」であつた。友達と二人で同じ映画を三晩つづけて見に行ったことを覚えている。「カリガリ博士」に心酔したのはそれからまた十年あまり後であつたが、小学生時代の「ジゴマ」と大学卒業後の「カリガリ博士」と、感銘度においてはほとんど同じであつた。

初出 スクリーン・ステアー
 ジ 八月号／昭和二十三年
 年 スクリーン・ステアー
 ジ新聞社
 底本 うつし世は夢 昭和六十二年九月 講談社
 ジゴマ 一九一一年公開のフランス映画。御園座では明治四十五年（一九一二年）四月六日から十五日まで上映された。乱歩は同年三月に県立第五中学校を卒業。

わが青春の映画遍歴

六十二歳

1956・11・1
抜粋

私はかぞえ年六十三だから、青年時代の思い出となると、どうしても無声映画である。しかもその感激の最初は明治末期の「ジゴマ」に遡るのだから古いものだ。「ジゴマ」を見たのは中学一、二年のころ、当時住んでいた名古屋市の御園座みづにおいてであった。そのころ著名の弁士兼興行師であった「スコブル大博士」駒田好洋こうよう（好の字がちがうかもしれない）という人が、「ジゴマ」を持って地方巡業をしていたもので、痩せ型でメフィストめいた風貌の駒田氏が、コーモリの羽根のような黒いインバネスコートの袖をひるがえして、前説をした光景が今も目に浮かぶ。伴奏はピアノだけ。それがまたひどくハイカラで、神秘的とでもいうような感じを受けたのである。

私は近所の仲のよい友達とふたりで、御園座興行中に三度も見に行ったものである。そのころまで、私たちは劇映画というものをまったく見ていなかったので、「ジゴマ」の追っかけものでも、なかなか高級に感じられたものである。昭和になつてから、この「ジゴマ」の回顧上映を二度ほど見たが、

初出 スクリーン 十一月
号/昭和三十一年 近代
映画社
底本 乱歩随想/平成元年
三月 講談社

駒田好洋 明治十年—昭和
十年（一八七七一—一九三
五）。

フィルムが変色したり、ちぎれたりしているうえ、一秒間の
齣^{コマ}数がちがう関係か、恐ろしく動きの早い映画になっていて、
ただ幻滅のほかはなかった。

私の十代

六十歳

1955・1・21
抜粋

少年時代は家が豊かで仕合わせだったが、中学を出た年（満十七歳）父の事業が失敗したので、苦学（今のアルバイト）をして、満二十一歳で早稲田の政経学部を出た。苦学生だから青春の花やかな思い出は何もない。

初出 朝日新聞 一月二十
一日号／昭和三十年 朝
日新聞社
底本 わが夢と真実／昭和
三十二年八月 東京創元
社

涙香心酔

1953・3・24
抜粋

そういうわけで、中学一、二年のころに涙香は一通り読んでしまつたが、中学を卒業するころ、父の事業が破産し、父は朝鮮に渡り、私は苦学の決心で上京して、早稲田大学の予科に編入試験を受けて入つたのが、明治四十五年（大正元年）の夏、一年ほどは、湯島天神下の小さな活版屋の小僧をやつたり、写字生をやつたりして、学校に通つていたので、小説を読む時間もなかつたが、大正二年の春ごろから、例の母方の祖母が牛込喜久井町にささやかな家を借りて、私と二人で暮らすことにしてくれたので、しばらく自分で稼ぐ必要がなくなり、そのころやはり喜久井町にあつた貸本屋から、また涙香本を借り出して、すっかり再読したことがある。

大正二年といえ、私は算え年二十歳になつていたのだが、不思議と文学界のことに不案内であつた。中学時代新聞の連載で漱石を二つ三つ読みつづけ、それが機縁となつて漱石のものはかなり読んでいたし、紅葉、露伴、鏡花などの古いものや（露伴の「対髑髏」や鏡花の「夜行巡查」などには、子供ながら、深く感銘した記憶がある。柳浪はまだ読んでいな

初出 新青年 十月号／昭和二十四年 博友社 *

連載「探偵小説三十年」

第二回

底本 探偵小説四十年／昭和三十六年七月 桃源社

漱石 夏目漱石。慶応三年

—大正五年（一八六七—一九一六）。

かった)花袋かたいの「蒲団ふとん」に始まる日本自然主義文学は、いろいろ読んでいたが、どうもこの自然主義小説というものが、私には面白くなかった。ひどく性的な小説という印象を受けただけで、こういう性生活の日記のごときものには私は興味を持てなかった。あのころ、純文学は面白くないものだという考えが浸みこんだのであろう、私はだんだん文壇の小説を見向かなくなり、文壇のことにはまったく無智になってしまっていた。あとで考えてみると、谷崎潤一郎が「新思潮」に「刺青」や「麒麟きりん」などを発表したのは、明治四十三年、私の中学四年のときに当たる。私はそういう新文学運動を少しも知らないでいた。中学の国語の先生が「このごろ、谷崎という若い男が妙な小説を書き出して評判になっているが、ああいう不健全なものは読まない方がいい」といったのを耳にはさんだけれども、そんな不健全なものなら一つ読んでみようという考えも起こさなかった。

大学に入ってから、ロシア文学の翻訳などもいくらか読んだが、苦学生で時間と金に余裕がなかったので、文学青年になるには至らなかつた。大学でも政治経済科を選び、文学など見向きもしなかつたことでも、当時の私の性格がわかるであろう。「中央公論」の小説欄たんらんを耽読たんとくするようになったのは、大学を出て一、二年後、二十五、六歳のころであった、谷崎潤一郎の小説を初めて読んだのも大学卒業の翌大正六年、二十

四歳のときであった。

それにつけても思うのだが、思索型、文筆型の人間にとつて、当時の日本では、官立大学の高等学校を通過していないことは生涯の不幸であった。高校時代（当時は尋常小学四年、高等小学四年、高等小学二年から中学の入試が受けられた。中学五年、高等学校三年、大学三年の制度）はちようど自己並びに人生に対する深刻な疑義に悩まされる年頃で、哲学、文学などに先人思索の跡を辿ろうとする欲望の最も旺盛な時期である。その時期の三年間を、適当な指導者を持ち、互いに啓発する学友を持ち、語学力を持ち、内外古今の名著を片っぱしから読破することに、時間の大部分を費し得る高等学校時代というものは、それを経験しなかったものにとつては、実に羨ましい時期であり、この時代に吸い込まれた雑読による教養というものは、一生涯身について離れず、高等学校を通過したものと、そうでないものとのあいだに劃然たる相違ができてしまうのである。

私はちようど、高等学校の入学試験を受けようとしていたとき、父の破産に会い、当時は苦学の困難であった官立学校を思いとどまって、その可能な私学を志したのだが（実をいうと、休んでばかりいたために、中学の成績もあまりよくなかった私は、高校の入試を受けなくてもすむことを、かえって喜んでいた形跡がある）早大の予科へ、しかも中途から

編入したので、予科は正味一年あまり、そのうえ、稼ぎながらの通学であったから、時間もなく本を買う金もなく、広く先人の名著に目をさらすなど思いもよらぬことであった。そして、大学部になると、基礎教養は乏しいままに、やはり専門の学問に興味が生じてくるので、その方に忙しく、一般的教養を身につける時間はなかった。

父母のこと

六十二歳

1957・8・25
抜粋

私が生まれるとまもなく、父は同じ三重県の鈴鹿郡書記に転じ、亀山町に移り住んだが、明治三十年頃、東海紡織同盟会名古屋支部書記長に転じ、名古屋市の大きな家に住んで、事務員や書生を置き、事務所兼住居とした。そういう職に就いたのも父の商法の知識が物をいっただので、斡旋あつせんはおそらく関西大学時代の先生とか先輩であつたと推察される。

やっぱり商法の知識のお蔭かげだと思いが、三、四年のうちに、当時名古屋市の大財閥であつた奥田正香商店まさかの支配人となり、また、名古屋商業会議所の法律顧問のような役目を兼ねた。そうして、だんだん名古屋財界に顔ができて来たので、明治四十年には独立して、南伊勢町の当時の株式取引所の前に平井商店を開き、諸機械輸入販売、石炭販売、外国保険会社代理店を営み、十余名の店員を置いて、一時はなかなか派手な商売をした。

一方、奥田商店支配人時代から、自宅で特許弁理士を開業、これが名古屋最初の弁理士だったので、おおいに繁昌していたが、平井商店を開いても、この弁理士業を兼営していた。

初出・底本 わが夢と真実
／昭和三十二年八月 東
京創元社

自宅もやはり南伊勢町にあり、商店とは半丁もへだたつていなかった。父は両方かけもちで仕事をしたのである。商店には支配人がいたし、弁理士の方にも事務員や製図家（せいず）がいたので、父は方針さえさずければよいのだが、それにしても、面会、出願書の口述、手紙の口述、商店の方の来客との応接、店員一人一人への指図、等々、よくもあんなに八面六臂（はちめんろくべい）に働けるものだと、人々を感じさせたものである。

父は明治期の主流をなしていた政治経済上の自由主義者であつたばかりでなく、生活上でも極度の自由主義者であつた。子供などにも自由放任の態度で、何の干渉もしなかつた。癩（か）癩（しやく）を起こして叱ることはあつても、ああしろ、こうしろと、うるさく指図することはなかつた。

父は学生時代に徳利を机のそばに置いて勉強したというほどで、酒を愛した。酔えば歌いもし、踊りもした。ただし歌は音痴、踊りは高山彦九郎ぐらいのものであつたが。したがつて酒席を愛し、商売上の必要もあつて、そういう世界に入りすることが多かつた。二号を囲うというほどではなかつたが、世話をしている芸者などは、いつもあつたようである。商店をはじめるとまもなく、県下に支店を置き、正月には平井商店のハッピを着た数十人の石炭仲仕（いしかんちゆうじ）が、勢揃いをして御祝いに来たものである。

父は法律的な理論家で、事務的才腕ははなはだ優秀だつた

が、政治的、商業的才能は劣っていたのではないか。大商店の支配人としては申し分なくとも、自分の商売となると、どこかに弱点があった。人を信じすぎた。また厚顔なねばりに欠けていた。あつさり投げ出す方であつた。明治四十五年に不況時代が来た。あてにしていた入金がなく、手形の書きかえができないようなことが続出し、わずか五年にして、平井商店は破産し、私たちは一夜にして一文なしになつてしまつた。父は涙を流して私たちにお詫びをいふた。

それが私の中学卒業の年であつた。近くの八高の入試を受けるつもりで、受験票ももらつていたのだが、文なしになつては官立学校へは入れないので、思い切つた。そして、父と一緒に朝鮮に高飛びした。わずかに残つた資金で荒蕪地の開墾をやるうというのである。父は前に朝鮮視察をしたことがあり、朝鮮にはまだ荒蕪地が多く残つていることを知つていたのである。

私たちは馬山の父の旧友の家におちついて、方途を謀つたが、なかなかこれという土地もなく、一か月ほど、なすこともなくすごすうち、私はやつぱり学校へ行きたくなつた。大隈さんの早稲田大学がいい、あすのなら苦学でやつていけると思つた。父にそのことを相談すると、それじゃやつてみると許してくれた。

私は旅費だけをもつて上京し、横浜の親戚の世話で、湯島

八高 旧制第八高等学校。
名古屋大学の前身校のひとつ。

天神下の小さな印刷屋に住みこんで、活版の見習い職工となり、早大政治経済科の予科に通うことになった。

父はその後母や私の弟妹たちを朝鮮に呼びよせ、土地測量士をやったり、ある会社の委託を受けて金山発掘の事務所長になったり、いろいろな仕事をしたが、ふたたび旧に復することができず、晩年には大阪に移り住んで、綿布問屋の株式会社の監査役（月給重役）を数年つとめているうちに、大正十四年九月、大阪市外守口町（今の守口市）の住居で、咽喉癌によつて死去した。

母は娘のころは、きかぬ気の負けずぎらいで、友達と争つても決してひけを取らぬ強い性格だったというが、結婚して、その性格が一変した。十歳も年上の父に圧倒され、何でも知つている祖母に圧倒され、唯々いひだぐだぐ諾々の人となった。母は嫁しては姑しゅうとに従い、老いては嫁に従つた。「私は丑うしの年だから、めつたに怒らない。その代わり怒つたらとめどがない」と、母は口癖のようにいつていたが、私はとめどなく怒つたのをまだ見たことがないのである。

私がまだ小学校に入らぬころ、父が勤めで帰りのおそくなることが多く、秋の夜のつれづれに、祖母は他家騒動の講談本を、母は涙香るいこうの探偵本を、近くの貸本屋から借りてきて、ランプの下で読んでいるのを、私はそのそばに寝ころんで、

涙香本の怖い挿画を見たり、その話を聞かせてもらったりしたもので、私の探偵小説好きの素地はそのころから養われたようである。

父は小説などわからない方だったが、母は人並み以上に小説好きだった。一身田いしんたに小間遣こまづかいを勤めていたころは、朋輩ほうはいといっしょに、田舎源氏などの草双紙くさごしを読み耽り、嫁入つてからは、右の探偵物を愛読した。新聞小説なども、欠かさず読んで、私に話してきかせてくれた。私の小説好きは母の影響らしいのである。

母は今年数え年の八十一歳で健在。用心して外出はしないけれども、家の中ではコマコマと働く方で、小さく痩せてはいるが、なかなか健康である。

母 昭和四十一年（一九六

六）死去。